岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第４２６集

玉川向（たまかわむかい）遺跡発掘調査報告書

通常砂防事業関連遺跡発掘調査

二戸地方振興局土木部

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

たまかわむかい
玉川向遺跡発掘調査報告書

通常砂防事業関連遺跡発掘調査

序

本県には旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、平成15年現在で１万カ所以上の遺跡が確認され、登録されております。これらの先人の残した文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を保有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実もまた重要な一政策であります。今回のような砂防事業も土砂災害を防止し、住民の生活を快適にし守るための重要な施策と言えます。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発の調和も今日的課題であり、当文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、「荒廃砂防事業」に関連して、平成14年度に実施した玉川向遺跡の調査結果をまとめたものであります。調査調査では縄文時代から弥生時代にかけての竪穴住居が多数発見されました。特に縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけて位置づけられる資料が得られ、貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助・ご協力を賜りました二戸地方振興局土木部・軽米町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成16年２月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　合　田　　武

例　言

1．本報告書は、岩手県九戸郡軽米町大字小軽米第17地割字玉川向平85－1ほかに所在する玉川向遺跡の発掘調査成果を収録したものでる。

2．本遺跡の調査は、通常砂防事業に伴い行われたものである。調査は岩手県教育委員会と二戸地方振興局土木部との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．岩手県遺跡台帳の遺跡番号はＪＦ15－0334、遺跡略号はＴＫＭ－02である。

4．発掘調査面積は1,000㎡である。

5．発掘調査期間及び調査担当者は以下のとおりである。

平成13年４月12日～６月17日　文化財調査員　村木　敬・文化財調査員　青山　紀和

6．室内整理及び整理担当者は以下のとおりである。

平成14年11月１日～11月30日　文化財調査員　村木　敬

7．野外での写真撮影は村木　敬、遺物写真撮影は福士昭夫が担当した。

8．本報告書の執筆・編集・構成は、村木が担当した。なお、第Ⅰ章調査に至る経緯は二戸地方振興局土木部に原稿を依頼している。

9．野外調査にあたり二戸地方振興局土木部、軽米町教育委員会の御協力を頂いた。

10．分析、鑑定、保存、委託業務は以下の方に依頼した。

埋設土器内の胎土分析　パリノサーヴェイ株式会社

石材鑑定　花崗岩研究会

基準点測量業務委託　有限会社　協栄測量

11．発掘調査、本報告書の作成にあたっては下記の方々にご指導いただいた。（順不同、敬称略）

藤田直行（軽米町教育委員会）、大川茂樹（軽米町郷土資料館）、宇田川浩一（秋田県埋蔵文化財センター）、森一欽（釜石市教育委員会）、高瀬克範（東京都立大学）、西田昌弘（石川県教育委員会）、中川真人（城山町教育委員会）、日下和寿（岩手県教育委員会）藤沼邦彦（弘前大学）

12．調査成果はこれまでに現地説明会資料や岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第423集『岩手県埋蔵文化財調査略報』に発表してきたが、本書の内容がこれに優先するものである。

13．土層の色調観察は、「新版標準土色調」（農林水産省資産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色表監修1989）を用いた。

14．本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県埋蔵文化財センターが保管している。

目次

序
例言

第Ⅰ章　調査に至る経緯　・・・・・・・・・1
第Ⅱ章　位置と環境
　1．位置・立地　・・・・・・・・・1
　2．地形・地質　・・・・・・・・・1
　　1）岩手県軽米町の地形・地質　2）遺跡周辺の地形・地質
　3．周辺遺跡　・・・・・・・・・9
第Ⅲ章　調査概要と整理方法　・・・・・・・・・11
　1．野外調査の方法　・・・・・・・・・11
　　（1）グリッド設定・（2）遺構名称・（3）粗掘り・遺構検出・精査
　　（4）実測方法・（5）写真撮影・（6）広報活動
　2．調査経過　・・・・・・・・・12
　3．室内整理方法　・・・・・・・・・13
　　（1）作業手順・（2）遺構・（3）遺物・（4）遺物掲載基準
　4．凡例　・・・・・・・・・13
　5．土器の分類　・・・・・・・・・15
第Ⅳ章　基本層序　・・・・・・・・・17
第Ⅴ章　検出された遺構と遺物
　1．概要　・・・・・・・・・20
　2．縄文草創期から中期末の遺構・遺物　・・・・・・・・・20
　　（1）埋設土器・（2）陥し穴・（3）焼土・（4）土坑・（5）遺構外遺物
　3．縄文時代晩期末から弥生時代初頭の遺構・遺物　・・・・・・・・・30
　　（1）竪穴住居
第Ⅵ章　まとめ　・・・・・・・・・75
第Ⅶ章　自然科学分析　・・・・・・・・・86

図版目次

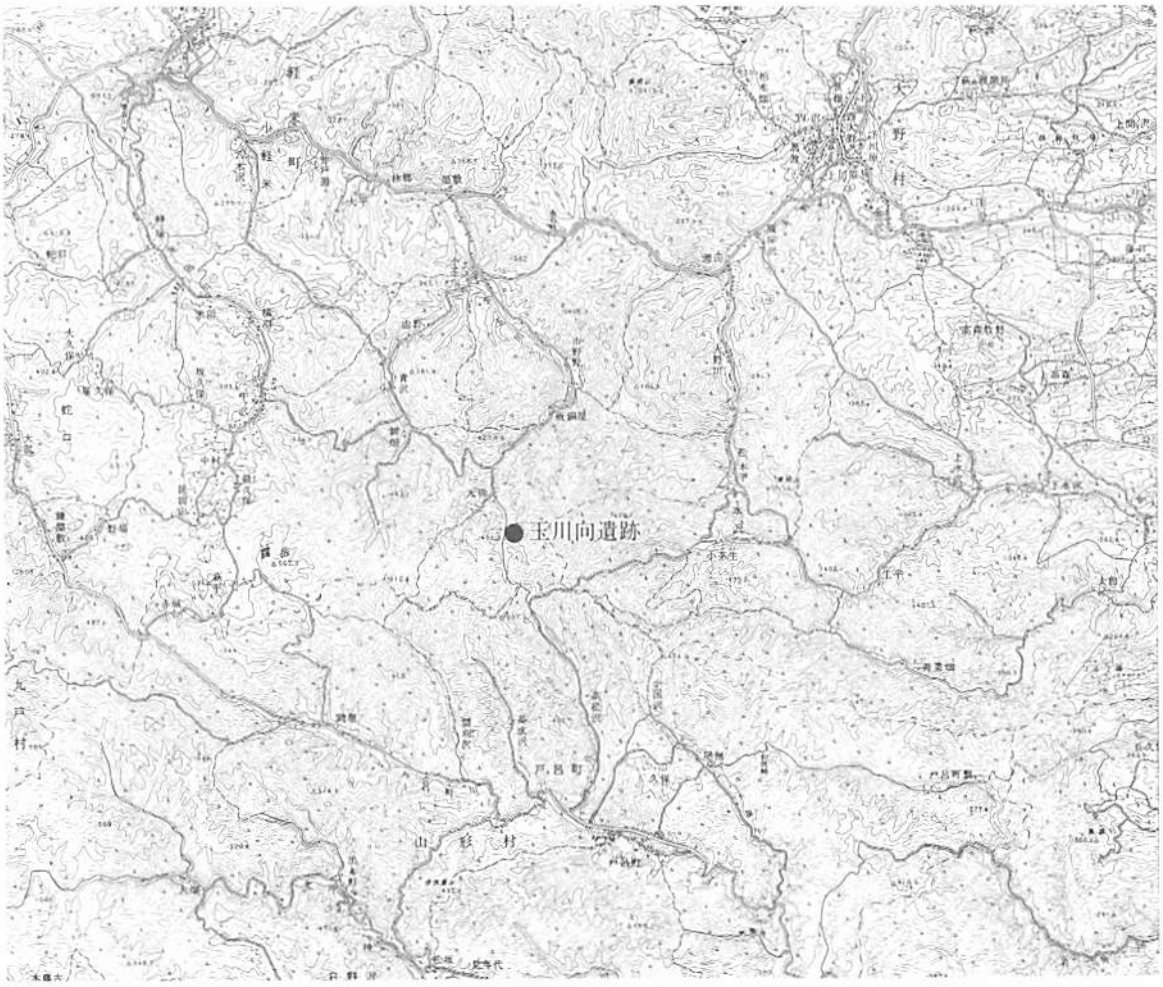
第１図　遺跡位置図
第２図　遺跡周辺図　・・・・３
第３図　地形分類図　・・・・４
第４図　表層地質分類図　・・・・５
第５図　周辺遺跡分布図　・・・・６
第６図　軽米町縄文・弥生遺跡分布図　・・・・８
第７図　グリッド配置図　・・・・11
第８図　凡例　・・・・14
第９図　鉢分類図　・・・・16
第10図　遺構配置図　・・・・19
第11図　１号埋設土器、１～３号陥し穴・・・・21
第12図　４号陥し穴、１・２号焼土、～５号土坑・・・・25
第13図　－２C17・18グリッド出土遺物・・・・26
第14図　１号埋設土器、３号陥し穴遺構外出土遺物（１）・・・・27
第15図　遺構外出土遺物（２）　・・・・28
第16図　遺構外出土遺物（３）　・・・・29
第17図　１号竪穴住居　・・・・31
第18図　１号竪穴住居出土遺物（１）　・・・・32
第19図　１号竪穴住居出土遺物（２）　・・・・33
第20図　１号竪穴住居出土遺物（３）　・・・・34
第21図　２号竪穴住居・出土遺物（１）・・・・35
第22図　２号竪穴住居出土遺物（２）　・・・・36
第23図　３号竪穴住居・出土遺物　・・・・37
第24図　６号竪穴住居　・・・・39
第25図　６号竪穴住居出土遺物（１）　・・・・40
第26図　６号竪穴住居出土遺物（２）　・・・・41
第27図　６号竪穴住居出土遺物（３）　・・・・42
第28図　６号竪穴住居出土遺物（４）　・・・・43
第29図　６号竪穴住居出土遺物（５）　・・・・44
第30図　６号竪穴住居出土遺物（６）　・・・・45
第31図　６号竪穴住居出土遺物（７）　・・・・46
第32図　６号竪穴住居出土遺物（８）　・・・・47
第33図　６号竪穴住居出土遺物（９）　・・・・48
第34図　６号竪穴住居出土遺物（10）　・・・・49
第35図　６号竪穴住居出土遺物（11）　・・・・50
第36図　６号竪穴住居出土遺物（12）　・・・・51
第37図　６号竪穴住居出土遺物（13）　・・・・52
第38図　６号竪穴住居出土遺物（14）　・・・・53
第39図　７号竪穴住居　・・・・55
第40図　７号竪穴住居出土遺物（１）　・・・・56
第41図　７号竪穴住居出土遺物（２）　・・・・57
第42図　９号竪穴住居・出土遺物物　・・・・58
第43図　10号竪穴住居　・・・・60
第44図　10号竪穴住居　・・・・61
第45図　10号竪穴住居出土遺物（１）　・・・・62
第46図　10号竪穴住居出土遺物（２）　・・・・63
第47図　10号竪穴住居出土遺物（３）　・・・・64
第48図　11号竪穴住居　・・・・65
第49図　Ⅴ～Ⅵ層出土石器　・・・・75
第50図　竪穴住居出土土器集成　・・・・77
第51図　浅鉢類集成　・・・・78
第52図　変形工字文・工字文集成　・・・・79
第53図　鉢類集成　・・・・81
第54図　口縁部集成　・・・・82

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧　・・・・ 7
第２表　軽米町縄文・弥生遺跡一覧　・・・・ 9
第３表　土器観察表（１）　・・・・ 66
第４表　土器観察表（２）　・・・・ 67
第５表　土器観察表（３）　・・・・ 68
第６表　土器観察表（４）　・・・・ 69
第７表　土製品観察表　・・・・ 69
第８表　石器観察表（１）　・・・・ 70
第９表　石器観察表（２）　・・・・ 71
第10表　石器観察表（３）　・・・・ 72
第11表　石器観察表（４）　・・・・ 73
第12表　石器観察表（５）　・・・・ 74

写真図版目次

写真図版１　航空写真　・・・・ 93
写真図版２　遺跡遠景、完掘状況　・・・・ 94
写真図版３　竪穴住居出土遺物・遺構外出土遺物　・・・・ 95
写真図版４　完掘状況　・・・・ 96
写真図版５　１号埋設土器、１～３号陥し穴　・・・ 97
写真図版６　４号陥し穴、１・２号焼土、１・２号土坑　・・・・ 98
写真図版７　３・５号土坑、遺構外出土遺物　・・・・ 99
写真図版８　１・２号竪穴住居　・・・・100
写真図版９　３号竪穴住居ほか　・・・・101
写真図版10　６号竪穴住居出土状況・完掘　・・・・102
写真図版11　６号竪穴住居検出状況　・・・・103
写真図版12　７・９号竪穴住居完掘　・・・・104
写真図版13　10号竪穴住居ほか　・・・・105
写真図版14　10号竪穴住居検出状況　・・・・106
写真図版15　11号竪穴住居　・・・・107
写真図版16　出土遺物（１）　・・・・108
写真図版17　出土遺物（２）　・・・・109
写真図版18　出土遺物（３）　・・・・110
写真図版19　出土遺物（４）　・・・・111
写真図版20　出土遺物（５）　・・・・112
写真図版21　出土遺物（６）　・・・・113
写真図版22　出土遺物（７）　・・・・114
写真図版23　出土遺物（８）　・・・・115
写真図版24　出土遺物（９）　・・・・116
写真図版25　出土遺物（10）　・・・・117
写真図版26　出土遺物（11）　・・・・118
写真図版27　出土遺物（12）　・・・・119
写真図版28　出土遺物（13）　・・・・120
写真図版29　出土遺物（14）　・・・・121



第１図　遺跡位置図

第Ⅰ章　調査に至る経緯

小玉川通常砂防事業は、二級河川小玉川上流約3.5kmに位置する渓流からの土石流流下等による土砂災害を防止するため、砂防堰堤を施設するものであり、平成７年度から着手している事業である。

これにかかる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、岩手県土木部と岩手県教育委員会との間で以下のとおりに協議された。

当初は未知の埋蔵文化財包蔵地であったが、地中から土器が出現したため、ただちに平成13年７月19日付け「二地土第957号」をもって二戸地方振興局土木部長から岩手県教育委員会事務局生涯学習課長あて試掘調査依頼を行い、同８月24日に試掘調査を実施した。その結果、同９月21日付け「教生第888号」により岩手県教育委員会事務局生涯学習課長から二戸地方振興局土木部長あて発掘調査の必要があるとの回答があり、その実施方法を協議した結果、発掘調査は岩手県文化振興事業団の受託事業としたものである。

（二戸地方振興局土木部）

第Ⅱ章　環境と周辺の遺跡

１．位置・立地

玉川向遺跡は、岩手県九戸郡軽米町大字小軽米第17地割字玉川向平85-1ほかに所在し、軽米町役場より南東約20km、山形村、大野村との境、軽米町の南東部に位置している。遺跡が所在する軽米町は、岩手県最北部、北上山系北部の中央に位置し、東は種市町・大野村、南は九戸村・山形村、西は二戸市、北は青森県三戸郡名川町・南郷村・階上町に接する。近世の九戸街道の宿駅として栄えた町で、人口約12,000人、面積242.61㎡である。

国土地理院発行の地図25,000分の１の戸呂町「ＮＫ-54-７-４」の図幅に含まれ、北緯40度14分13秒・東経141度34分45秒である。

遺跡は、遺跡の西側を流れるウチナイ沢と複数の沢によって形成された標高350m前後の河岸段丘上に立地している。遺跡周辺の地形は、北側に開け小起伏山地や丘陵地に囲まれ、その合間を縫うように小玉川の支流であるウチナイ沢が北流し、それに複数の小さな沢が合流する。そのウチナイ沢が流れていく両岸に形成された小規模な河岸段丘のうちの一つである。また平成13年度から継続調査中の梅の木沢遺跡は上流50mの河岸段丘上にある。

２．地形・地質

１）岩手県軽米町の地形・地質

岩手県の地勢は、東に北上山地、西に奥羽脊梁山脈がそれぞれ南北に延び、その合間を河谷低地帯を形成しながら七時雨山に端を発する北上川は岩手県と宮城県を南流し宮城県石巻湾に注ぎ、袖平高原に端を発する馬淵川は北流し青森県八戸湾に注ぐ。

岩手県北部、青森県との県境に接する軽米町の地形は、その南北240kmほどある紡錘形をした北上山地の北端部に形成されている起伏の乏しい準平原や小起伏山地などの地形に囲まれた標高200～400mの丘陵地帯である。周辺には標高が500～800mほどの小起伏山地が多く存在し東に久慈平岳（標高760m）、西に折爪岳（標高852m）、南に霧岳（標高567m）などがあり、面積の約７割が山林で占められている。町内を流れる瀬月内川と雪谷川は九戸村からそれぞれ入り込み、瀬月内川は町内の西部を北流し、雪谷川は中央部を西流していく。それらは町の中央部を流れ、比較的面積の狭い平坦な沖積地を形成している。両河川は町内北部の長倉付近で合流し、そして水吉付近でその名を新井田川に変え青森県南郷村や八戸市を北流し八戸湾に注いでいる。

表層地質は粘板岩・輝緑凝灰岩・チャートを主体とする古生層が基盤岩盤として、軽米町から二戸にかけての山地・丘陵は新世代第三紀層である砂岩・凝灰質砂岩・礫岩などが分布している。

土壌は黒ボク土壌が厚く堆積している状況やそれらの間に十和田・八甲田火山灰起源とする砕屑物で被覆され、それらは過去の発掘調査において観察されている。十和田・八甲田火山灰起源とする砕屑物の堆積については叺屋敷Ｉｂ遺跡（岩文埋1983）に詳細な報告がなされているので参照されたい。

２）遺跡周辺の地形・地質

遺跡が所在する軽米町小軽米は雪谷川やそれらに注ぎ込む支流によって形成されている。雪谷川の支流には小玉川のほかに増子内川や米田川など数多くが存在しており、遺跡の脇を流れるウチナイ沢は小玉川の支流である。これらの支流は丘陵地を開析しながら発達が悪い小規模な沖積面や河岸段丘を形成しているだけに留まっている。遺跡周辺の地形はそのウチナイ沢が北流していることで北側が開け、それ以外の三方は山林に囲まれている状況である。遺跡はその沢の東岸に形成された河岸段丘上にある。その段丘を挟むように南北に西流する２本の沢がウチナイ沢に合流し、それらは段丘形成に影響を与ている。

遺跡の地形は屋根の先端部にあり、頂頭部は比較的緩やかな斜面になっており狭いものの平坦面が存在する。そこから南・北・西方向に向かって傾斜しそれぞれ異なる地形を形成していく。南側はウチナイ沢とそれに西流する沢によって一段下に段丘が形成され、２つの段丘崖が存在している。北側は比較的緩やかな斜面が続き遺跡範囲外において、段丘崖が形成されている。この付近はウチナイ沢による浸食を受けていないものの、段丘崖は西流する沢の影響によるものと思われる。西側は頂頭部から北方向と同様に緩斜面があり、先端部近くで段丘崖が存在し、直接ウチナイ沢による浸食を受けている。

これらのことから遺跡内において各地点で基本層序の堆積が異なる。この詳細は基本層序で述べるが、ウチナイ沢の濁流と西流する２本の沢からの影響を強く受けたと考えられる。また、遺跡の対岸には現在は枯渇しているが東流する沢の合流地点があり、周辺にはウチナイ沢に数多くの小さな沢が合流している。遺跡は日当たり良好の地形であり、資源が豊富な地であったと思われる。

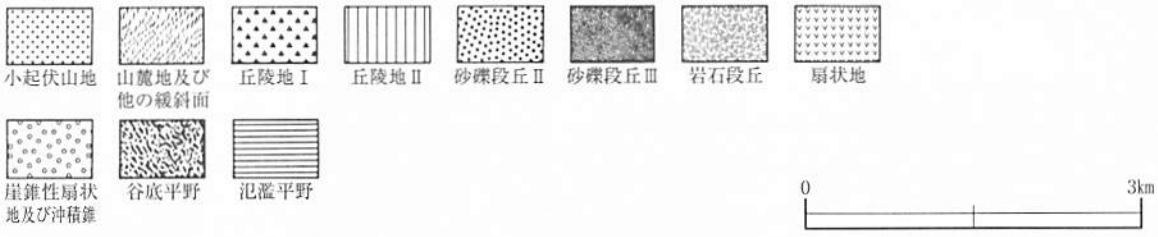
地形は200m未満の小起伏山地と丘陵地に囲まれ急斜面が形成されいる。地形区分では霧岳山地に相当する。

表層地質は遺跡の西と北側は第四紀のローム層が広がっている。小玉川の両岸には中生代の泥岩層が存在している。その上流に当たるウチナイ沢を含むその支流の両岸には中生代の泥岩層や礫岩層珪質岩石、輝緑凝灰岩、砂岩が層状を成している。分類図には含まれない南側の山形村には中世代の花崗岩質岩石がある。

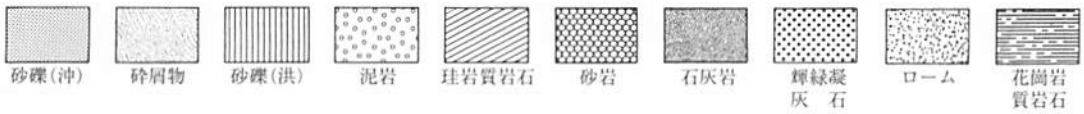
土壌は雪谷統や盆花統といった黒ボク土壌に分類される。調査区内外において露出された土壌堆積層を観察すると黒ボク土壌が厚く堆積している状況が確認でき、その堆積層中には南部浮石や中掫火山灰などが含まれている。

365
355
355
354
353
352
351
350
355
360
365
370
375
370
365
360
350
355
0
50m

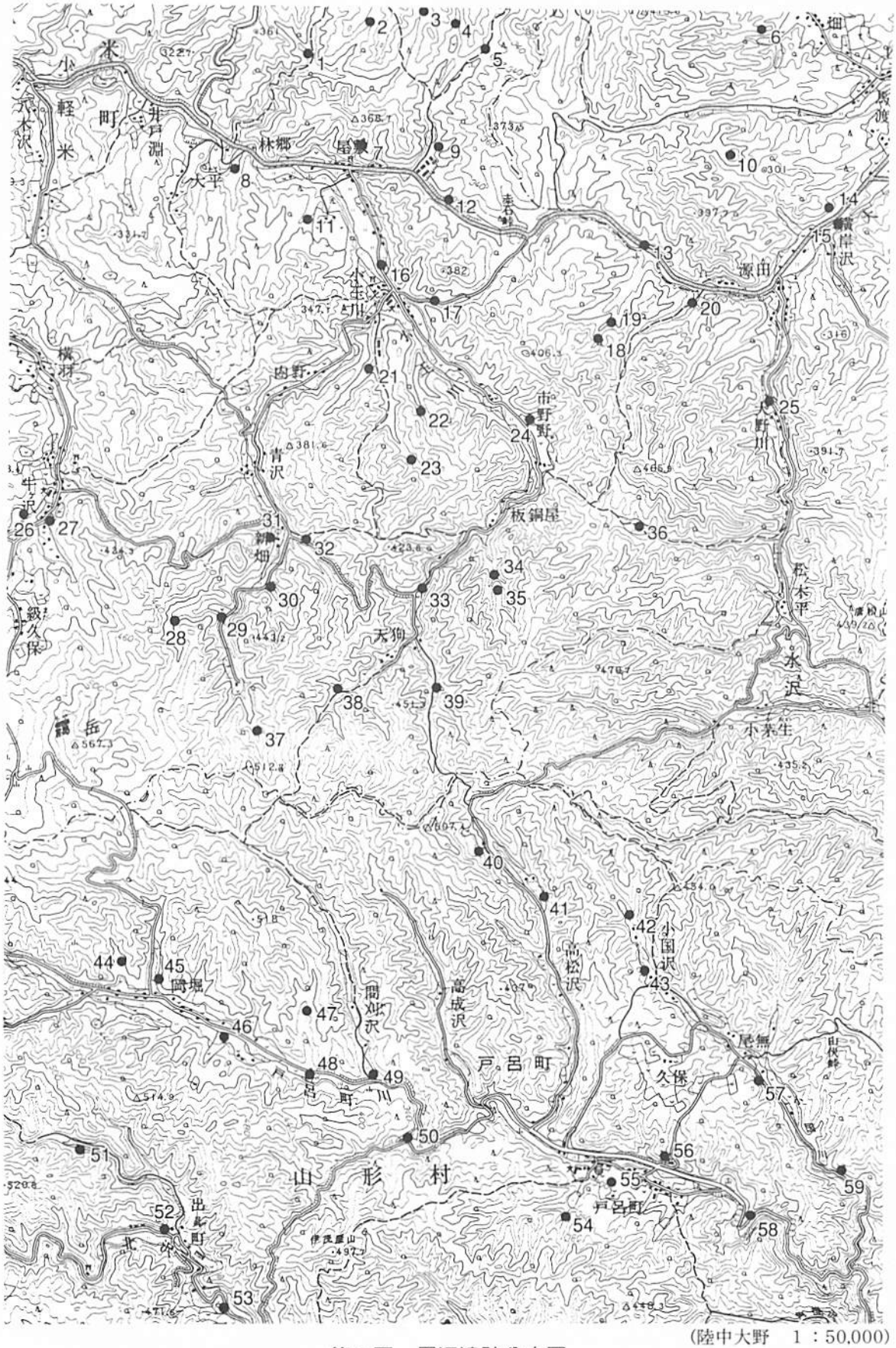
第２図　遺跡周辺図


小起伏山地
山麓地及び他の緩斜面
丘陵地Ⅰ
丘陵地Ⅱ
砂礫段丘Ⅱ
砂礫段丘Ⅲ
岩石段丘
扇状地
崖錐性扇状地及び沖積錐
谷底平野
氾濫平野
0
3km

第３図　地形分類図



第4図　表下地質分類図

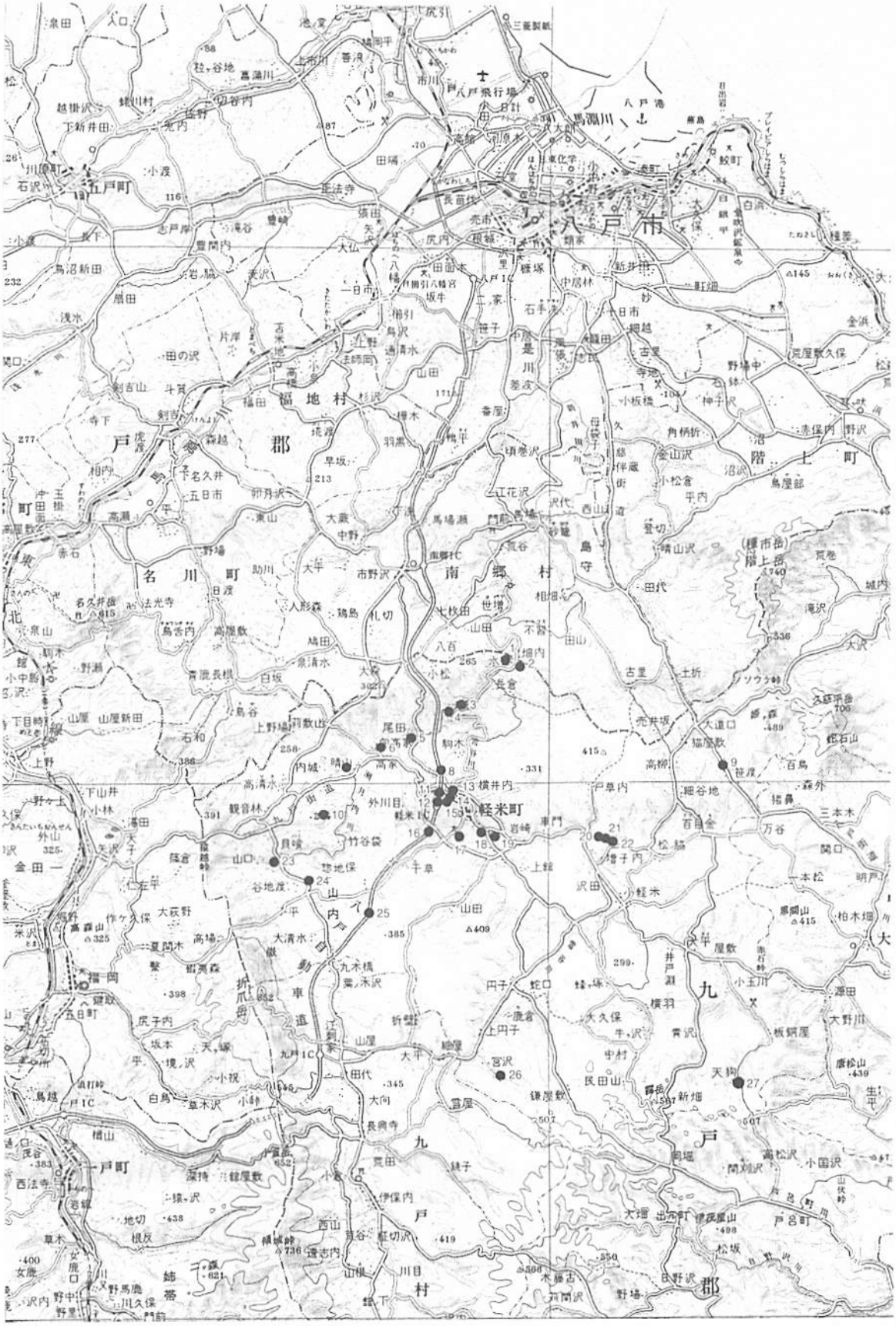


(陸中大野　1：50,000)

第5図　周辺遺跡分布図

No	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物	市町村	備考
1	陰の沢（1）	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
2	赤水の沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
3	鍛冶の沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
4	中の沢（2）	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
5	ハタラの沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
6	たてひら館	城館跡	中世	堀・平場	大野村	
7	登戸の沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
8	大平	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
9	玉川鉄山A	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	昭和60年から7回調査
10	蝦夷森館	城館跡	中世	三重堀・平場	大野村	
11	徳上の沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
12	玉川鉄山B	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
13	赤石峠東の沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
14	横岸沢Ⅱ	散布地	縄文	壺・石器	大野村	
15	横岸沢Ⅰ	散布地	縄文	壺・石器	大野村	
16	長才	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
17	赤石沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
18	大工どんの沢（2）	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
19	大工どんの沢（1）	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
20	市の沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
21	西中の沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
22	ユムギ沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
23	大中の沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
24	カクジの沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
25	カン沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
26	牛ヶ沢	集落跡	縄文	縄文土器（晩期）	軽米町	
27	牛ヶ沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
28	岩鼻沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
29	拾六平	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
30	青沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
31	新畑（2）	集落跡	縄文	縄文土器（後期・晩期）	軽米町	
32	銅屋の沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
33	上板銅屋	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
34	チサカが沢	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
35	館はな	城館跡	中世	二郭、堀	軽米町	
36	葛柄鉄山	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
37	新畑	製鉄関連跡	近世	鉄滓	軽米町	
38	天狗	散布地	縄文	縄文土器（晩期）	軽米町	
39	玉川向・梅の木沢	集落跡・製鉄関連跡	縄文・弥生・近世	土器・石器・高殿・鉄滓	軽米町	
40	高松沢上	散布地	縄文	縄文土器	山形村	
41	高松沢	散布地	縄文	縄文土器	山形村	
42	小国沢鉄山跡	鉄山跡	近世		山形村	
43	タネジロウ	散布地	縄文	縄文土器	山形村	
44	角頭の沢	散布地	縄文	縄文土器	山形村	
45	鉈ヶ沢鉄山跡	鉄山跡	近世		山形村	
46	岡堀鍛冶跡	鍛冶跡	近世		山形村	
47	スゴロ沢鉄山	鉄山跡	近世		山形村	
48	岡堀の上鍛冶跡	鍛冶跡	近世		山形村	
49	間刈沢鍛冶跡	鍛冶跡	近世		山形村	
50	金取鉄山跡	鉄山跡	近世		山形村	
51	ホウクボ沢木炭窯	窯跡	近世		山形村	
52	出ル町	散布地	縄文	縄文土器（後期）	山形村	
53	二ツ神	散布地	縄文	縄文土器（後期）	山形村	
54	戸呂町鉄山跡	鉄山跡	近世		山形村	
55	乱場	散布地	縄文	縄文土器（後期）・石器	山形村	
56	外輪館	中世	城館跡		山形村	
57	尾無館	中世	城館跡		山形村	
58	戸呂町中輪館	中世	城館跡	平場	山形村	
59	矢の沢鉄山	鉄山跡	近世		山形村	

第1表　周辺遺跡一覧



(八戸　1：200,000)

第6図　軽米町縄文・弥生遺跡分布図

番号	遺跡名	種別	時　代	所　在　地	備　　考
1	水吉Ⅵ	集落跡	縄文～古代	軽米字水吉	平成３～５年発掘調査
2	長倉Ⅴ	散布地	縄文・弥生	長倉字柳久保	平成６年発掘調査
3	大鳥Ⅱ	集落跡	縄文・弥生	軽米字大鳥	平成８年発掘調査
4	大鳥Ⅰ	集落跡	縄文～古代	軽米字大鳥	平成７年発掘調査
5	尾田Ⅰ	散布地	縄文～古代	軽米字尾田	
6	高家平中	散布地	縄文～古代	高家字平中	
7	内城1	散布地	弥生・古代	晴山字内城	
8	土弓Ⅰ	集落跡	縄文～古代	軽米字駒木	
9	沢尻向	散布地	縄文・弥生	上舘字沢尻向	
10	大崎山2	集落跡	弥生・古代	晴山字大崎山	
11	叺屋敷Ⅱ	集落跡	縄文～古代	軽米字叺屋敷	
12	馬場野Ⅱ	集落跡	縄文・弥生	軽米字馬場野	昭和56～58年発掘調査
13	大日向Ⅱ	集落跡	縄文～古代	軽米字叺屋敷	昭和63～平成６年発掘調査
14	叺屋敷Ⅰa	集落跡	縄文～古代	軽米字叺屋敷	昭和55年発掘調査
15	叺屋敷Ⅰb	集落跡	縄文～古代	軽米字叺屋敷	昭和56年発掘調査
16	君成田Ⅳ	集落跡	縄文～古代	軽米字君成田	昭和55年発掘調査
17	谷山	散布地	弥生・古代	軽米字谷山	
18	蓮台野	散布地	弥生・古代	軽米字蓮台野	
19	萩田2	散布地	弥生・古代	軽米字中坪	
20	増子内3	散布地	弥生	上舘字増子内	
21	増子内2	散布地	縄文・弥生	上舘字増子内	
22	増子内1	散布地	弥生	上舘字増子内	
23	太田向4	散布地	縄文・弥生	山内字太田向	
24	和当地Ⅰ	集落跡	縄文～古代	山内字権現林	平成７年発掘調査
25	駒板	集落跡	縄文～近世	山内字駒板	昭和57～58年発掘調査
26	宮沢	集落跡	弥生・古代	円子字茸沢	平成11年発掘調査
27	玉川向	集落跡	縄文・弥生	小軽米字玉川向平	

第２表　軽米町縄文・弥生遺跡一覧

３．周辺の遺跡

本遺跡が所在する軽米町には、縄文時代から近世に属する遺跡は515遺跡が存在しており、それらの位置は「軽米町遺跡地図」に詳細に報告されている（軽米町教育委員会2001）。また、過去当センターにより東北縦貫自動車道やダム建設などの事業に伴い馬場野Ⅱ遺跡・大日向Ⅱ・君成田Ⅳ・叺屋敷Ⅰb遺跡・駒板遺跡・水吉Ⅳ遺跡など調査が行われ多くの成果が得られている。

515遺跡は町内全域に分布しているものの、各時代によって若干分布差を見せている。縄文時代の遺跡は町内の西側、雪谷川や瀬月内川によって形成された河岸段丘上に多く存在している。また、中世城館や近世遺跡は町内の東側の山間や谷筋に多く存在している。

これらのことを調査成果と併せて概観していく。縄文時代草創期から古代にかけては馬場野Ⅰ・Ⅱ遺跡・叺屋敷Ⅰa・Ⅰb・Ⅱ・Ⅲ遺跡・大日向Ⅱ遺跡などの成果から、河岸段丘上に集落が営まれていることが明らかとなっている。また、同地域にも近世遺跡が存在することから縄文時代から近世にかけての各時期を通じて町内西側において断続的に生活が営まれている。そして中近世に下るにつれ瀬月内川や雪谷川流域から山

間部に人の手が加えられていく様子を窺うことができる。

遺跡が所在する軽米町の南東部、大野村や山形村と近接する範囲では、近世製鉄遺跡が数多く存在し縄文時代の遺跡は減少する。本遺跡の周辺に限っては八戸藩の製鉄遺跡が多く存在しており、大野六ヵ鉄山である葛柄鉄山・金沢鉄山・玉川鉄山などがある。またウチナイ沢や小玉川、遺跡の脇にある小軽米から山形村を結ぶ林道沿いには製鉄関係の遺跡が分布しいていることからも当該期には周辺一帯が鉄山地帯だったことが窺える。このことは近世にようやく人の手が加えられるようになった証拠であり、遺跡の脇にある林道が山形村や大野村を結ぶ主要な交通路であった可能性が高い。

本遺跡と同時期である縄文晩期末～弥生時代初頭に限定し概観すると、縄文時代に属する遺跡は先述したように町内西側の雪内川本流とそれに合流する瀬月内川に形成された河岸段丘上に多く存在している。それらを弥生時代を通して見ていくとその遺跡数は極端に減少していく。また、町内南東部の本遺跡周辺においては、後・晩期の遺跡が若干確認されているものの当該期の遺跡の存在は見られなくなる。今回のような成果が得られている大半は軽米町西側にあることから、その存在は稀と言える。本遺跡と似たような立地にある遺跡としては雪谷川の上流に存在する宮沢遺跡が挙げられ、その周辺においても該期の存在は確認されておらず本遺跡と同様の傾向を示している。これらのことが何を示しているのか、下流に位置する八戸市内新井田川流域において当該期の遺構や遺物が多く確認されていることとの関係性などを検討していく必要があり、それらは今後の検討課題として挙げられる。

〔第Ⅱ章で使用した引用・参考文献〕

(ここでは(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターを岩文埋と扱うこととする。)

軽米町教育委員会1987『軽米町史（上巻)』

軽米町教育委員会2000『軽米町史（下巻)』

軽米町教育委員会2001『軽米町遺跡分布図』

岩手県教育委員会1999『遺跡台帳』

岩文埋1983『叺屋敷Ⅰb遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第63集

岩文埋1986『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第99集

岩文埋2001『宮沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第358集

第Ⅲ章　調査概要と整理方法

1．野外調査の方法

（1）グリッド設定

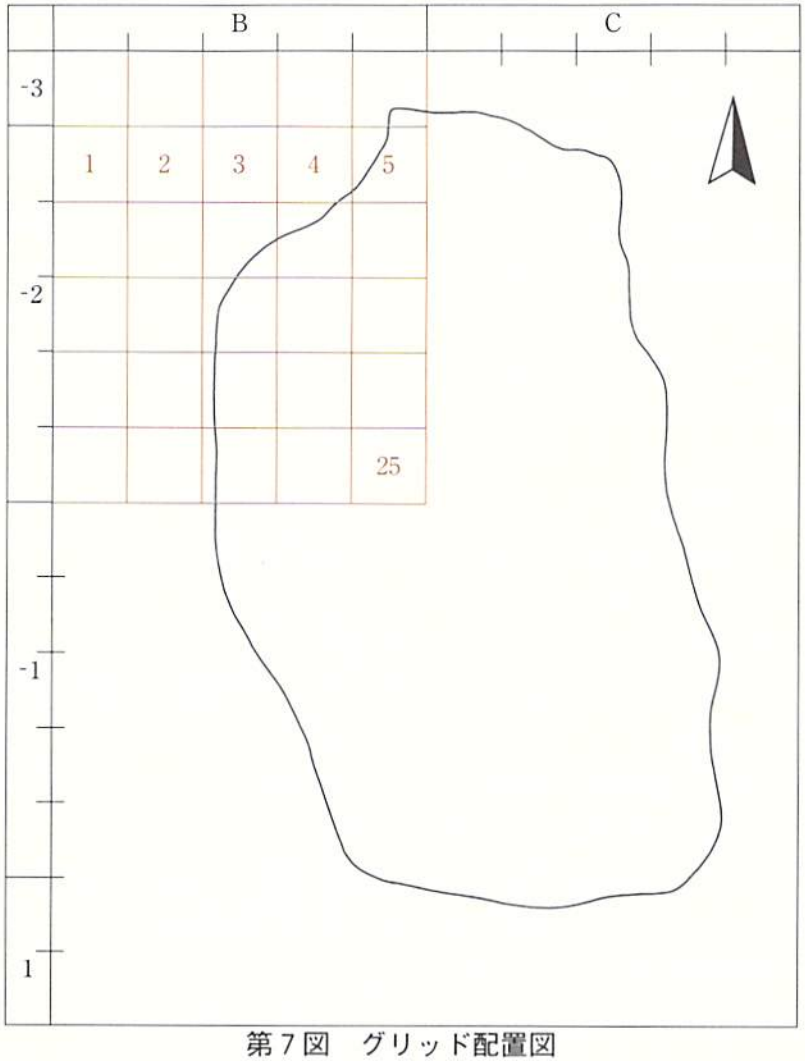
本遺跡のグリッド設定にあたり、平成13年度に梅の木沢遺跡の調査を実施する際に設置した平面直角座標・第X系（日本測地系）に従って、基準点２カ所と補点４カ所の計６カ所を設置したグリッドを使用している。グリッドは基準点２点を結んだ線を基準線とし、さらに補点で結んだ線をこの線と直行するようにし調査区を網羅するようにメッシュを設定している。　（以下に示した数値は平成13年度のものである。）

	X	Y	H	グリッド名
基準点１	26600.000	63475.000	351.770	３Ａ３
基準点２	26600.000	63440.000	354.587	３Ｃ１
補点１	26615.000	63485.000	350.926	２Ｃ13
補点２	26615.000	63460.000	354.203	２Ｂ13
補点３	26585.000	63460.000	352.381	３Ｂ18
補点４	26590.000	63475.000	351.882	３Ｃ11

梅の木沢遺跡は大グリッドは１辺が25m、小グリッドは各辺を５等分して１辺を５mに設定している。大グリッドは西から東に向かってＡ～Ｄ、北から南に向かって１～７とし、小グリッドは北西隅を１、南東隅を25とした。各グリッド名称は北西隅の杭名称による。

本遺跡は梅の木沢遺跡の約50m北側に位置していることから、その設定したグリッドを延長して本遺跡を網羅するようにした。それらから北に延長しているため、本遺跡のＸ座標値は北に行くにつれ－１・－２となっている。

これらのことから本遺跡はすべて踏襲している。



第７図　グリッド配置図

（2）遺構名称

調査過程や調査後の検討で遺構に成り得ないと判断したものもあり欠番が生じている。今回の報告では、調査時の番号を整理時においても継続して使用している。

竪穴住居は重複が激しく断面観察の時点で予め目安に遺構番号を付した後にサブトレンチを入れ、さらにその遺構把握に務めた。その結果サブトレンチを入れた後は、4号・5号・8号竪穴住居としたものは、他の竪穴住居に組み込まれるものやプランとして把握できなかったため欠番とした。

遺構配置図においては以下の略号を用いて掲載している。

竪穴住居・・・ＳＩ　埋設土器・・・ＳＲ　焼土遺構・・・ＳＸ　陥し穴・・・ＳＫＴ

土坑・・・ＳＫ

（3）粗掘り・遺構検出・精査

粗掘りは人力により任意に数カ所設定したトレンチを掘り下げ、堆積状況や遺物包含状況、遺構検出面の確認を行った後、重機を用いて遺構検出面まで掘り下げを行った。

遺構検出は、表土を除去した面と遺物包含層直下の層界をジョレンと両刃鎌で行った。

精査は検出された遺構を適宜２分法・４分法を使い分けて行い、必要な記録は野帳や図面等に記録した。また、遺構精査では、サブトレンチを積極的に利用し、正確な遺構の把握に務めた。

（4）実測

遺構の平面実測は、簡易遺り方測量で作成している。縮尺は原則として竪穴住居や陥し穴、土坑などは1/20とし、埋設土器や石囲い炉や地床炉などは1/10、その他は必要に応じて任意の縮尺を用いていた。また、調査区範囲は1/40の縮尺を用い平板測量で作成している。

（5）写真

写真撮影は、35㎜判カメラ２台（モノクロ・リバーサル）と６×９cm判カメラ１台（モノクロ）を使用し、遺構や遺物の検出、出土状況に応じて行っている。

（6）広報活動

埋蔵文化財に対する啓蒙普及活動の一環として、調査成果を公開する現地説明会を平成14年６月15日に開催している。

２．調査経過

本遺跡は下記のような工程で発掘調査を行った。

４月12日：器材搬入を行い現場設営を行う。

４月16日：人力による表土掘削を開始。

４月17日：生涯学習文化課による試掘トレンチから範囲を広げながら遺構検出作業を行った結果、陥し穴や土坑を確認。

４月22日：遺構精査と遺構検出作業を平行して行う。

４月23日：１号埋設土器の精査開始。

５月１日：調査区西側の露出した断面観察した結果、竪穴住居が重複していることを確認。

５月９日：１・２・３号竪穴住居の範囲を確認、精査開始。また、－１Ｃ７グリッドにおいて Ⅳ層から槍先形尖頭器が出土。

5月20日：6号竪穴住居を精査開始。

5月22日：同遺構に石囲い炉や埋設土器が伴うことを確認。

6月6日：6号竪穴住居の下にある10号竪穴住居精査開始し、石囲い炉や地床炉を伴うことを確認。

6月12日：二戸地方振興局土木部・生涯学習文化課・当センターにより梅の木沢遺跡と併せて終了確認を行う。

6月15日：梅の木沢遺跡と併せて現地説明会を行う。40名程の参加がある。

6月16日：すべての竪穴住居の図面作成が終了。

6月17日：現場においてすべての作業が終了し撤収。

3．室内整理の方法

（1）作業手順

出土遺物は土器と石器合わせて大コンテナ10箱ほど出土している。遺物の水洗は発掘調査期間中に終了させていたため、室内作業は注記作業から開始した。その後遺物の接合復元をし、本報告書掲載遺物の登録を行った。それらの作業終了後に実測、遺物写真撮影、遺構・遺物のトレースを順に行い、図版及び観察表を作成した。また、先述した作業と平行して原稿執筆、各鑑定分析を行っている。

（2）遺構

遺構図版はスケールを付しており、一部例外があるものの以下の縮尺を原則としている。竪穴住居は1/40・1/50、住居内の埋設土器や石囲い炉は1/20、埋設土器は1/20、陥し穴と焼土、土坑は1/40とした。方位は日本測地形の第X系の北を示している。方位がないものはグリッドでその方角を示している。

また、遺構配置図に掲載されている等高線は工事用図面との合成によるもので、遺構検出面で行ったものではない。調査以前に削平を受けていることから、削平を受けていない工事前の方がより地形の状態を表していると判断したためである。

（3）遺物

土器実測は掲載遺物の縮尺率は以下に記す。土器1/2・1/3、剥片石器は4/5・礫石器は1/3を基本とし、大きさに合わせて適宜縮尺を変えており各図版においてその縮尺を示している。

写真図版の縮尺は基本は1/2であり、各図版ごとにその縮尺を示している。

（4）遺物掲載基準

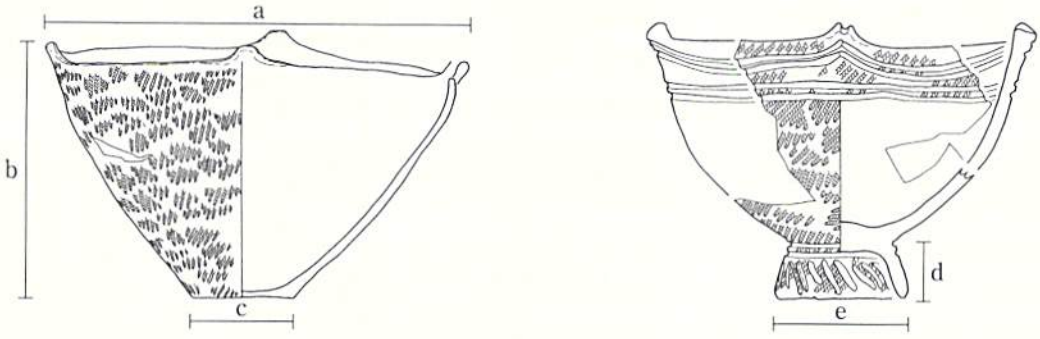
土器は総出土点数も少なく、大半が体部であったため基本的に文様帯を確認できた口縁～体部を中心に積極的に拓本作成・断面実測を行った。その結果、縄文が施文されている鉢・深鉢の体部から底部にかけては実測及び拓本作成の量は少ないこととなる。

石器は出土点数が少ないことから剥片・チップ以外の石器は全て掲載することとした。

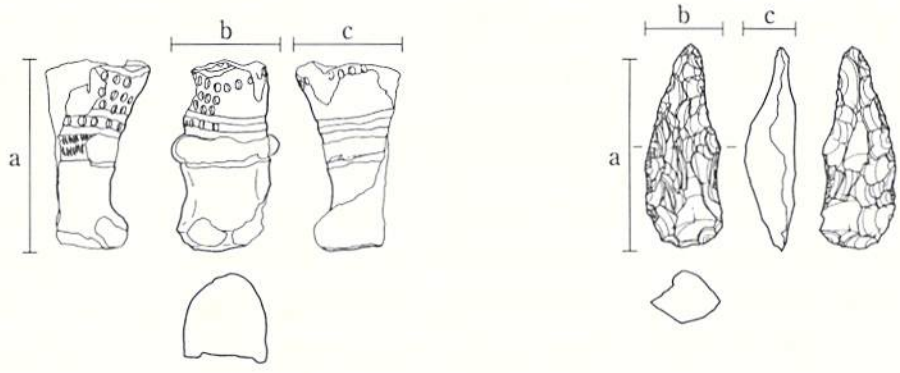
4．凡例

凡例は第8図に示した通りである。なお土器実測図に空白部分が存在しており、それは石膏を入れた部分を表現したものである。また、文様構成が分かるものに対してはポイントを下げ図示している。石器実測図の空白部分は後世によるガジリを示している。

観察表中においては、（○）は推定値・〈○〉は残存値を示している。単位はすべてcmで表記している。



a．口径　　b．器高　　c．底経　　d．台高　　e．台裾



a．長さ　　b．幅　　c．厚さ

地山　　土器　　礫　　石器の被熱による剥落

● 石器　　△ 土器

第8図　凡例

5．土器の分類

縄文時代晩期末～弥生時代初頭に属する竪穴住居８棟が検出され、浅鉢・鉢・深鉢・壺・ミニチュア土器など良好な資料が得られた。それらは細分可能であったため、下記のように分類を行った。他の時期の出土遺物においても観察表中では同様の分類基準を採用している。

浅鉢（Ａ類）

Ⅰ類～底部から口縁にかけて外傾しながら直線的に立ち上がるもの。

Ⅱ類～体部が膨らみながら口縁に立ち上がるもの。

これらは各竪穴住居ごとに第51図にまとめてある。Ⅱ類は高坏の可能性があるが、その底部や高台が確認されなかったため、今回は浅鉢として扱う。

鉢（Ｂ類）

鉢は、他の器種に分類できなかったもの全てを鉢として扱ってた。今回鉢として扱った土器の中で第９図に示したように、底部から口縁部への立ち上がり方で異なる器形を呈していることから分類を下記のように行った。その結果６つに分類し、またその中で細分できたものもある。

Ⅰ類～底部から口縁部にかけて外傾しながら立ち上がり、椀状の形態をなすものである。この中には台付鉢となるものも含まれる。

Ⅱ類～底部から体部にかけてやや内彎気味に立ち上がり、頸部でくびれ口縁に向かって緩やかに外反する。

Ⅲ類～底部から体部にかけては直線的に外傾しながら立ち上がり、頸部でくびれ強く外反する。

Ⅳ類～本類は下記のように４つに細分可能であった。資料点数が少なく破片からの分類であったため、厳密にｃ類とｄ類の細分には若干無理が生じている。とりあえずここでは細分しておく。

Ⅳａ類～底部から体部にかけ内彎して立ち上がり、頸部で強くくびれそこから口縁部が外反する。

Ⅳｂ類～底部から体部にかけて内彎して立ち上がり、口縁部付近で強くくびれそこから垂直に立ち上がる。

Ⅳｃ類～Ⅳｂ類に類似しているが、Ⅳｂ類より口縁部の立ち上がりが短い。

Ⅳｄ類～Ⅳａ類に類似しているが、頸部のくびれが弱く、口縁部が短く外反する。

Ⅴ類～体部から口縁部へとやや内彎もしくは直線気味に立ち上がり、頸部が弱くくびれ、口縁部が体部より外反する。

Ⅵ類～体部から口縁部へとほぼ直線的で、外傾気味に立ち上がるものである。

深鉢（Ｃ類）

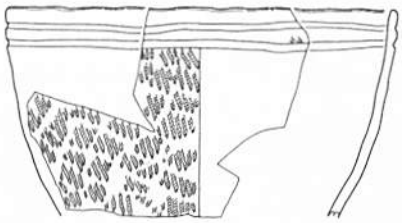
底部から口縁部へと内湾しながら立ち上がるもので、口縁部が内湾するものである。口縁部においてくびれをもつもの（Ⅰ類）とそのまま立ち上がるもの（Ⅱ類）がある。出土点数が少ないものの細分可能であったため示しておく。

壺（Ｄ類）

口頸部が強くすぼまるもので、内傾して口縁部まで立ち上がる。出土点数が少ないため類型化していない。

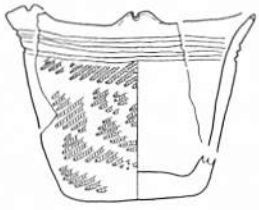
ミニチュア土器（Ｅ類）

小形土器の総称である。

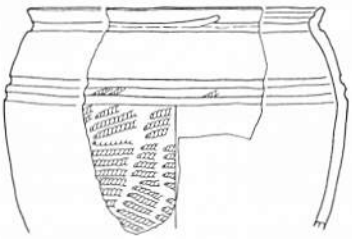


Ⅰ類

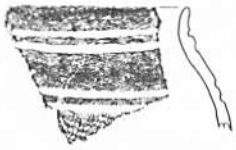
Ⅱ類



Ⅲ類



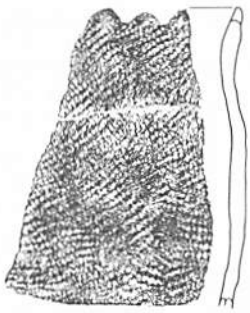
Ⅳa類



Ⅳb類

Ⅳc類

Ⅳd類



Ⅴ類

Ⅵ類

第9図　鉢分類図

第Ⅳ章　基本層序

本遺跡においては、遺跡周辺の地形で先述したように段丘形成により土層の堆積が異なる箇所を確認できたため、２箇所でそれらの記録作業を行っている。基本層序は残りの良い北側の－２Ｃ13グリッドと、南側の－１Ｂ20グリッド付近に形成された斜面の堆積状況を確認した。

第Ⅱ章の地形で先述したが、ウチナイ沢と遺跡の南側を西流する沢の影響により層序が異なる。ウチナイ沢や西流する沢の影響を受けていない北斜面は前者が当てはまり、縄文期に確認できる十和田中掫や十和田南部火山灰を層序において把握できた。しかし両沢の影響を受けている東・南斜面は後者が当てはまり、ＸⅡ～ＸⅥ層のみの確認となり北斜面で確認できたような層序の把握はできなっかた。これらの層は縄文中期末以降の遺物包含層であることから、それ以前に堆積したと思われる層序は両沢の影響により削られていたことを指摘できる。

これらのことを把握できた基本層序は以下の通りである。

Ⅰ層：黒褐色シルト層（10ＹＲ２/３）現代整地層。粘性なし、しまり強い。砕石（直径５～30cm）が混入し、重機等の影響により硬化している。層厚５～10cm。

Ⅱ層：にぶい黄褐色シルト層（10ＹＲ４/３）粘性弱く、しまり強い。層厚10cm。直径３～10cmの十和田中掫火山灰を多く含む。層厚が薄いため本層下部には南部浮石の浮き上がりを部分的に確認できる。遺跡内でも北斜面の標高の高い箇所でしか観察されない。

Ⅲ層：褐色シルト層（10ＹＲ４/４）遺構検出面。粘性やや弱く、しまり強い。層厚10～15cm。直径１～20mmの十和田南部火山灰がやや多く、直径１～10mmの炭化粒を少量含む。

Ⅳ層：十和田南部火山灰層（10ＹＲ４/３）層厚10cm。

Ⅴ層：暗褐色シルト層（10ＹＲ３/４）粘性やや弱く、しまり強い。層厚７～10cm。直径１～20mmの十和田南部火山灰がやや多く上層を中心に混入している。

Ⅵ層：褐色粘土層（10ＹＲ４/６）粘性、しまり共にやや強い。層厚15～20cm。十和田南部火山灰が微量に混入している。

Ⅶ層：明黄褐色粘土質シルト層（10ＹＲ６/８）粘性並、しまりやや強い。層厚12～15cm。直径５～20cmの礫を多く含む。

Ⅷ層：明黄褐色粘土層（10ＹＲ６/８）粘性やや強く、しまり強い。層厚15cm。

Ⅸ層：灰黄褐色砂層（10ＹＲ６/８）粘性弱く、しまり強い。層厚10cm。

Ｘ層：明黄褐色粘土層（10ＹＲ６/８）粘性やや強く、しまり強い。層厚20～30cm。

ＸⅠ層：本層はⅠＸ層とＸ層の互層となっているのことは把握しているが、明確な差を捉えることができなかったため一括して報告する。層厚不明。

ＸⅡ層：黒褐色シルト層（10ＹＲ２/２）粘性弱く、しまり強い。層厚10cm。直径５～10mmの黄褐色スコリアを少量含む。縄文時代中期末の土器を包含している。

ＸⅢ層：黒褐色シルト層（10ＹＲ２/２）粘性やや弱く、しまり並。層厚10～15cm。ＸⅡ層と類似しているが若干砂質味が増す。

ＸⅣ層：黒褐色シルト層（10ＹＲ２/２）粘性並、しまりやや弱い。層厚10cm。ＸＶ層がブロック状に含ま

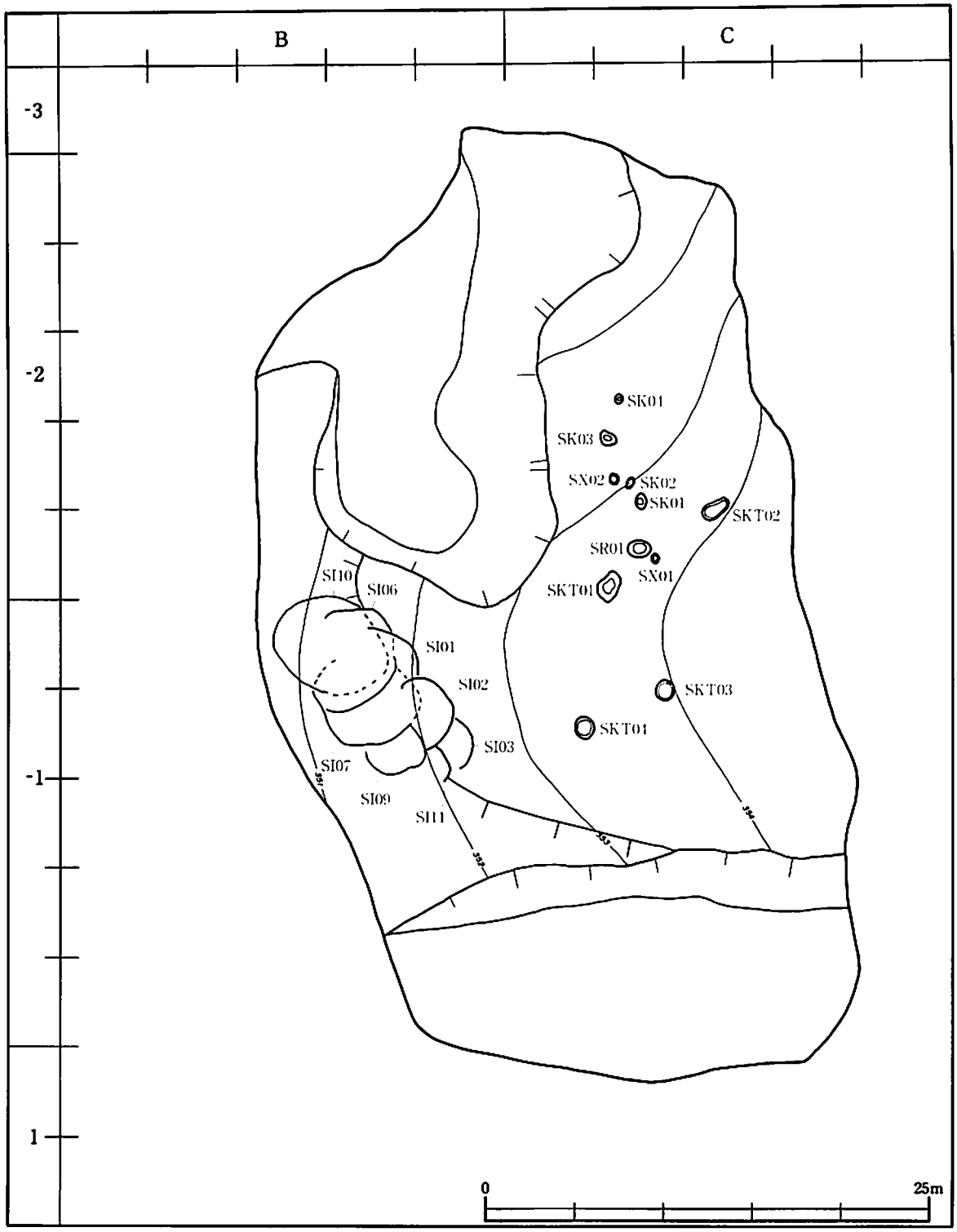
れる。

ＸＶ層：暗褐色砂質シルト層（10ＹＲ３/４）層厚20cm

ＸＶI層：浅黄橙色砂礫層（10ＹＲ８/４）層厚不明。

上記が調査区内において確認できた層序である。基本的にはⅡ層の上にＸⅡ～ＸVI層が形成されていく堆積過程が想定できる。ただし、竪穴住居に堆積した埋土に関しては、本遺跡内における基本層序で確認することはできなかった。また、残りの良い土層は調査区内では部分的にしか残っていないため、Ⅲ層を遺構検出面としたが調査区内の一部ではⅡ～Ⅳ層が遺構検出面となっている。

調査区内における地形の形成から土層断面の時間的な変遷を把握する事ができたが、各遺構の埋土の主体層を上記の各土層において確認できなかった。


B
C
-3
-2
-1
1
SK01
SK03
SX02
SK02
SK01
SKT02
SR01
SX01
SKT01
SI10
SI06
SI01
SI02
SKT03
SKT04
SI03
SI07
SI09
SI11
0
25m

第10図　遺構配置図

第Ⅴ章　検出された遺構と遺物

1．概要

今回の調査からは縄文時代草創期から弥生時代初頭にかけての遺構や遺物を確認できた。しかし砂防ダム建設時に重機が頻繁に稼働していたため、遺構上半部を削平されていることから遺跡の全容を把握するまでには至らなかった。このような中で確認できた遺構の検出状況について以下にまとめておく。

基本的に調査区内で縄文時代早期から中期末にかけての遺構や遺物は、調査区中央部段丘の頂頭部から北側斜面にかけての調査区内でも比較的標高の高い範囲の－１・２Ｃグリッドに存在している。検出された遺構は埋設土器１基・陥し穴４基・焼土２基・土坑４基、出土遺物は縄文時代草創期～弥生時代初頭のものまで幅広く確認されている。また、縄文時代晩期末～弥生時代の遺構は竪穴住居８棟、主に段丘の縁辺部に存在する緩斜面、－１Ｃ４・５グリッドで確認された。これらは先述したような影響を強く受けているため、遺構上半部が削平を受けているものや半壊している状態であった。ここでは、縄文時代中期末や時期不明と縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけての遺構や遺物を分けて報告する。

2．縄文時代草創期から中期末の遺構・遺物

1）埋設土器

1号埋設土器

[位置] －２Ｃ22グリッドに位置する。

[検出面・検出状況] Ⅱ層。検出当初土器がまとまって出土している状態であった。その周辺を遺構検出した際に土坑プランを確認できたため精査に入る。半裁し底面まで掘り下げていく段階で、倒立した土器が確認できたことから埋設土器と判断し改めて精査を行う。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。規模は1.32×0.96m、深さは0.66mである。

[底面・壁] 底面はほぼ平坦である。壁のほとんどは緩やかに立ち上がるが、一部で垂直に立ち上がり中端を確認できる所がある。

[埋土] 暗褐色シルト層が主体である。人為堆積で、十和田南部火山灰のブロックを埋め戻している。

[遺物] １は深鉢である。底部は削平を受けたため存在していない。

[遺構時期] 縄文時代中期末に属する。

[備考] 本遺構と１号焼土遺構は近接していたため、それらの周辺に竪穴住居等を示すような遺構が存在しているかどうか検出作業を行ったが確認されなかった。遺構時期は遺物の所属時期から判断している。

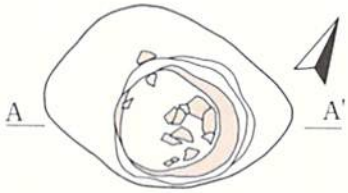
2）陥し穴

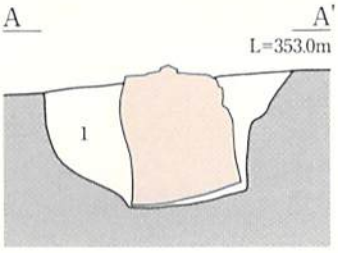
1号陥し穴

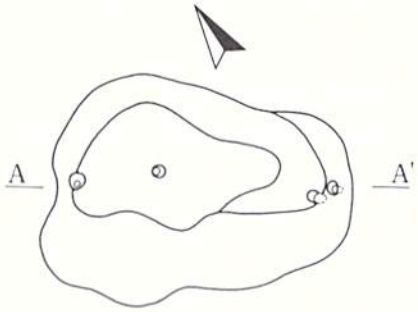
[位置] －２Ｃ21・22グリッドに位置する。

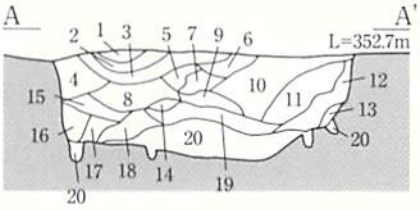
[検出面・検出状況] Ⅱ～Ⅲ層。頂頭部から北西斜面への落ち際において、楕円形プランを検出したことから精査に入る。

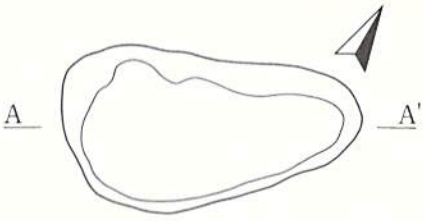
[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。規模は1.58×1.18m、深さは0.57mである。

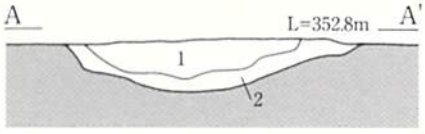












2号陥し穴

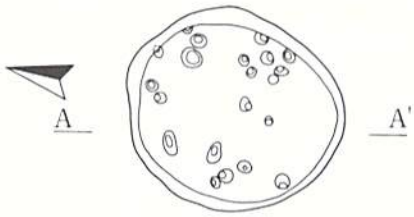
1　黒色シルト層（10Y R2/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。
　直径5～10㎜の焼土を微量含む。
2　暗褐色シルト層（10Y R3/4）粘性やや強く、しまり強い。
　南部浮石を多く含む。

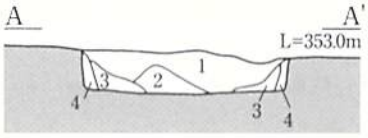
1号埋設土器

1　暗褐色シルト層（10Y R3/3）粘性並、
　しまり強い。
　直径3～5㎝の炭化粒を微量に含む。
　南部浮石が多く混入する人為堆積層。

1号陥し穴

1　黒色シルト層（5YR1.7/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。
2　黒色シルト層（5YR1.7/1）粘性弱く、しまりやや強い。
3　黒色シルト層（5YR1.7/1）粘性並、しまりやや強い。
4　黒色シルト層（5YR1.7/1）粘性弱く、しまり並。直径5㎜前後の
　焼土と炭化粒、黄褐色スコリアを微量含む。
5　4層と同様。
6　黒色シルト層（5YR1.7/1）粘性強く、しまりやや強い。
7　黒褐色シルト層（7.5YR2/2）粘性やや弱く、しまりやや強い。
8　黒色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。
　直径2～3㎜の焼土と炭化粒を微量含む。
9　8層に類似しているが、焼土と炭化物がなくなる。
10　黒色シルト層（7.5YR2/1）粘性強く、しまりやや強い。
11　10層より若干黒み増す。混入物は同じ。
12　褐色シルト層（10YR4/4）地山崩落土。
13　黒褐色シルト層（10YR2/3）地山崩落土をブロック状に少量含む。
14　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性、しまり共に強い。
15　14層と同様。
16　13層と同様。地山崩落土。
17　黒色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。
18　黒褐色シルト層（10YR2/3）粘性やや強く、しまりやや強い。
19　黄褐色シルト層（10YR5/6）粘性、しまり共に強い。
　南部浮石がブロック状に少量混入。
20　黒褐色シルト層（10YR3/2）粘性弱く、しまりやや強い。





3号陥し穴

1　黒色シルト層（5YR1.7/1）1号陥し穴の1～4層に類似。
　南部浮石がブロック状にやや多く含む。
2　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性並、しまりやや強い。
　1層と混合物は同じだが、若干明るみ増す。
3　黒褐色シルト層（10YR2/2）2層に類似だが混入物は減り、
　しまりが弱くなる。
4　暗褐色シルト層（10YR3/3）粘性、しまり共に弱い。地山崩落土。

第11図　1号埋設土器、1～3号陥し穴

［底面・壁］底面はほぼ平坦である。底面において逆茂木痕を４基検出し、それらは直線上に配置されている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

［埋土］黒～黒褐色シルト層主体で、20層に分層される。

［軸線方向］Ｎ－35°－Ｓ

［出土遺物］縄文土器７点出土したが、磨滅しているため図面掲載はしていない。

［遺構時期］縄文時代前期以降に属すると思われる。

［備考］平面形や配置は２号陥し穴と類似する。埋土主体層を基本層序において確認できないことからⅡ層以降の時期と考えられる。また、３・４号陥し穴との前後関係は不明である。

２号陥し穴

［位置］－２Ｃ18・23グリッドに位置する。

［検出面・検出状況］Ⅱ層。頂頭部から北斜面への落ち際において、楕円形プランを検出したことから精査に入る。

［平面形・規模］平面形は楕円形を呈する。規模は1.61×0.88m、深さは0.27mである。

［底面・壁］底面は中央が窪む皿状を呈する。底面において逆茂木痕等は検出されなかった。壁はなだらかに立ち上がる。

［埋土］黒～暗褐色シルト層が主体で、２層に分層される。

［軸線方向］Ｎ－60°－Ｓ。

［出土遺物］なし。

［遺構時期］縄文時代前半以降に属すると思われる。

［備考］１号陥し穴と同様の形状や規模であること、他の陥し穴と検出位置が同じであることから判断している。埋土主体層を基本層序において確認できないことからⅡ層以降の時期と考えられる。また、他の陥し穴との前後関係は不明である。

３号陥し穴

［位置］－１Ｃ７グリッドに位置する。

［検出面・検出状況］Ⅲ層。頂頭部から西斜面への落ち際において、円形プランを確認できたことから精査に入る。精査開始直後、土坑と判断していたが、底面にて小穴を確認したことから陥し穴と改めた。

［平面形・規模］平面形は円形を呈する。規模は1.12×1.08m、深さは0.22mである。

［底面・壁］底面は平坦である。底面において小穴を多数検出されたが、逆茂木痕がどれに相当するかは不明である。壁は垂直に立ち上がる。

［埋土］黒～暗褐色シルト層が主体で、４層に分層される。

［出土遺物］２は深鉢の底部で埋土中層から出土している。

［遺構時期］縄文時代前期以降に属すると思われる。

［備考］４号陥し穴と平面形や規模共に類似しているが、同時期に存在していたものかどうかは埋土主体層からは判断できない。埋土主体層を基本層序において確認できないことからⅡ層以降の時期と考えられる。また、他の陥し穴との前後関係は不明である。

4号陥し穴

[位置] －1C6グリッドに位置する。

[検出面・検出状況] Ⅲ～Ⅳ層。頂頭部から西斜面において検出する。Ⅲ層上面においての遺構検出時には、本遺構を把握できなかった。下層検出時に本遺構の存在を確認し、精査に入る。

[平面形・規模] 平面形は円形を呈する。規模は1.14×1.13m、深さは0.12～0.21mである。

[底面・壁] 底面はほぼ平坦で、部分的に礫層が確認されている。底面中央からは逆茂木痕が1基検出されている。壁は垂直に立ち上がる。

[埋土] 黒～暗褐色シルト層が主体で、2層に分層される。

[出土遺物] なし。

[遺構時期] 縄文時代前期以降に属すると思われる。

[備考] 3号陥し穴と平面形や規模共に類似しているが、同時期に存在していたものかは埋土主体層からは判断できない。埋土主体層を基本層序において確認できないことからⅡ層以降の時期と考えられる。また、他の陥し穴との前後関係は不明である。

3）焼土遺構

1号焼土遺構

[位置] －2C22グリッドに位置する。

[検出面・検出状況] Ⅲ層。楕円形を呈した焼土範囲を確認したことにより精査に入る。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。規模は0.60×0.42m、深さは0.13mである。

[底面・壁] 床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

[埋土] 黒褐～暗褐色シルト層が主体で、5層に分層される。

[出土遺物] なし。

[遺構時期] 縄文時代に属すると思われる。

2号焼土遺構

[位置] －2C17グリッドに位置する。

[検出面・検出状況] Ⅲ層。焼土範囲を確認したことにより精査に入る。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈する。規模は0.59×0.48m、深さは0.1mである。

[埋土] 黒褐～明赤褐色シルト層主体で、4層に分層される。

[底面・壁] 床面はほぼ平坦である。北壁は垂直に、南壁は外傾して立ち上がる。

[出土遺物] なし。

[遺構時期] 縄文時代に属すると思われる。

4）土坑

1号土坑

[位置] －2C17グリッドに位置する。

[検出面・検出状況] Ⅲ層。不整円形のプランが確認できたことにより精査に入る。

[平面形・規模] 平面形は不整円形を呈する。規模は0.77×0.59m、深さは0.21mである。

［底面・壁］底面は中央が窪み擂り鉢状である。壁は外傾して立ち上がる。

［埋土］黒褐色シルト層主体で、４層に分層される。

［出土遺物］埋土中から２点出土している。

［遺構時期］縄文時代に属すると思われる。

２号土坑

［位置］－２Ｃ17グリッドに位置する。

［検出面・検出状況］Ⅲ層。楕円形のプランが検出されたことにより精査に入る。

［平面形・規模］平面形は楕円形を呈する。規模は0.71×0.43m、深さは0.17mである。

［底面・壁］底面はほぼ平坦である。底面中央に小穴を持つ。壁は外傾して立ち上がる。

［埋土］暗褐色シルト層主体で、３層に分層される。

［出土遺物］埋土中から20点出土しているが、磨滅しているため図面掲載は不可能であった。

［遺構時期］縄文時代に属すると思われる。

３号土坑

［位置］－２Ｃ17グリッドに位置する。

［検出面・検出状況］Ⅲ層。不整円形のプランが確認できたことにより精査に入る。

［平面形・規模］平面形は楕円形を呈する。規模は0.98×0.62m、深さは0.15mである。

［底面・壁］底面は平坦である。残存している南壁は外傾して立ち上がる。

［埋土］暗褐色～黄褐色シルト主体で、２層に分層される。

［出土遺物］なし。

［遺構時期］縄文時代に属すると思われる。

［備考］後世の削平を受けているため、西壁は残存していない。

５号土坑

［位置］－２Ｃ12グリッドに位置する。

［検出面・検出状況］Ⅲ層。

［平面形・規模］平面形は円形を呈する。規模は0.53×0.52m、深さは0.12mである。

［底面・壁］底面は擂り鉢状で中央が窪む。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

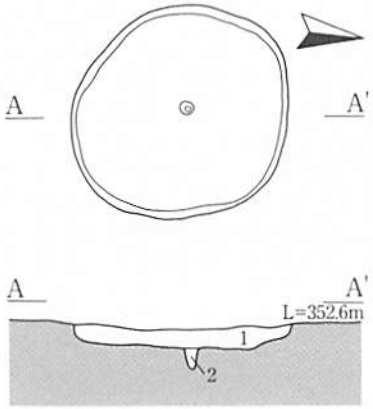
［埋土］暗～黄褐色シルト層が主体で、２層に分層される。

［出土遺物］なし。

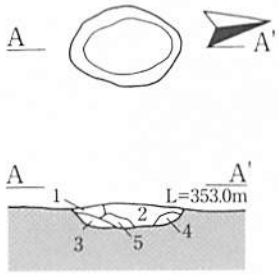
［遺構時期］縄文時代に属すると思われる。

５）遺構外出土遺物

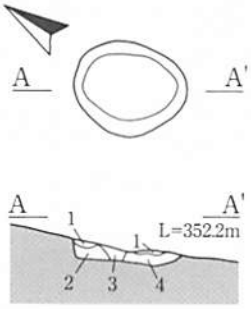
縄文時代の遺物がⅡからⅥ層中から、ＸⅡ層及び縄文時代晩期末から弥生時代初頭に属する竪穴住居から出土している。竪穴住居は中期末の包含層を掘り込んで形成していることから、住居埋土内からは縄文時代晩期末から弥生初頭にかけての遺物と共にそれらが出土している。今回は、中期末に属する土器は、竪穴住



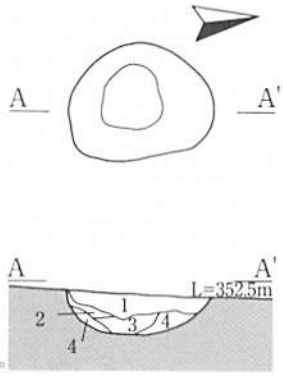
4号陥し穴
1　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性並、しまりやや強い。
2　暗褐色シルト層（10YR3/4）粘性並、しまりやや強い。



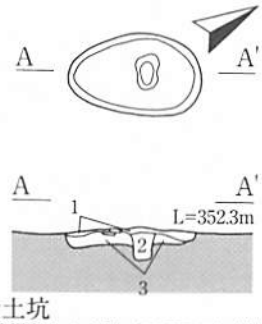
1号焼土
1　暗褐色シルト層（10YR3/4）粘性弱く、しまり強い。
焼土を多く含む。
2　黒褐色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。
直径3～5㎜の焼土と炭化粒を微量含む。
3　暗褐色シルト層（10YR3/4）粘性やや弱く、しまりやや強い。
地山崩落土。
4　黒褐色シルト層（10YR2/3）粘性やや強く、しまり強い。
地山ブロックを含む。
5　色調は3層に近いが、直径5㎝の地山ブロックと焼土ブロックをやや多く含む。色調は3層に近い。



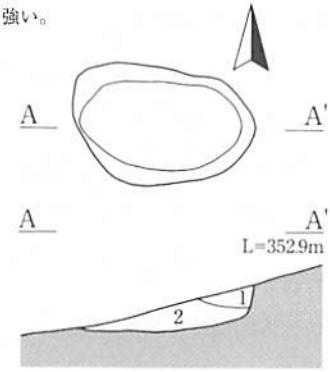
2号焼土
1　明赤褐色シルト層（5YR5/6）粘性弱く、しまり強い。
焼土。
2　褐色シルト層（10YR4/6）
3　黒褐色シルト層（10YR3/2）粘性弱く、しまり強い。
黄褐色スコリアを微量に含む。
4　褐色シルト層（10YR4/6）粘性弱く、しまり強い。



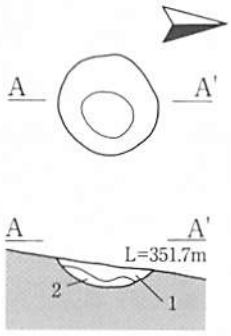
1号土坑
1　黒色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。直径5～10㎜の焼土を微量含み、黄褐色スコリアをやや多く含む。
2　黒褐色シルト層（10YR2/3）粘性やや強く、しまり強い。
3　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性やや強く、しまり強い。
南部浮石のブロックが混入。
4　黄褐色シルト層（10YR5/6）粘性やや強く、しまり強い。地山崩落土をブロック状に混入。



2号土坑
1　暗褐色シルト層（10YR3/3）粘性、しまり共に強い。黄褐色スコリアを少量含む。土器出土。
2　暗褐色シルト層（10YR3/4）粘性やや強く、しまり強い。黄褐色スコリアを微量含む。
3　にぶい黄褐色シルト層（10YR4/3）粘性、しまり共に並。黄褐色スコリアを多く含む。地山に近い。

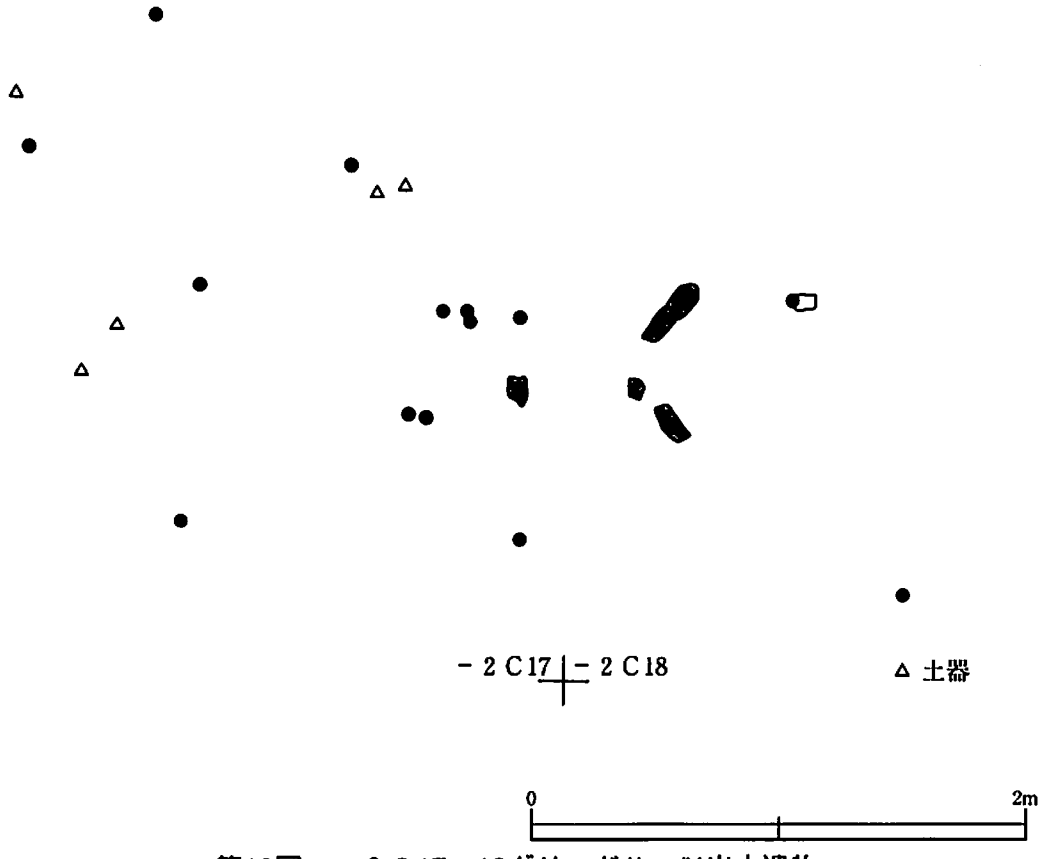


3号土坑
1　黄褐色シルト層（10YR5/8）粘性弱く、しまりやや強い。南部浮石が微量混入。
2　2号土坑の1層と同じ。



5号土坑
1　2号土坑の1層と同じ。
2　黄褐色シルト層（10YR5/6）
粘性弱く、しまり並。南部浮石が微量混入。

第12図　4号陥し穴、1・2号焼土、1～5土坑



第13図　－２Ｃ17・18グリッドⅡ～Ⅳ出土遺物

居の出土遺物で報告せず遺構外遺物として一括して扱う事とする。時期が古い順から記載を行う。

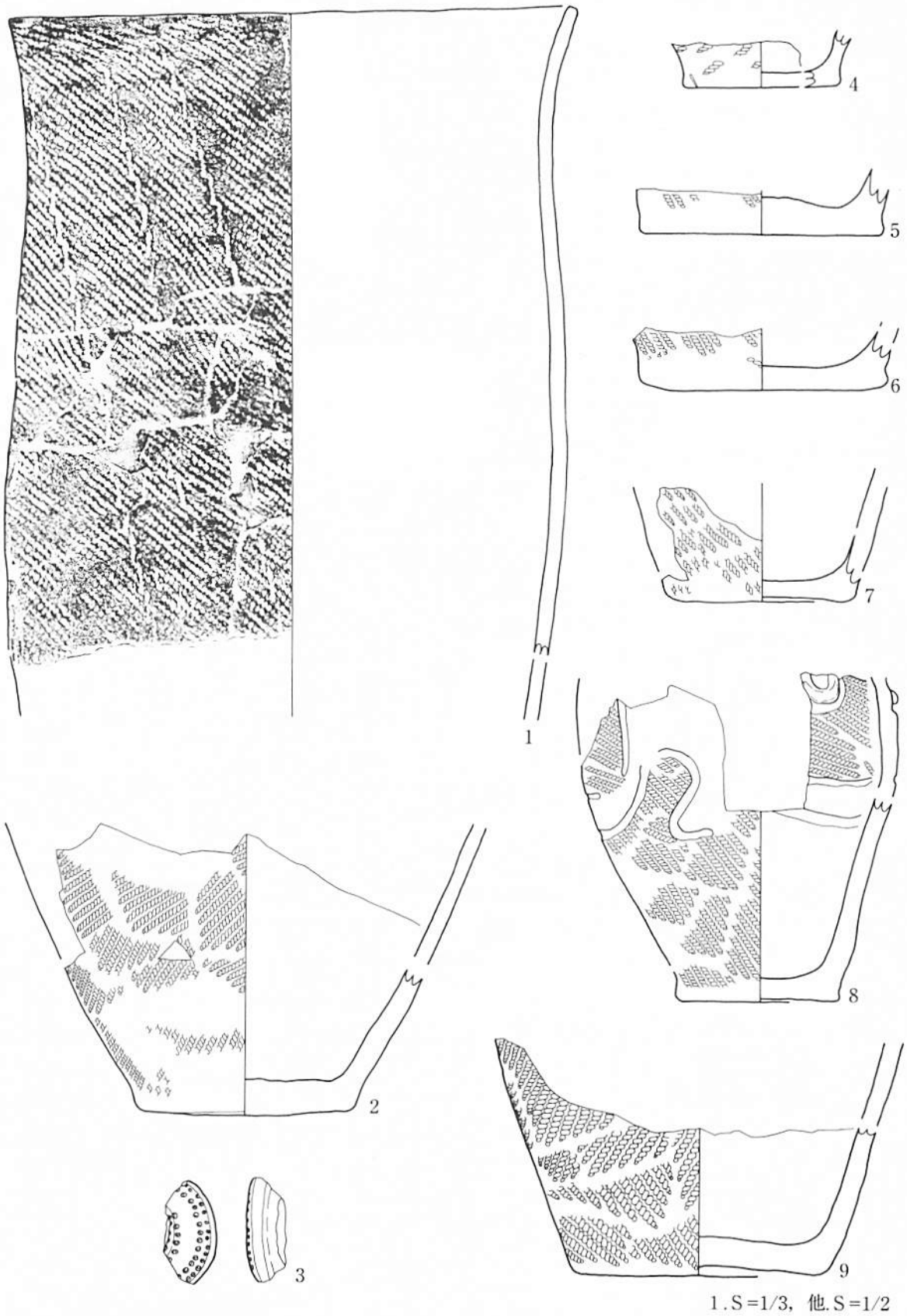
－１Ｃ７グリッドのⅥ層上面から出土した19は頁岩製の槍先形尖頭器である。形状は柳葉形を呈し、長さ6.2cmのものである。後期旧石器時代終末から縄文時代草創期に属する。

－１Ｃ３・22グリッドのⅣ層からⅤ層にかけて出土した20と21は磨製石斧である。20は刃部を中心に研磨を施しており、側面の一部製に作段階の剥離を残している。21は全面に研磨を施し製作されており、製作段階の剥離は残存していない。20は早期、21は前期から早期かけて属する。

－１Ｃ２・９グリッドのⅡからⅢ層にかけて出土した４・５・９は、深鉢の底部である。また、－２Ｃ17・18グリッドのⅡからⅣ層にかけて土器や石器が第13図に示したようにまとまりをみせ出土している。土器は磨滅し、石器はチップを含めた剥片類が多いため、図面掲載できたのは石鏃（22)、不定形石器（23)と耳飾（３）のみである。これらは早期から前期にかけてに属する。

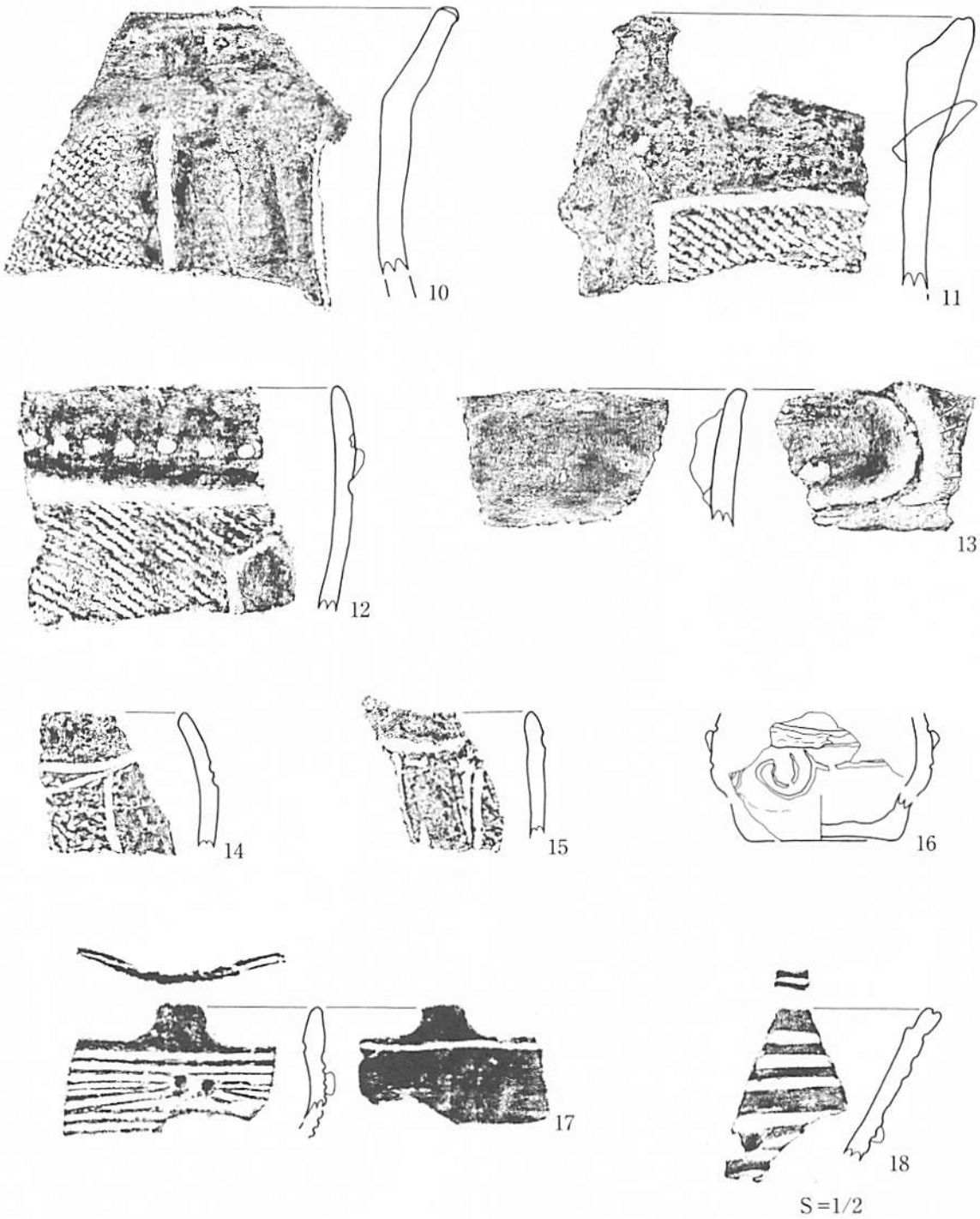
－１Ｃ13・14・18・19グリッド南側の斜面部にのみ残されていたＸⅡ層や竪穴住居の埋土からは、８・10～16の土器が出土している。これらは大木10式に比定されるものと考えられ、また当該期の石匙も出土している。

表土から出土した17・18は変形工字文を有する浅鉢である。前者は大洞Ａ′式、後者は砂沢式に比定されるものと思われる。

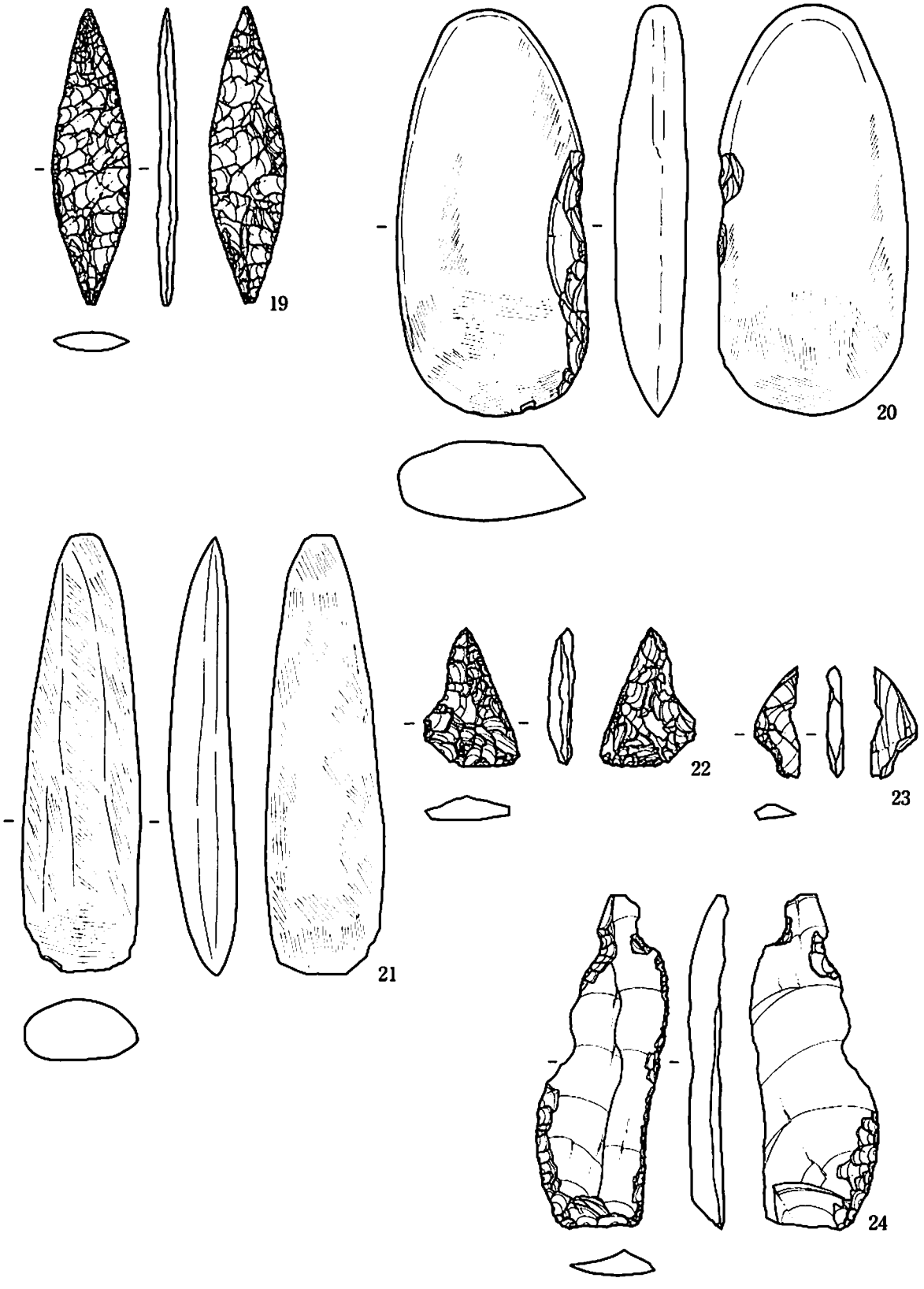


1.S=1/3, 他.S=1/2

第14図　1号埋設土器，3号陥し穴，遺構外出土遺物(1)



第15図　遺構外出土遺物(2)



20・21. S＝1/2, 他. S＝4/5

第16図　遺構外出土遺物(3)

3．縄文時代晩期末～弥生時代初頭の遺構・遺物

1）竪穴住居

1号竪穴住居

［位置］－1Ｂ4グリッドに位置する。

［検出面］ＸＶ層。

［検出状況］段丘の先端部が後世により削平され、その露出した断面より土器が確認されたため、遺構の存在を調査当初から認識していた。しかし遺構プランは不明瞭であったため、本来遺構検出面であった段丘上面に露出した断面に直交するようにサブトレンチを複数入れたことから、半円状を呈した平面プランを確認した。また、その露出した断面観察によりその壁の立ち上がり及び床面を確認できた。それらの結果、2号竪穴住居に切られていることを認識し精査に入る。

［重複関係］2・6号竪穴住居と重複しているが、6号→1号→2号竪穴住居の順で新しくなる。

［平面形］確認できた平面形は半円形を呈する。他の竪穴住居から考えると楕円形に近いプランを呈していたものと思われる。

［規模］確認できた規模は3.66×1.94m、深さは0.48mである。

［埋土］黒～黒褐色シルト色主体で、17層に分層される。

［床面・壁］床面はほぼ平坦であるが、西へ下る斜面に沿って傾斜している。残存していた西壁は外傾して立ち上がる。

［柱穴］なし。

［炉］なし。ただし埋土内において焼土を多く確認できたことから削平された側に存在していた可能性がある。

［出土遺物］深鉢・鉢・浅鉢・壺などの土器353点、石器28点が埋土中位から床面にかけて出土している。25・26・37・38は浅鉢である。27～36は鉢、39は壺、40～43は粗製の深鉢である。25・26・37は変形工字文を有するもので、37のみ粘土瘤がある。38は平行沈線と方形状の刺突を組み合わせたものである。27～36の鉢は口縁部直下に平行沈線のもの、平行沈線と波状沈線を組み合わせたもの、指頭による沈みのものに分けられる。44は無茎石鏃、45・48は不定形石器で、それぞれ剥片の末端部に二次加工を有する。46・47・49は楔形石器で、上下に微細剥離痕を有している。50は敲石である。

［遺構時期］縄文時代晩期末～弥生時代初頭に属する。

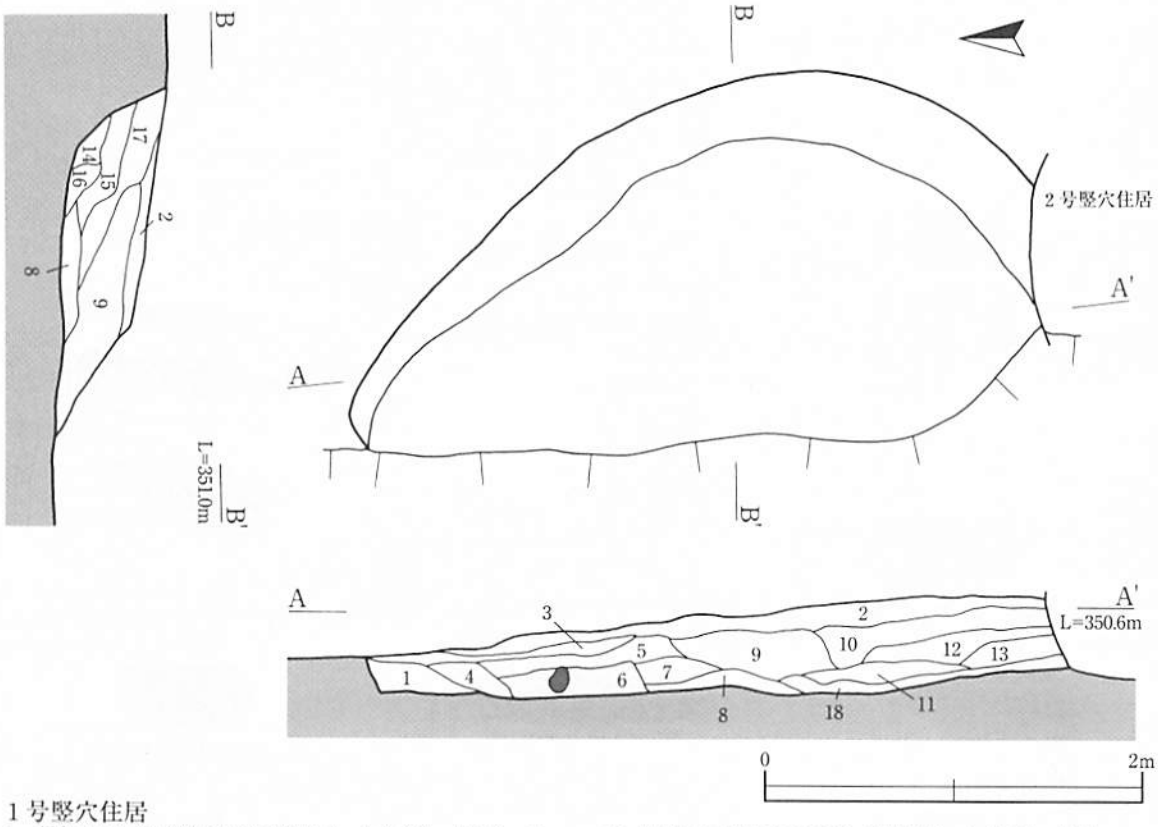
2号竪穴住居

［位置］－1Ｂ4・10グリッドに位置する。

［検出面］ＸＶ層。

［検出状況］1号竪穴住居と同様、竪穴住居として認識していたものの遺構プランは不明瞭であった。そのため1号竪穴住居と同様に露出した断面に直交するようにサブトレンチを入れ断面観察を行うことで、本遺構の壁の立ち上がりと床面及び半円状を呈した平面形を確認できた。それらの結果、本遺構が最も新しいことを認識し精査に入る。

［重複関係］1・3・6・7・9・11号竪穴住居と重複しているが、3号→11号→9号→7号→6号→1号



1号竪穴住居

1　黒色シルト層（10YR2/1）粘性弱く、しまり並。直径2～5㎜の浅黄橙スコリアを少量含む。直径3～5㎜の炭化粒を微量含む。
2　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性弱く、しまりやや強い。
3　黒褐色シルト層（10YR3/1）直径1～3㎜黄橙スコリア、直径15㎜の礫を少量含む。
4　黒色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。
5　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。直径1～3㎜の黄橙スコリア微量、直径1～5㎜の炭化粒微量と焼土を微量含む。
6　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性やや弱く、しまり並。
7　黒色シルト層（10YR2/1）しまりやや弱い。直径1～3㎜の黄橙スコリア微量、直径1～5㎜の焼土を微量含む。
8　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性並、しまりやや強い。地山ブロックを微量混入。
9　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性弱く、しまり並。黄橙スコリア少量混入、直径10～15cmの礫少量混入。
10　黒色シルト層（10YR2/1）粘性弱く、しまり並。直径1～3㎜の黄橙スコリア微量含む。
11　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性並、しまり並。黄橙スコリア微量、直径1～5㎜の炭化粒、焼土微量含む。
12　黒色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまり並。黄橙スコリア微量、直径1～5㎜の焼土微量含む。
13　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性弱く、しまり並。黄橙スコリア微量含む。
14　褐色シルト層（10YR4/4）粘性やや弱く、しまり強い。地山ブロックを混入。
15　暗褐色シルト層（10YR3/4）粘性やや弱く、しまり強い。黄橙スコリア少量含む。
16　15と同じ。
17　暗褐色シルト層（10YR3/3）黄橙スコリア少量含む。
18　黒色シルト層（10YR2/1）粘性弱く、しまり並。6層に近い。

第17図　1号竪穴住居

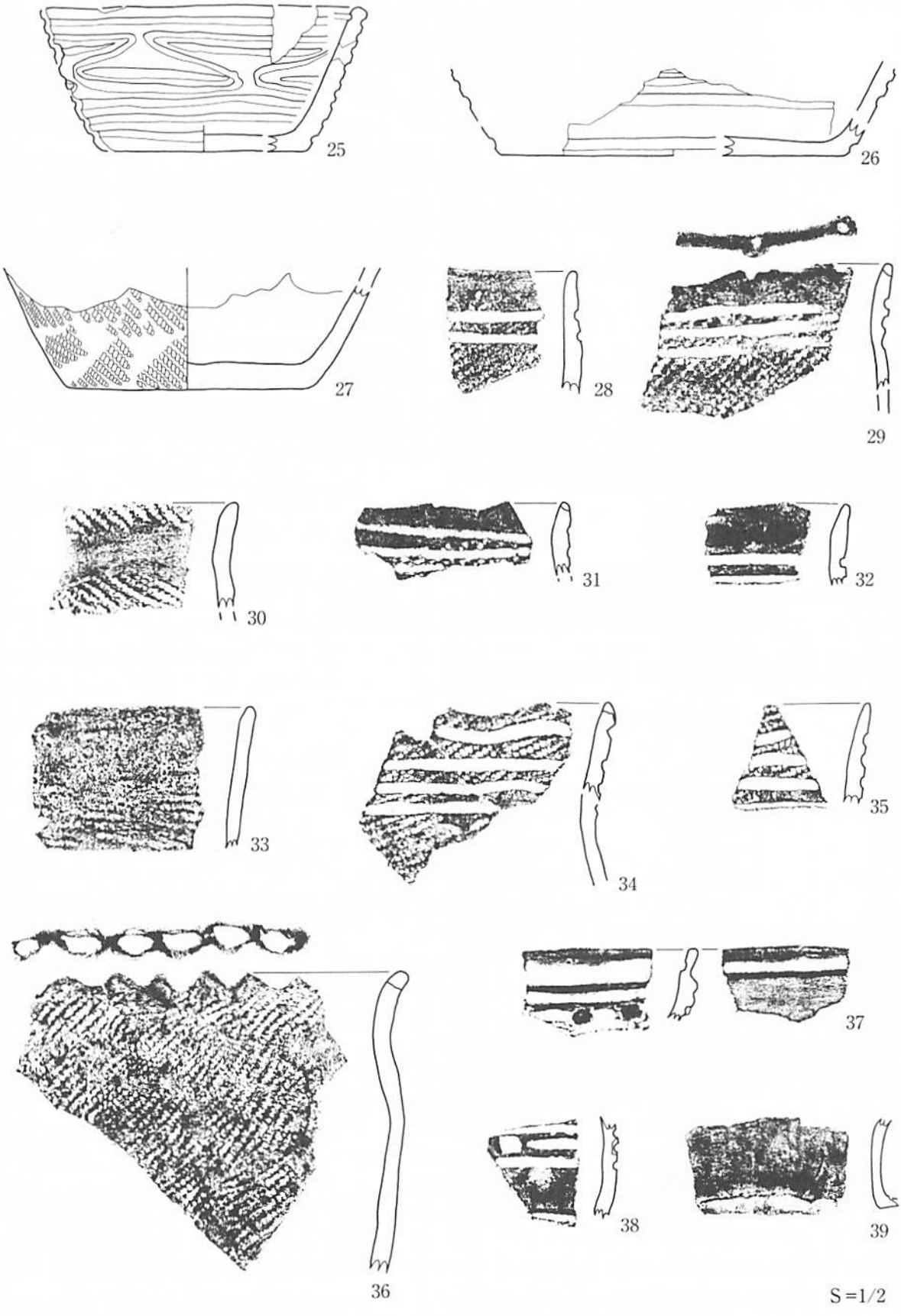
→2号竪穴住居の順に新しくなる。

［規模］確認できた規模は3.76×2.08m、深さは0.41～0.48mである。

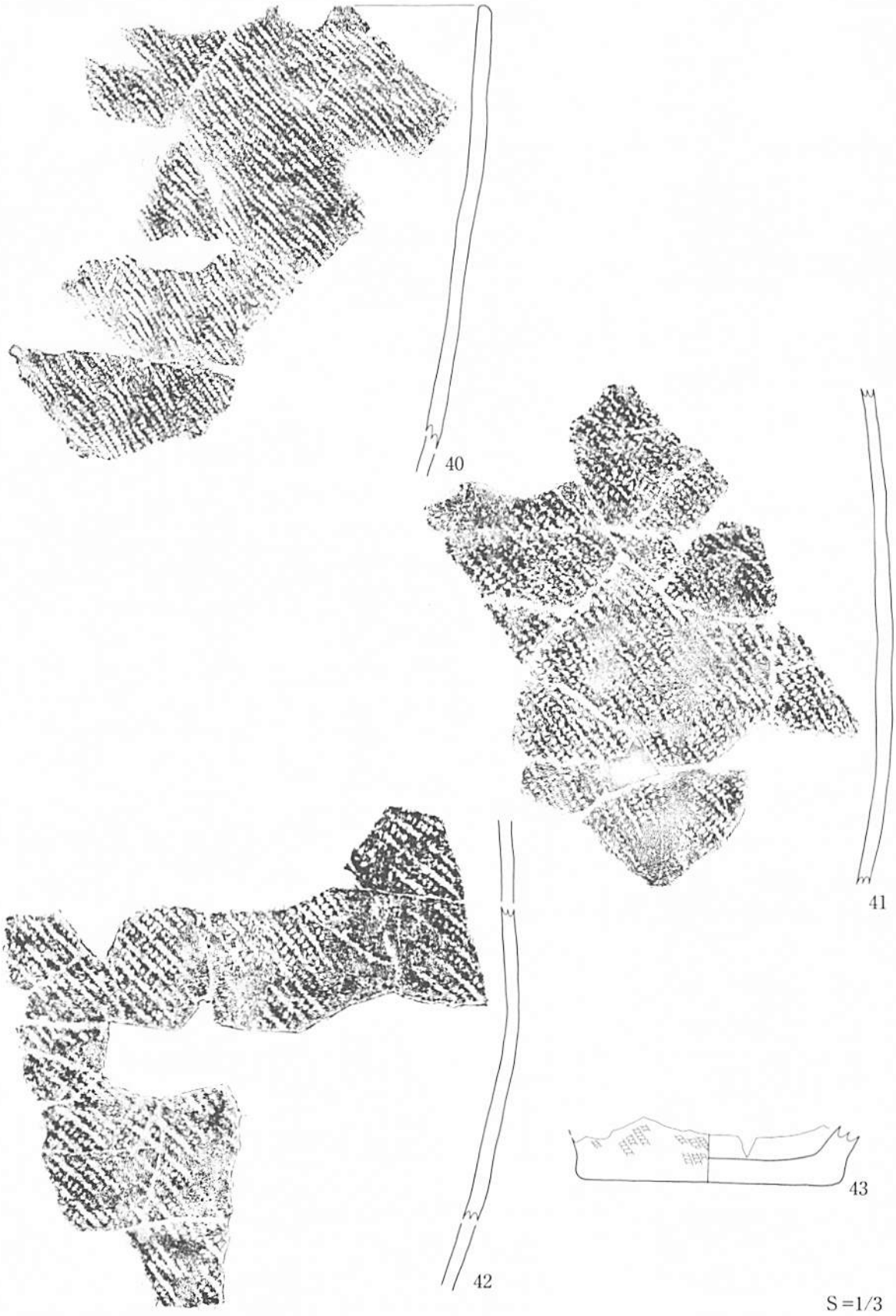
［平面形］確認できた平面形は半円形を呈する。平面形が確認できた他の竪穴住居と同様な楕円形を呈していたものと思われる。

［埋土］黒～暗褐色シルト層主体で、17層に分層される。

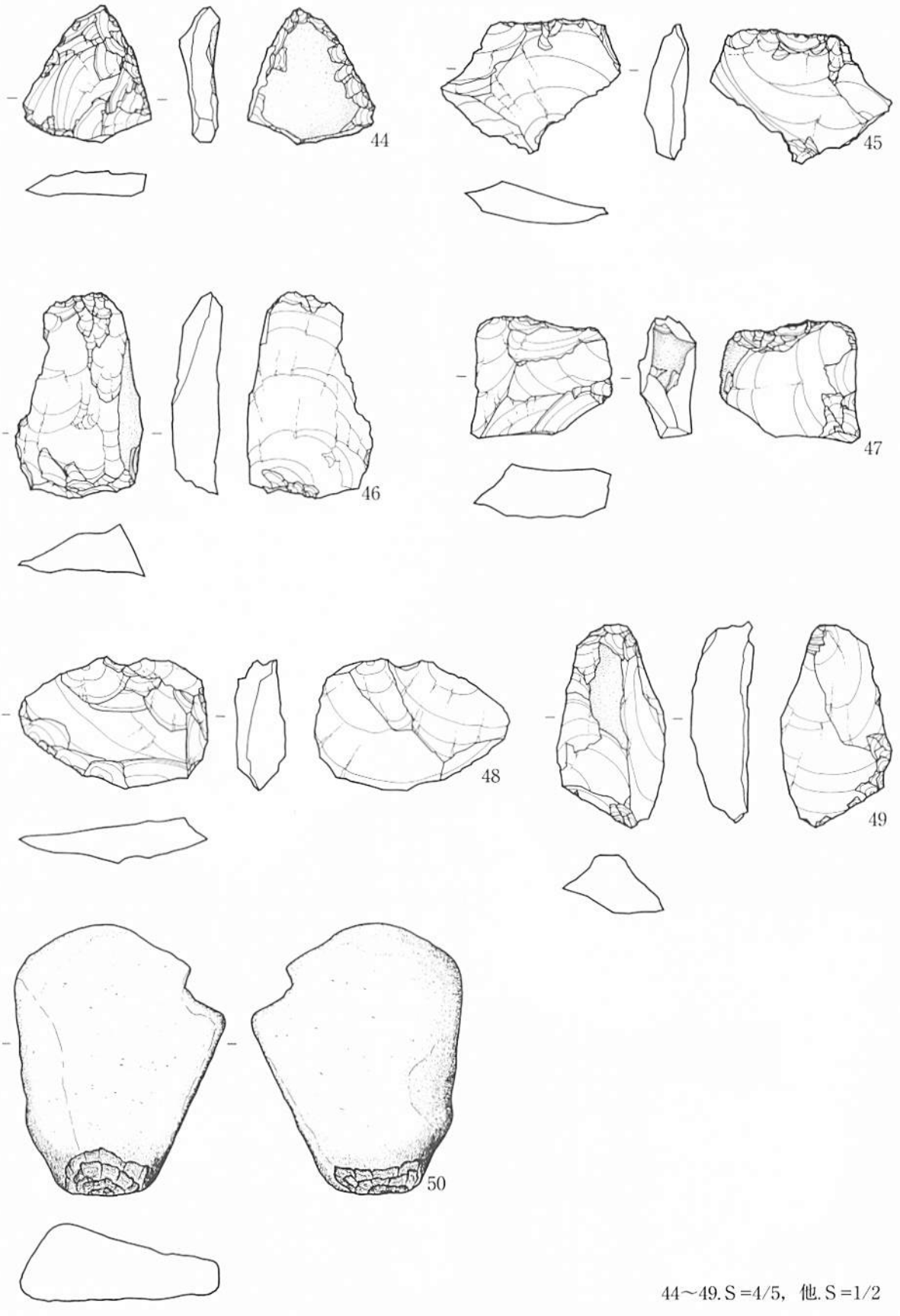
［床面・壁］床面はほぼ平坦であるが、西に下る斜面に沿って緩やかに傾斜している。残存していた西壁は外傾して立ち上がる。



第18図　1号竪穴住居出土遺物(1)

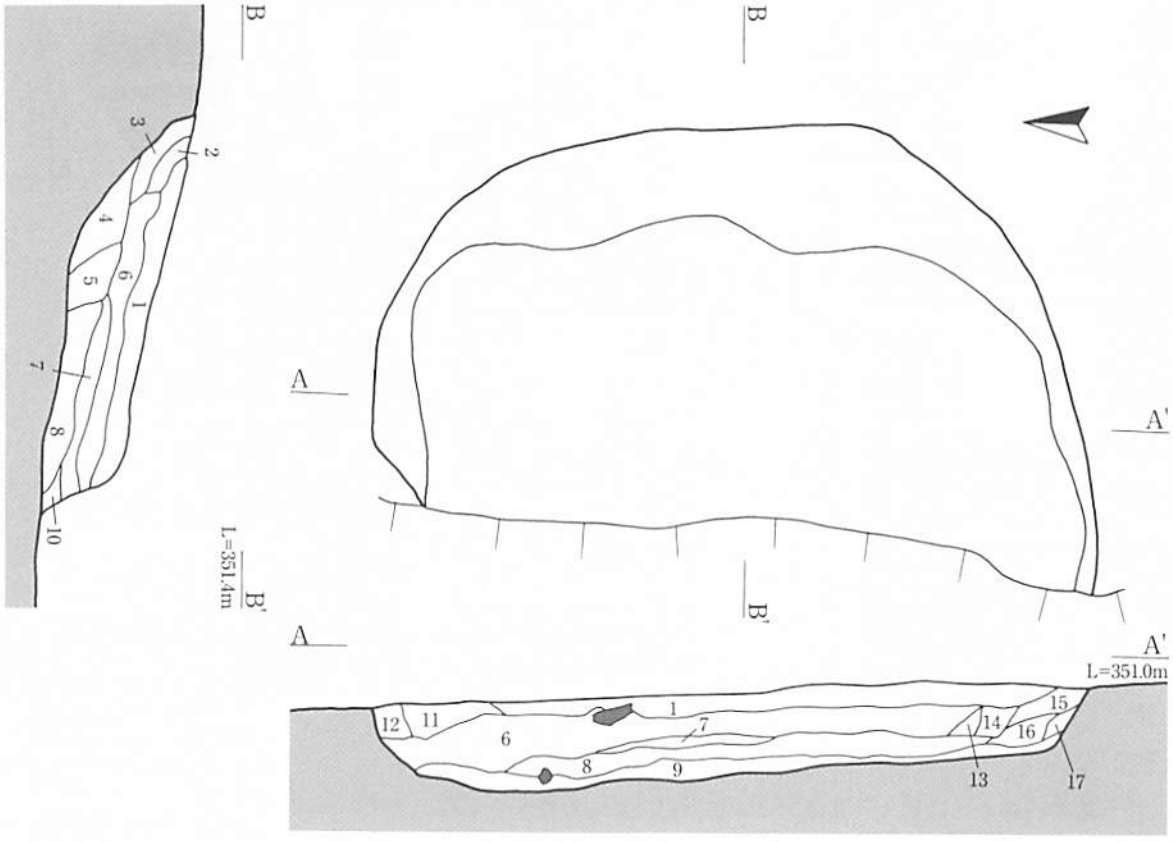


第19図　1号竪穴住居出土遺物(2)



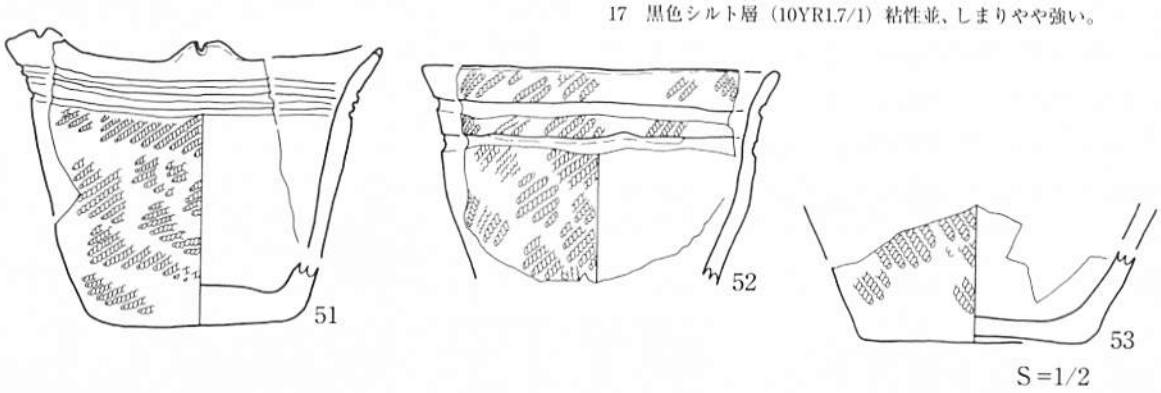
44～49. S＝4/5，他. S＝1/2

第20図　1号竪穴住居出土遺物(3)

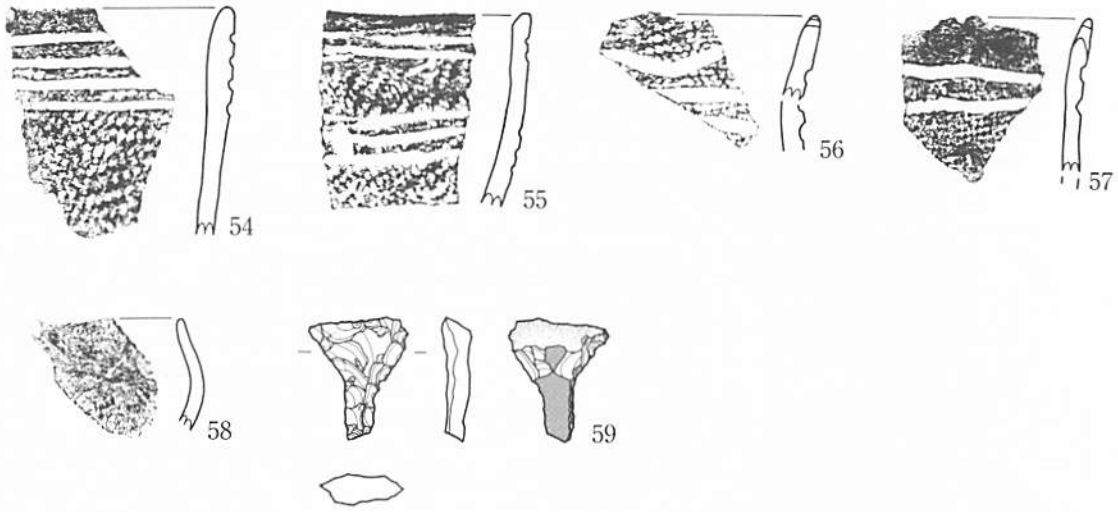


2号竪穴住居

1　黒褐色シルト層（10YR2/3）粘性弱く、しまりやや強い。浅黄橙スコリアを少量含み、直径3～5㎝の礫を少量混入。
2　暗褐色シルト層（10YR3/3）粘性弱く、しまりやや強い。浅黄橙スコリアを微量含む。
3　暗褐色シルト層（10YR3/4）粘性弱く、しまりやや強い。2層より若干しまり、粘性は増しており、直径3～5㎝の礫を少量混入。
4　暗褐色シルト層（10YR3/4）粘性弱く、しまりやや強い。地山ブロックをやや多く含み、黄澄スコリアを少量含む。
5　暗褐色シルト層（10YR3/3）粘性弱く、しまりやや強い。地山ブロックを少量、黄澄スコリアを微量含む。
6　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性弱く、しまりやや強い。黄澄スコリア少量、直径1～5㎜の炭化粒を少量含む。
7　黒色シルト層（10YR2/1）粘性弱く、しまり強い。黄澄スコリアを微量含む。
8　黒色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。黄澄スコリアを微量、直径1～5㎜の炭化粒を少量含む。
9　黒色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。地山ブロックを少量混入し、黄澄スコリアを微量、直径1～5㎜の焼土、炭化粒を少量混入。
10　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性並、しまり強い。浅黄澄スコリアを微量、直径1～5㎜の焼土、炭化粒を微量含む。
11　黒褐色シルト層（10YR3/1）粘性弱く、しまりやや強い。1層に近いが混入物が少なくなる。
12　黒色シルト層（10YR1.7/4）粘性やや弱く、しまりやや強い。（1号住埋土ブロックが混入する。）直径5㎝の礫少量混入。
13　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。黄澄スコリア微量含む。
14　黒色シルト層（10YR2/1）粘性弱しまり共にやや強い。黄澄スコリア微量含む。
15　黒色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。4住埋土混入。黄澄スコリア微量含む。
16　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性並、しまりやや強い。黄澄スコリアを微量含む。
17　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性並、しまりやや強い。



第21図　2号竪穴住居・出土遺物(1)



54～58. S＝1/2，他. S＝4/5

第22図　２号竪穴住居出土遺物(2)

［柱穴］なし。

［炉］なし。

［出土遺物］鉢とミニチュア土器などの土器200点、石器６点が埋土中位から床面にかけて出土している。51～57は鉢で、口縁部直下に平行沈線のもの、平行沈線と波状沈線を組み合わせたものがある。58は鉢を模したミニチュア土器、59は石錐の摘部で、被熱により錐部は欠損している。

［遺構時期］縄文時代晩期末～弥生時代初頭に属する。

３号竪穴住居

［位置］－１Ｂ10グリッドに位置する。

［検出面］ＸＶ層。

［検出状況］１・２号竪穴住居と同様に存在していることを認識していたがプランは不明瞭であった。１・２号竪穴住居と同様の方法により壁の立ち上がりと床面及び半円状を呈した平面形を確認できた。それらの結果、２号竪穴住居に切られていることを判明し精査に入る。

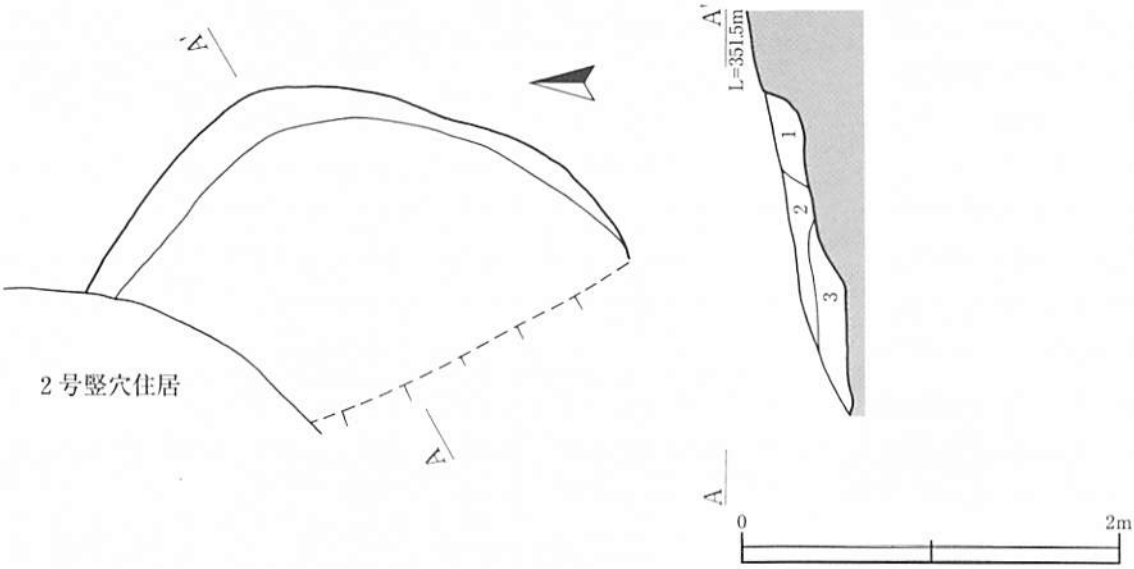
［重複関係］２・11号竪穴住居と重複しているが、３→11→２号竪穴住居の順に新しくなる。

［規模］規模は2.02×1.73m、深さは0.15～0.24mである。

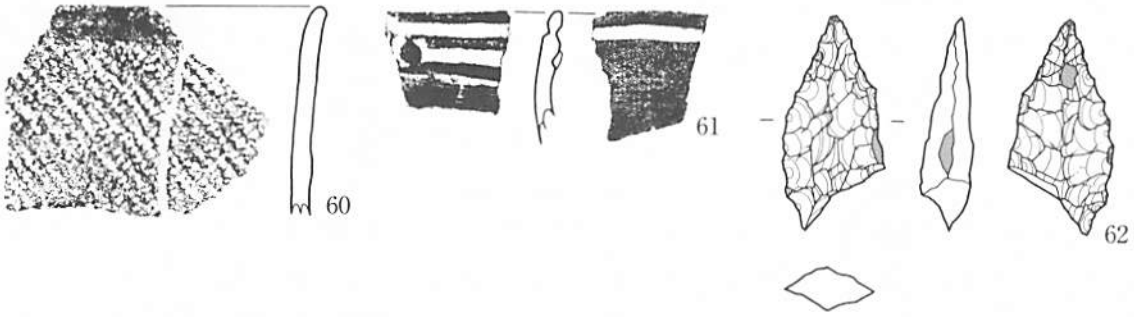
［平面形］平面形は削平され他の竪穴住居に切られているため、ほとんどその平面形状を残していない。残存していた平面形は扇形を呈している。平面プランが確認できる他の竪穴住居と同様楕円形を呈していたものと思われる。

［埋土］黒～暗褐色シルト主体で、３層に分層される。

［床面・壁］床面はほぼ平坦であるが、斜面に沿って西に傾斜している。残存している西壁は外傾して立ち上がる。



3号竪穴住居
1　褐色シルト層（10YR4/4）粘性弱く、しまり並。地山崩落土。
2　黒褐色シルト層（10YR3/2）粘性弱く、しまりやや強い。直径3～5㎜の焼土と炭化粒を微量含む。
3　暗褐色シルト層（10YR3/3）粘性弱く、しまり並。直径5～10㎜の焼土と炭化粒を少量含む。



60・61.S=1/2，他.S=4/5

第23図　3号竪穴住居・出土遺物

［柱穴］なし。

［炉］なし。

［出土遺物］鉢や浅鉢などの土器41点、石器4点が埋土中～下位にかけて出土している。大半は磨滅し図面掲載は不可能であった。60は鉢、61は浅鉢で粘土瘤が貼付られているものである。62は基部側が欠損している石鏃である。残存部の形状から柳葉形を呈する可能性がある。

［遺構時期］縄文時代晩期末から弥生時代初頭に属する。

6号竪穴住居

［位置］－1B3・4・9グリッドに位置する。

［検出面］XV層。

［検出状況］断面観察当初において本遺構は、1号竪穴住居と同一のものと把握していたため、その存在を認識していなかった。1・2号竪穴住居の精査を進めていく中で、1号竪穴住居と異なるプランを断面において確認できた。そのため再度断面観察を行った結果、壁の立ち上がりを確認した。さらに本遺構と7号竪穴住居とした遺構との切り合い関係が不明瞭であったことから、南北方向に長いサブトレンチを入れたことによりその床面と7号竪穴住居より新しいこと、楕円形の平面プランを呈することを認識し精査に入る。確認できた本遺構は床面のみであった。

［重複関係］1・2・7・10号竪穴住居と重複しているが、10号→7号→6号→1号→2号号竪穴住居の順に新しくなる。

［規模］規模は5.32×3.28m、深さは0.07～0.1mである。

［平面形］平面形は楕円形を呈する。

［埋土］黒褐色～暗褐色シルト層が主体で、6層に分層される。

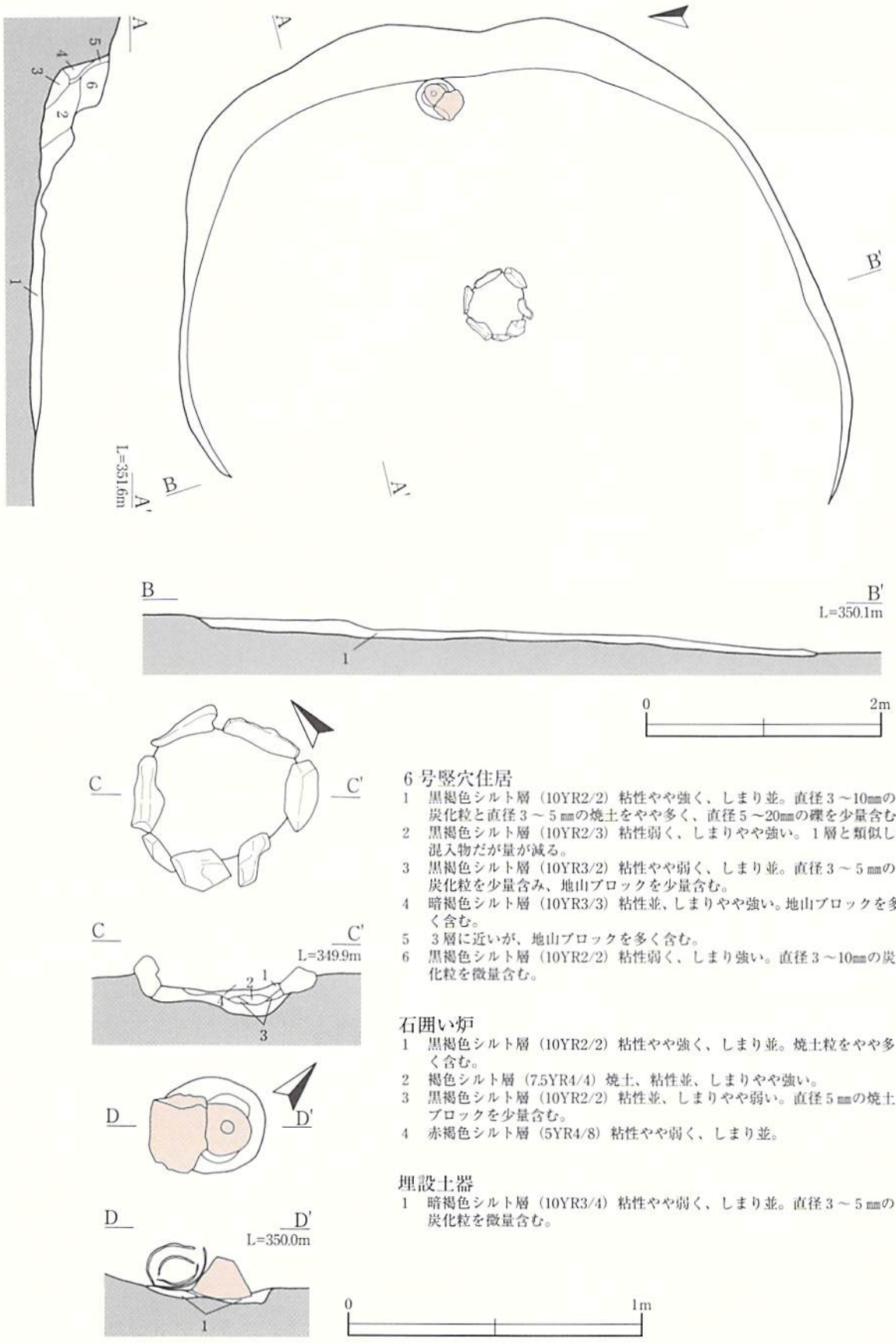
［床面・壁］床はほぼ平坦であるが、若干北に傾斜している。残存している東壁は0.5mあり、外傾しながら立ち上がる。

［柱穴］なし。

［炉］石囲い炉が住居中央部で1基検出された。平面形は楕円形を呈する。規模は0.63×0.62m、焼土の層厚は0.09mである。組まれた礫は角～亜角礫で7点あり、各重量は2.6～4.5kg、総重量は18.6kgある。石材は砂岩や粘板岩が用いられ、それらはウチナイ沢で採取可能である。

［埋設土器］住居の東側で1基検出された。土坑の規模は0.45×0.33m、深さは0.08mである。鉢（64）が倒立して土坑に埋められ、その倒立した土器の脇に深鉢（63）が横位の状態で検出した。横位の深鉢を立ち割った際に入れ子として鉢（65）が存在していた。植物埋納に使用されたものと考えられる（109頁参照）。

［出土遺物］土器1057点、土製品2点、石器132点が埋土下位から床面より出土した。その大半は床面に張り付いた状態で出土している。土器は深鉢・鉢・浅鉢・壺・ミニチュア土器で、石器は石鏃、石匙、不定形石器、楔形石器、石核、叩き石、凹石などである。63・79は深鉢で、両者共に胴部から口縁部にかけて内傾するものである。64～77、81～119、121は鉢である。工字文を有するもの、平行沈線のもの、指頭による沈みのもの、平行沈線と波状沈線を組み合わせたものがある。78・129は壺で、78は口唇部が最もすぼまるもので、頸部上半部に平行沈線と隆帯を有する。122～128は浅鉢で、125以外は変形工字文を有するものである。122のみ粘土瘤がある。80・120はミニチュア土器、80は台付鉢を模倣したものである。63の深鉢と64・65の鉢は埋設土器に使用されている。130・131は土偶の脚部である。132～142は石鏃で、132～134は有茎鏃、135～142は無茎鏃である。後者の中で135の形状は柳葉形、140と142の形状は広葉形を呈し両者共に基部側を尖らしている。143は石錐である。144～146は石匙で、144は縦型、145は刃部は欠損しているものの横型か斜位型と思われる。146は摘部作出されていないが形状から石匙未製品と考えられる。147～151・153・155・159・161・163・164・178の不定形石器は、それぞれ側縁部に二次加工が施されている。152・154・160・162・165～177は楔形石器で、162と175は上下左右の四辺全てに微細剥離を有し、それ以外は上下にのみ微細剥離を有する。180・181は石核で、一定方向から連続した剥離を行ってお



6号竪穴住居

1　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性やや強く、しまり並。直径3～10㎜の炭化粒と直径3～5㎜の焼土をやや多く、直径5～20㎜の礫を少量含む。
2　黒褐色シルト層（10YR2/3）粘性弱く、しまりやや強い。1層と類似した混入物だが量が減る。
3　黒褐色シルト層（10YR3/2）粘性やや弱く、しまり並。直径3～5㎜の炭化粒を少量含み、地山ブロックを少量含む。
4　暗褐色シルト層（10YR3/3）粘性並、しまりやや強い。地山ブロックを多く含む。
5　3層に近いが、地山ブロックを多く含む。
6　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性弱く、しまり強い。直径3～10㎜の炭化粒を微量含む。

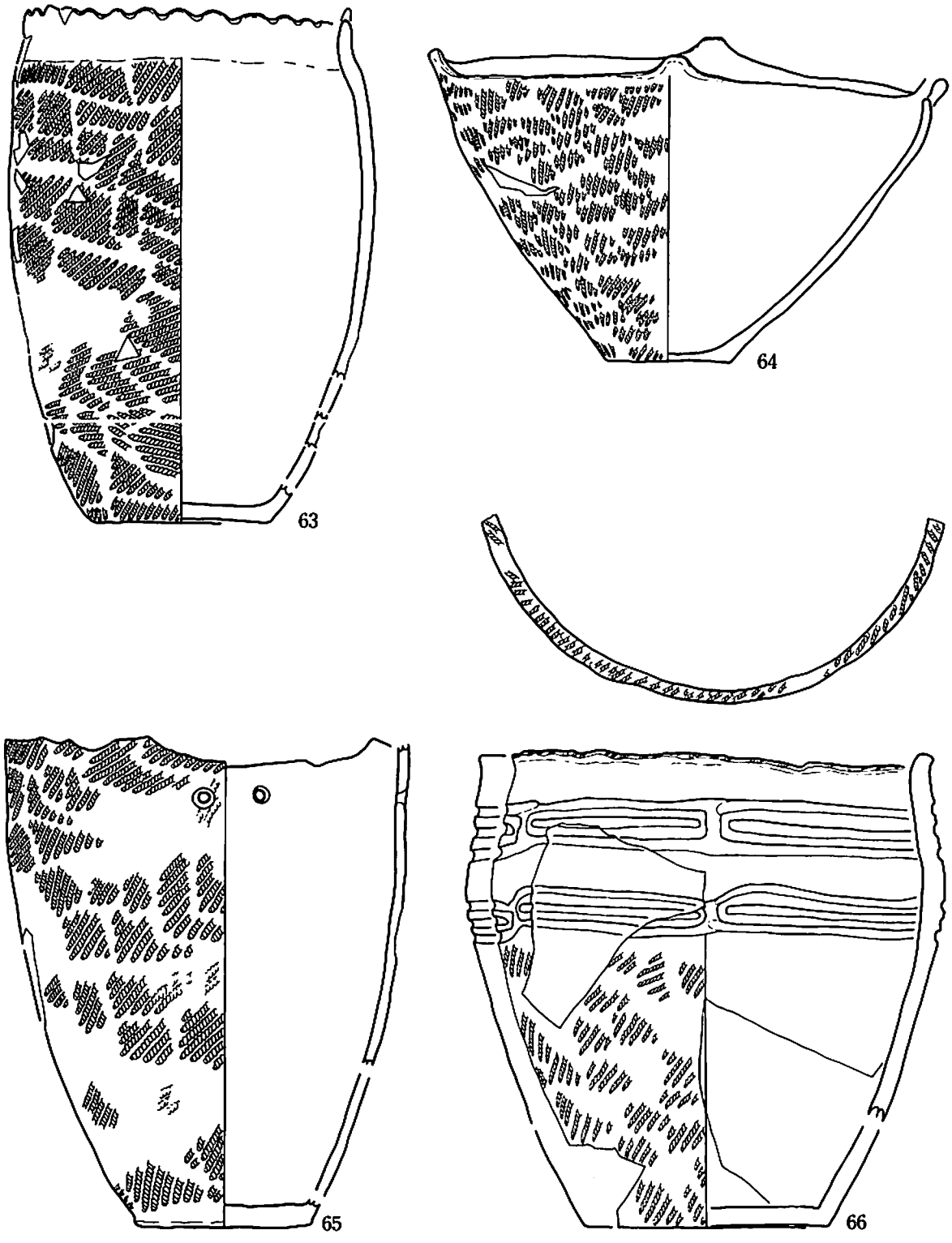
石囲い炉

1　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性やや強く、しまり並。焼土粒をやや多く含む。
2　褐色シルト層（7.5YR4/4）焼土、粘性並、しまりやや強い。
3　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性並、しまりやや弱い。直径5㎜の焼土ブロックを少量含む。
4　赤褐色シルト層（5YR4/8）粘性やや弱く、しまり並。

埋設土器

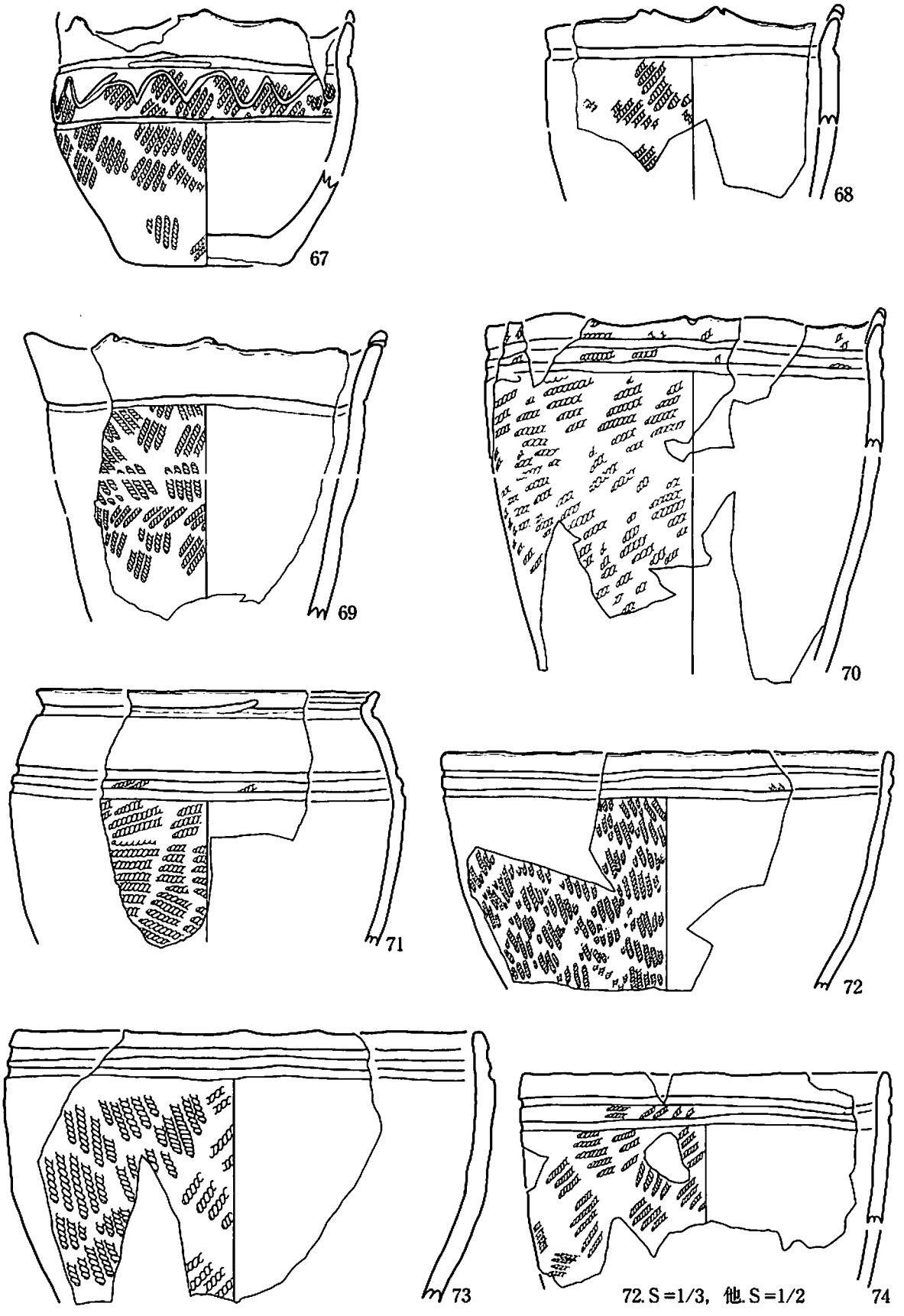
1　暗褐色シルト層（10YR3/4）粘性やや弱く、しまり並。直径3～5㎜の炭化粒を微量含む。

第24図　6号竪穴住居

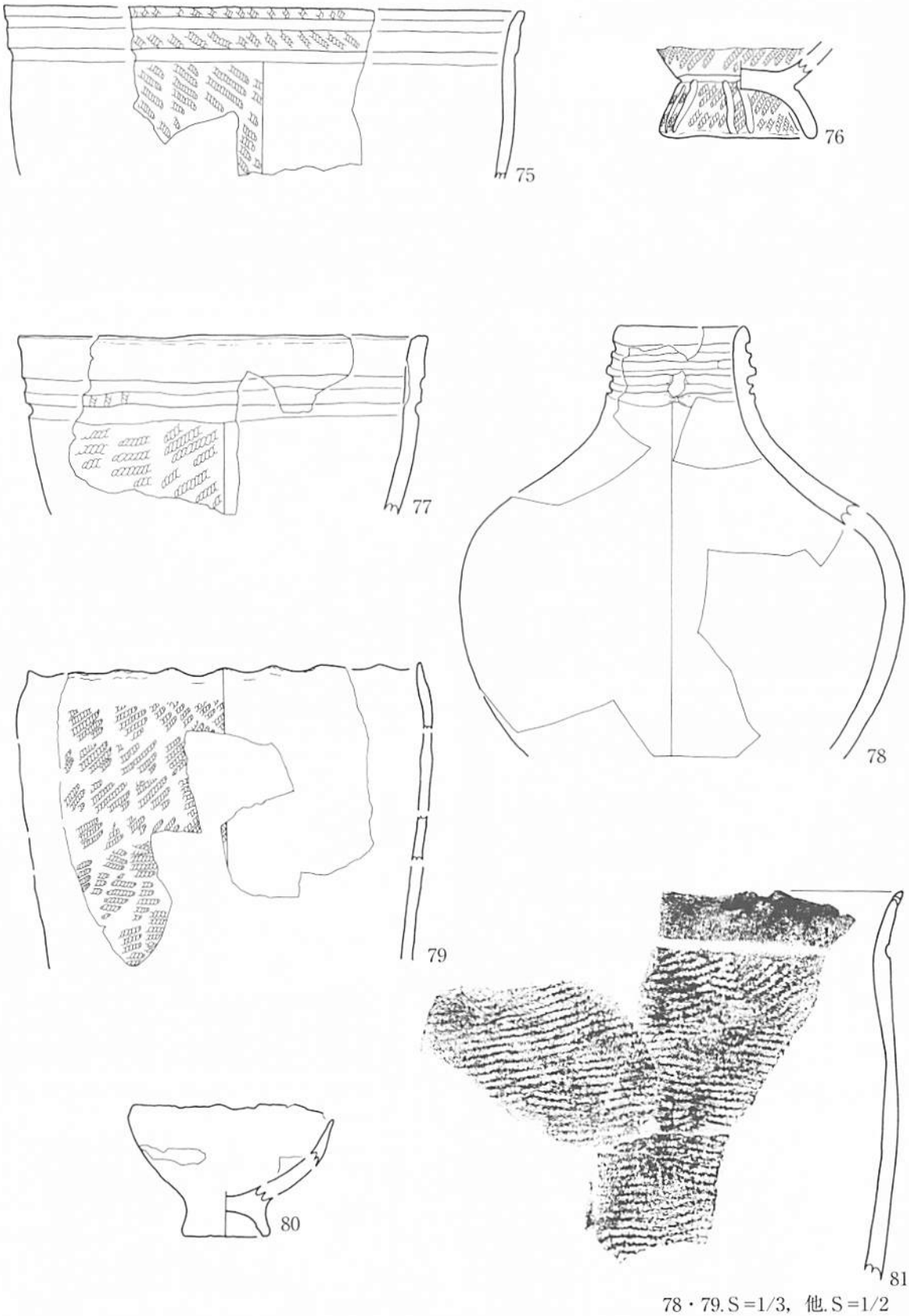


63・64. S＝1/3, 他. S＝1/2

第25図　6号竪穴住居出土遺物(1)

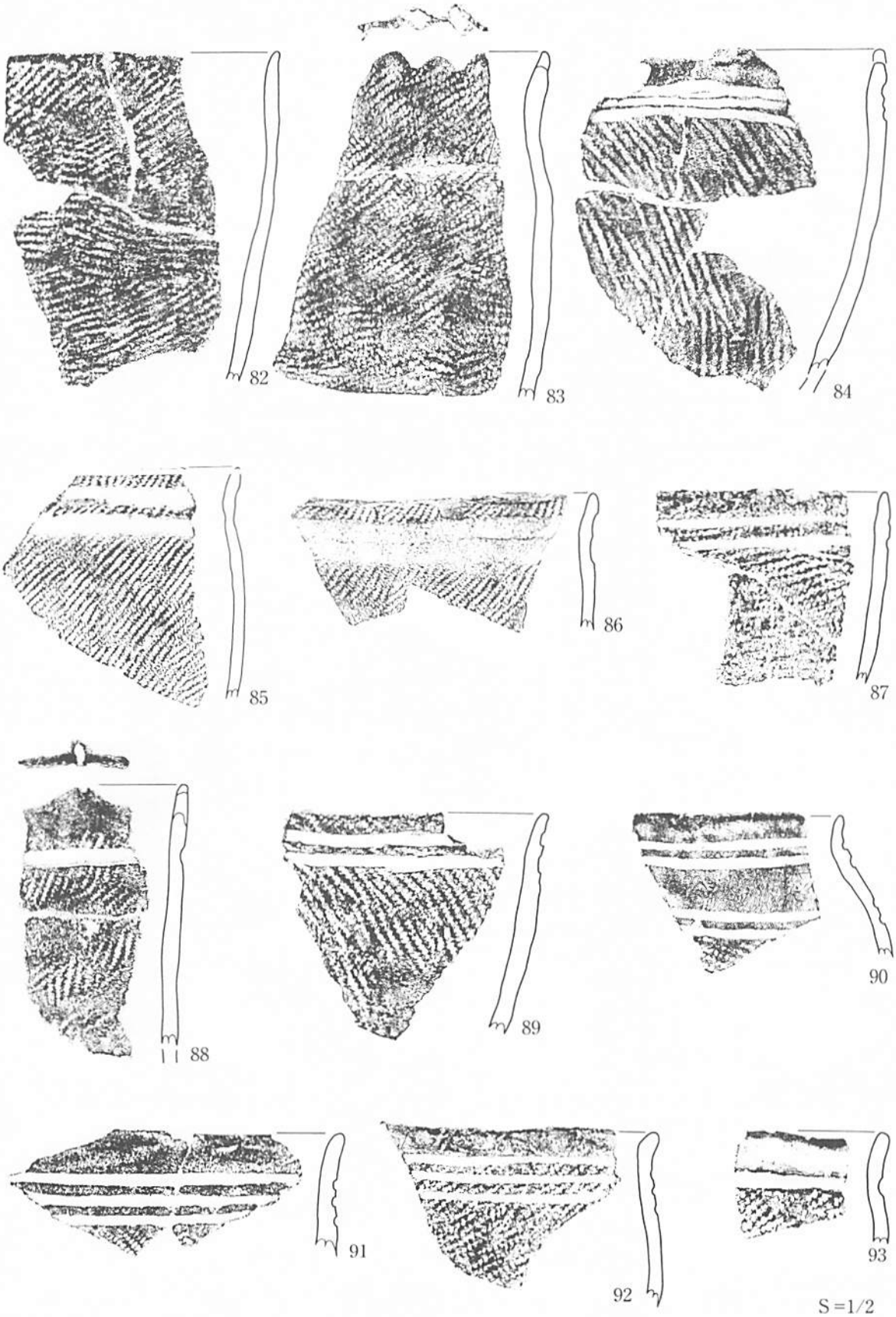


第26図　6号竪穴住居出土遺物(2)

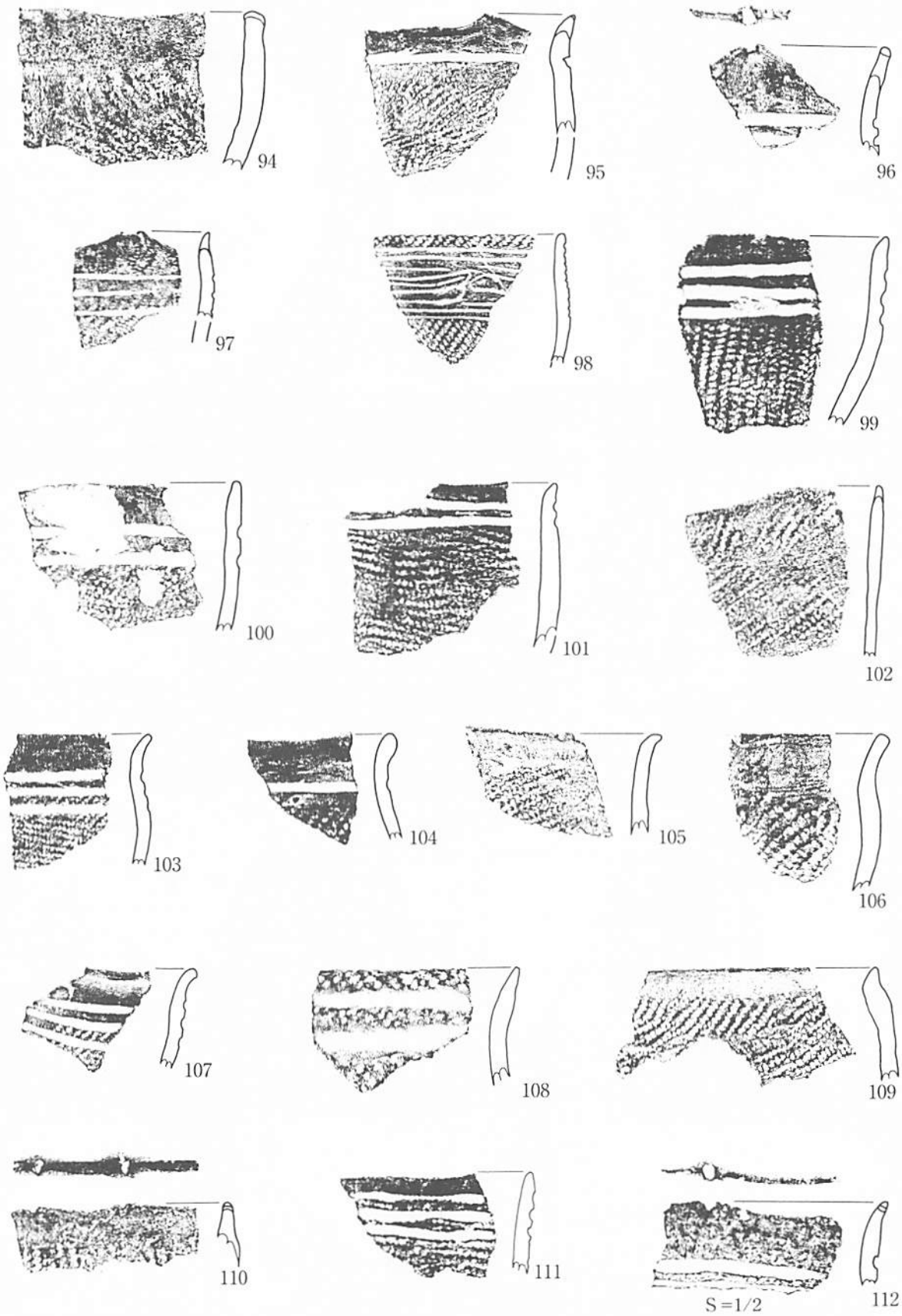


78・79. S＝1/3，他. S＝1/2

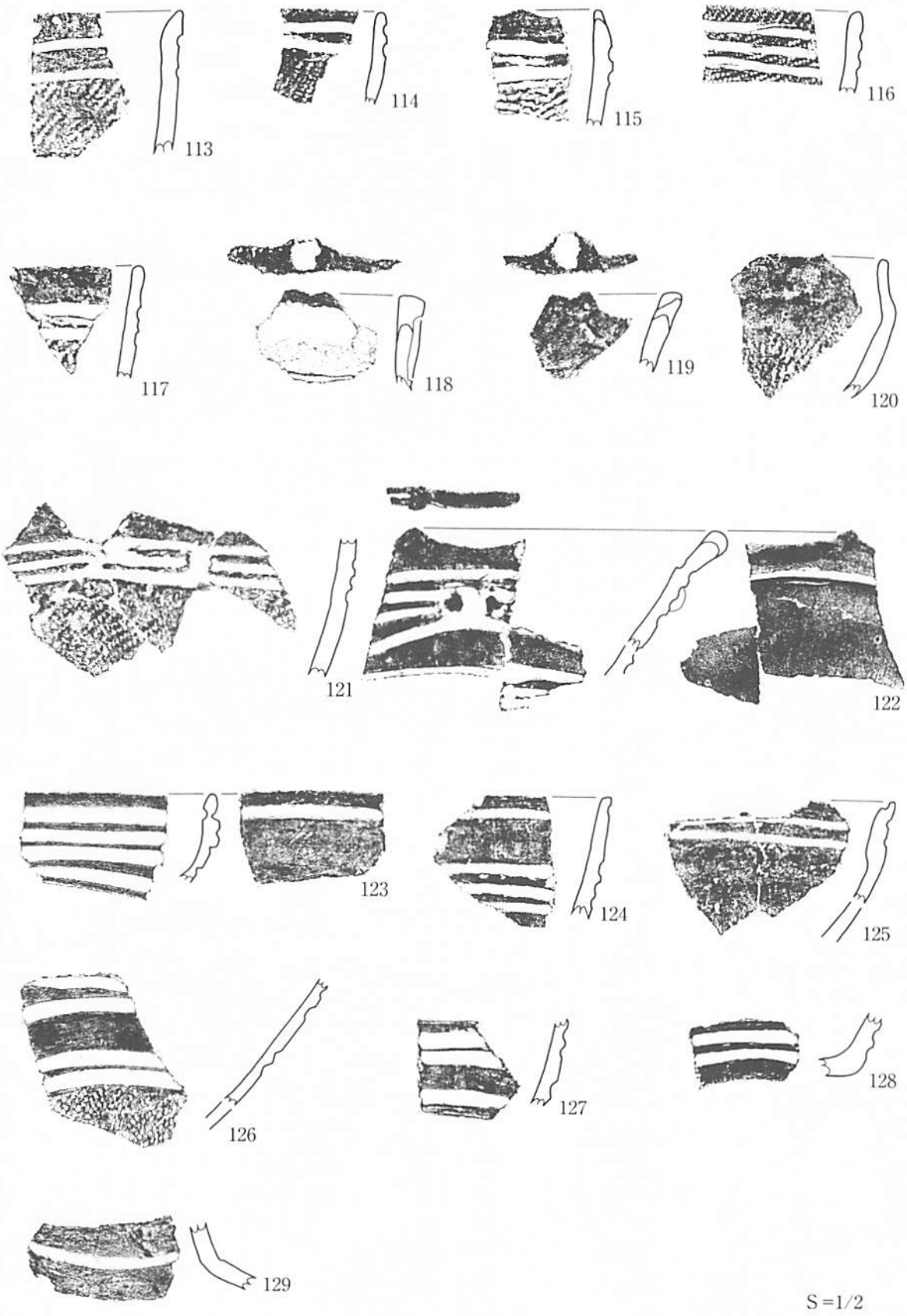
第27図　6号竪穴住居出土遺物(3)



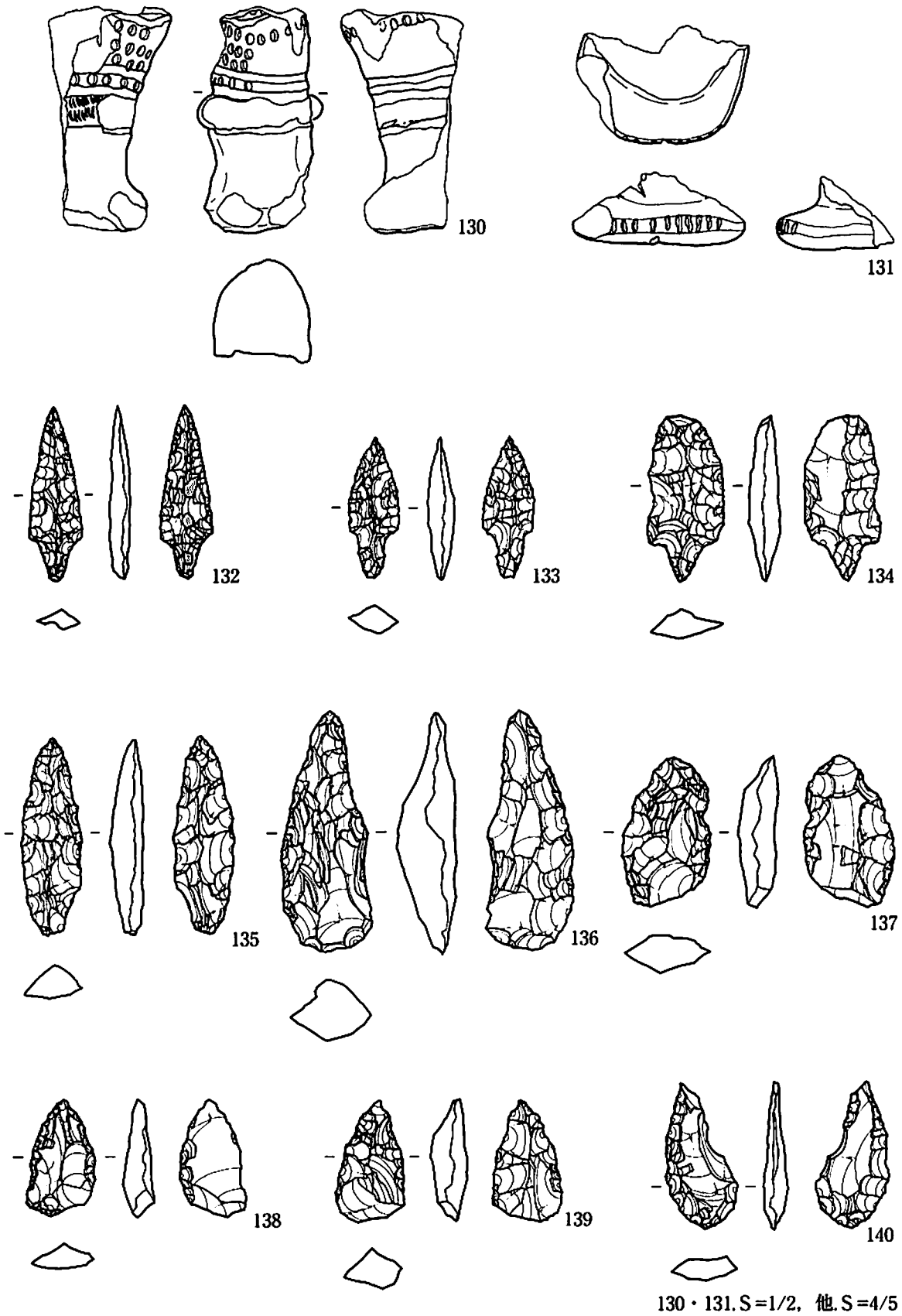
第28図　6号竪穴住居出土遺物(4)



第29図　6号竪穴住居出土遺物(5)

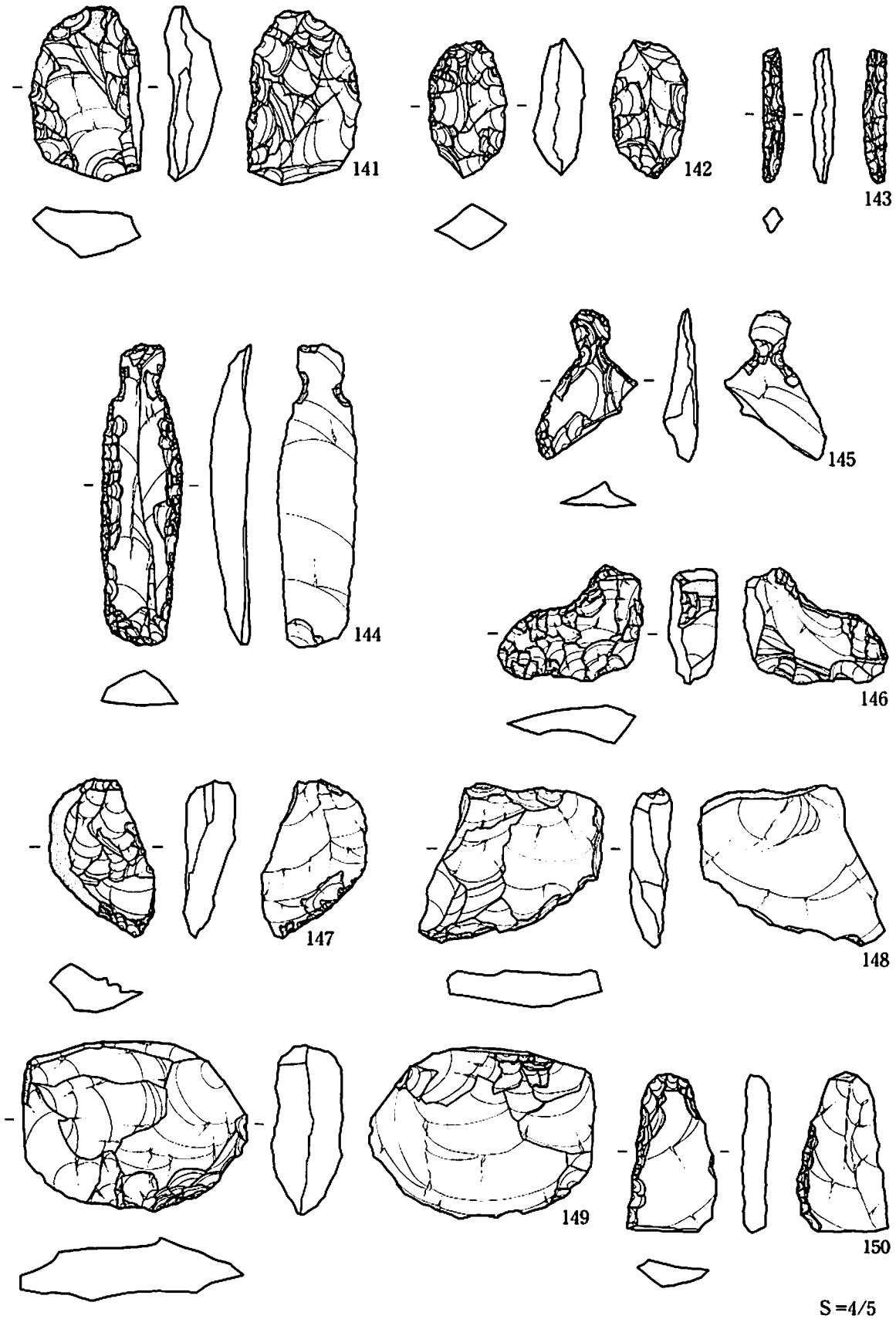


第30図　竪穴住居出土遺物(6)

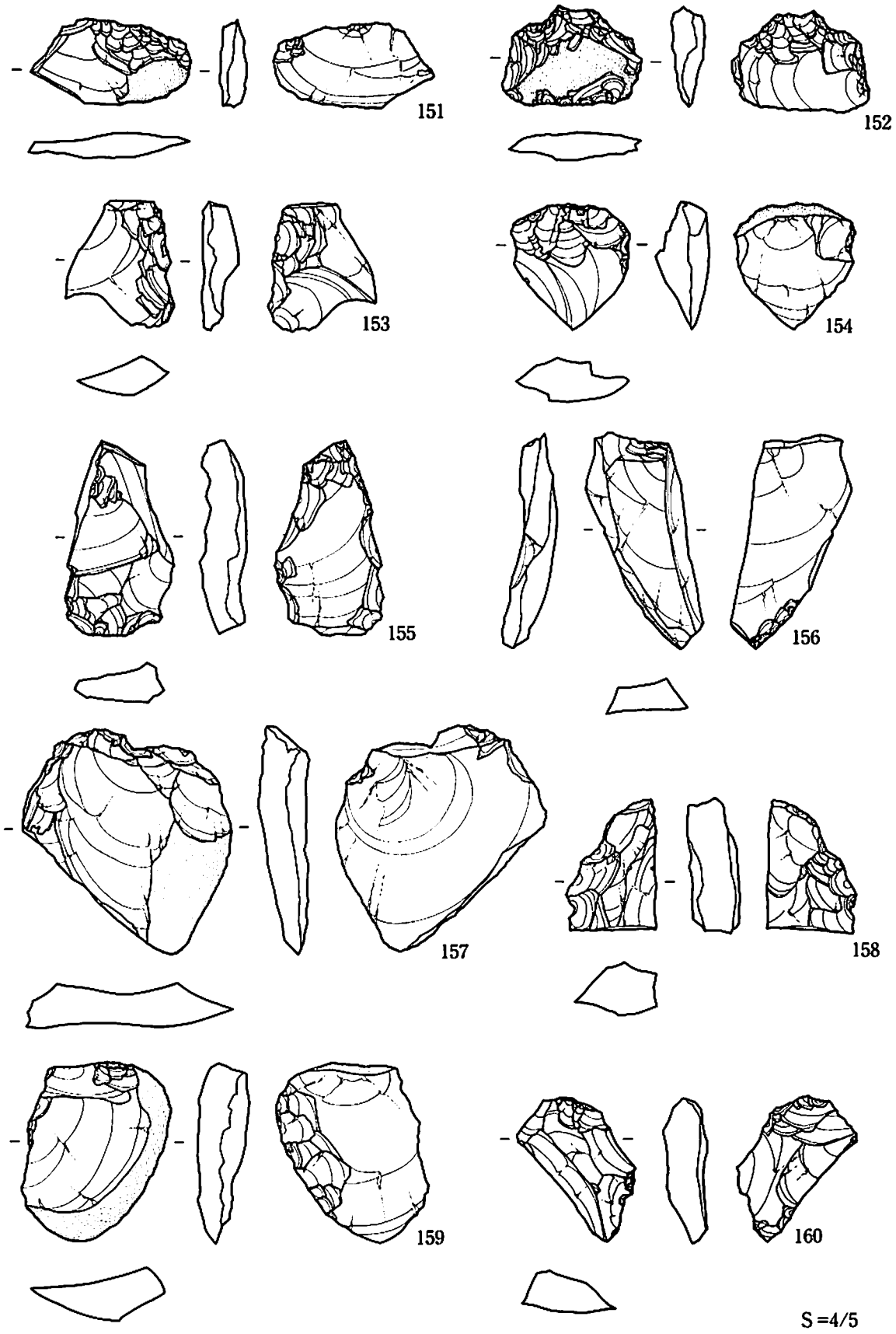


130・131. S＝1/2, 他. S＝4/5

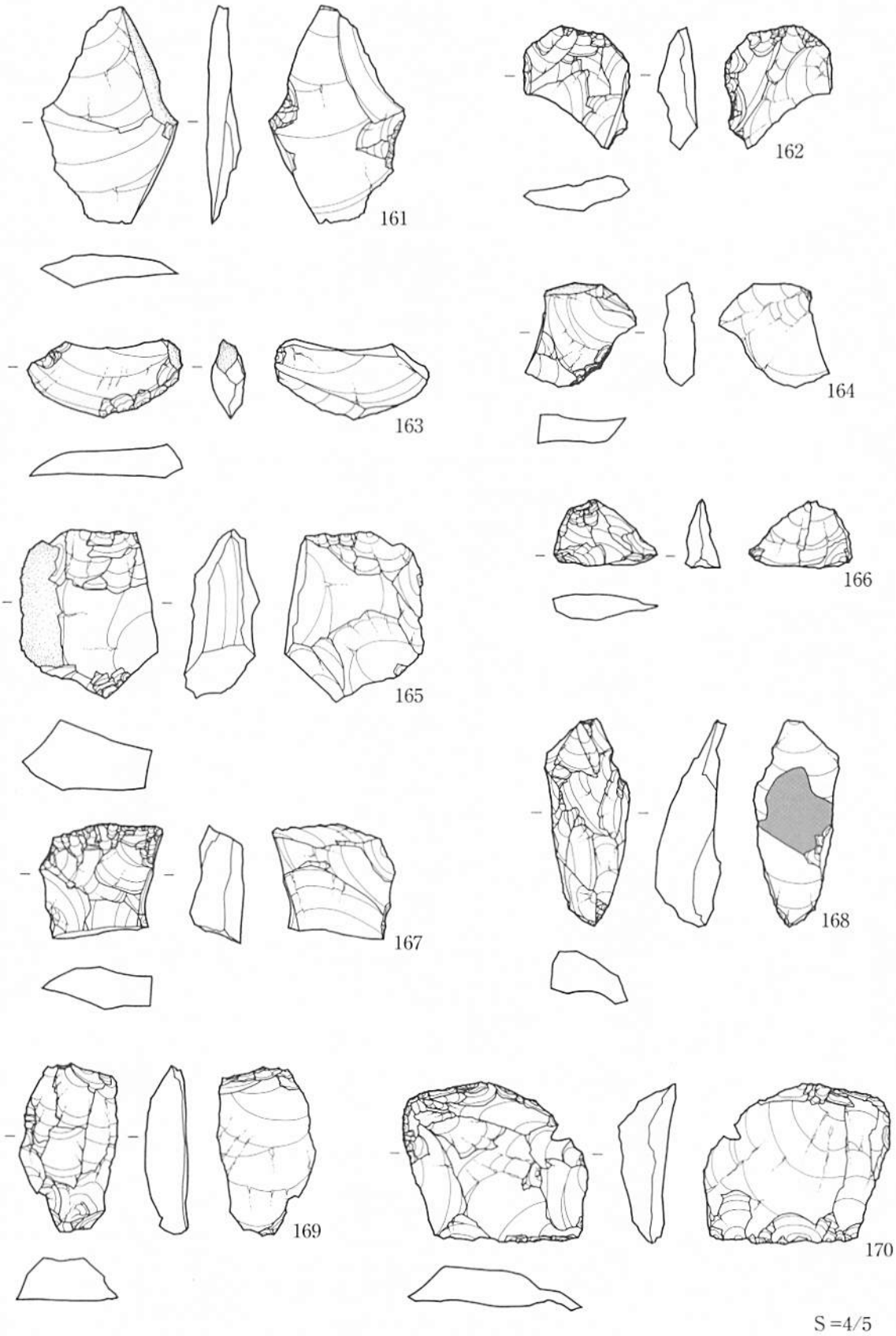
第31図　6号竪穴住居出土遺物(7)



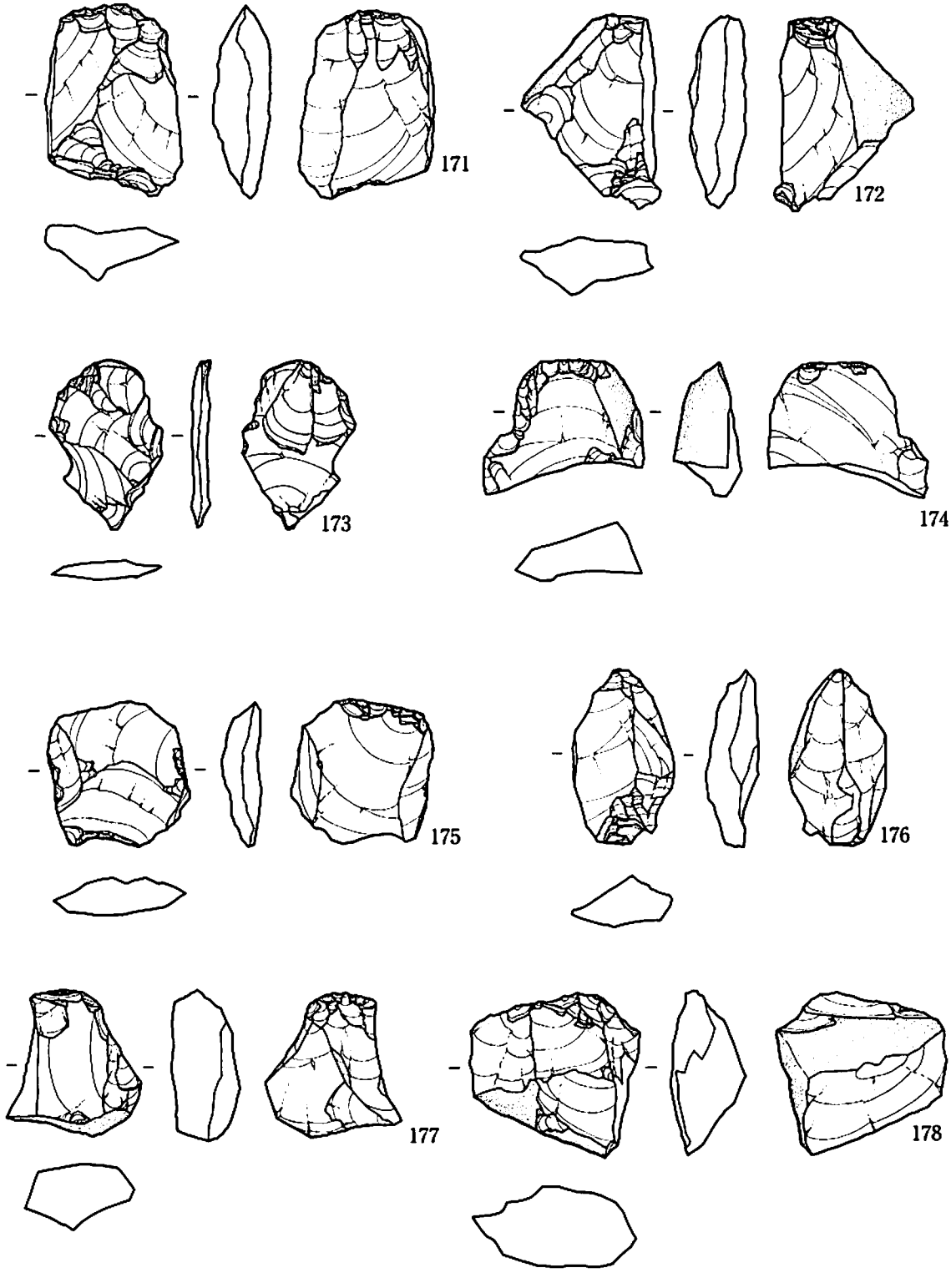
第32図　6号竪穴住居出土遺物(8)



第33図　6号竪穴住居出土遺物(9)

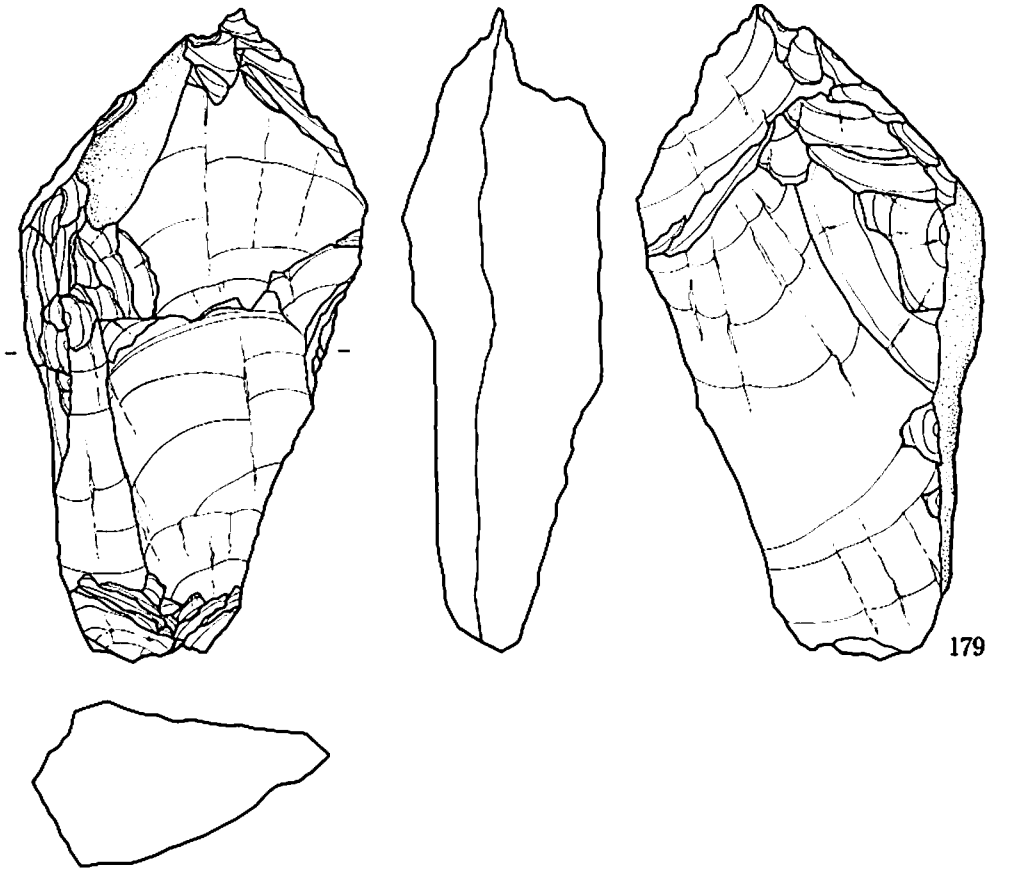


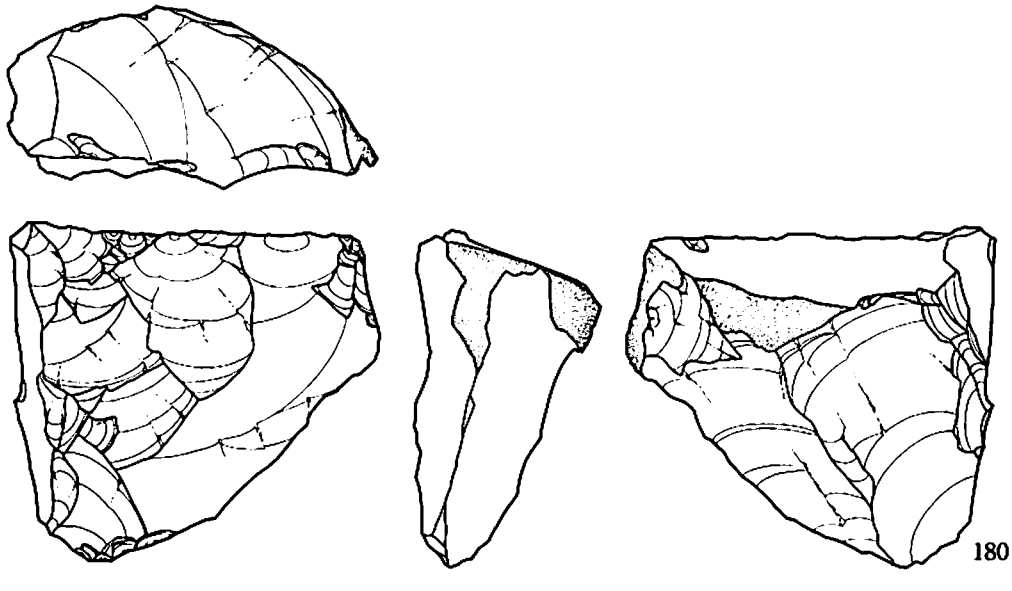
第34図　6号竪穴住居出土遺物(10)



S=4/5

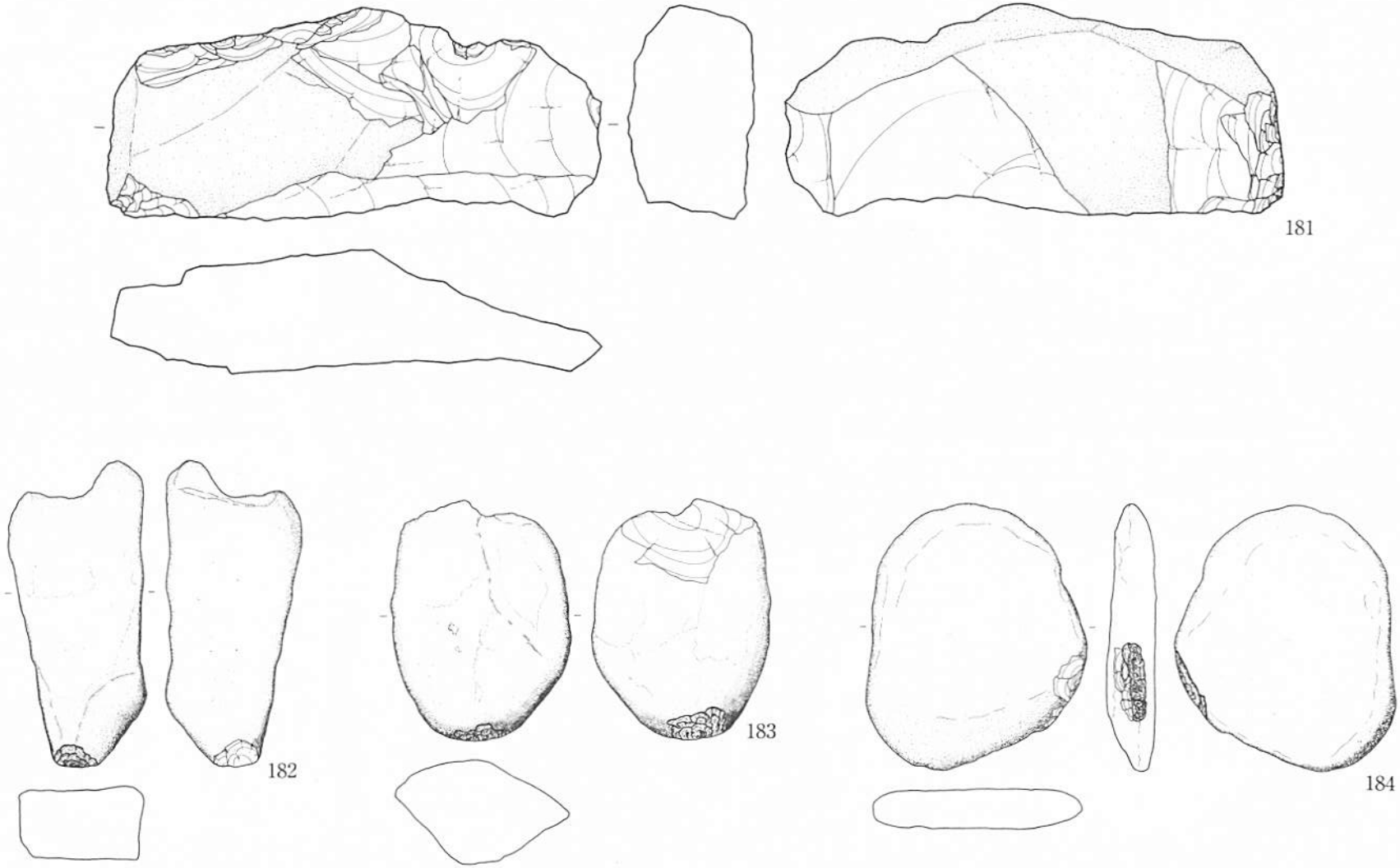
第35図　6号竪穴住居出土遺物(11)





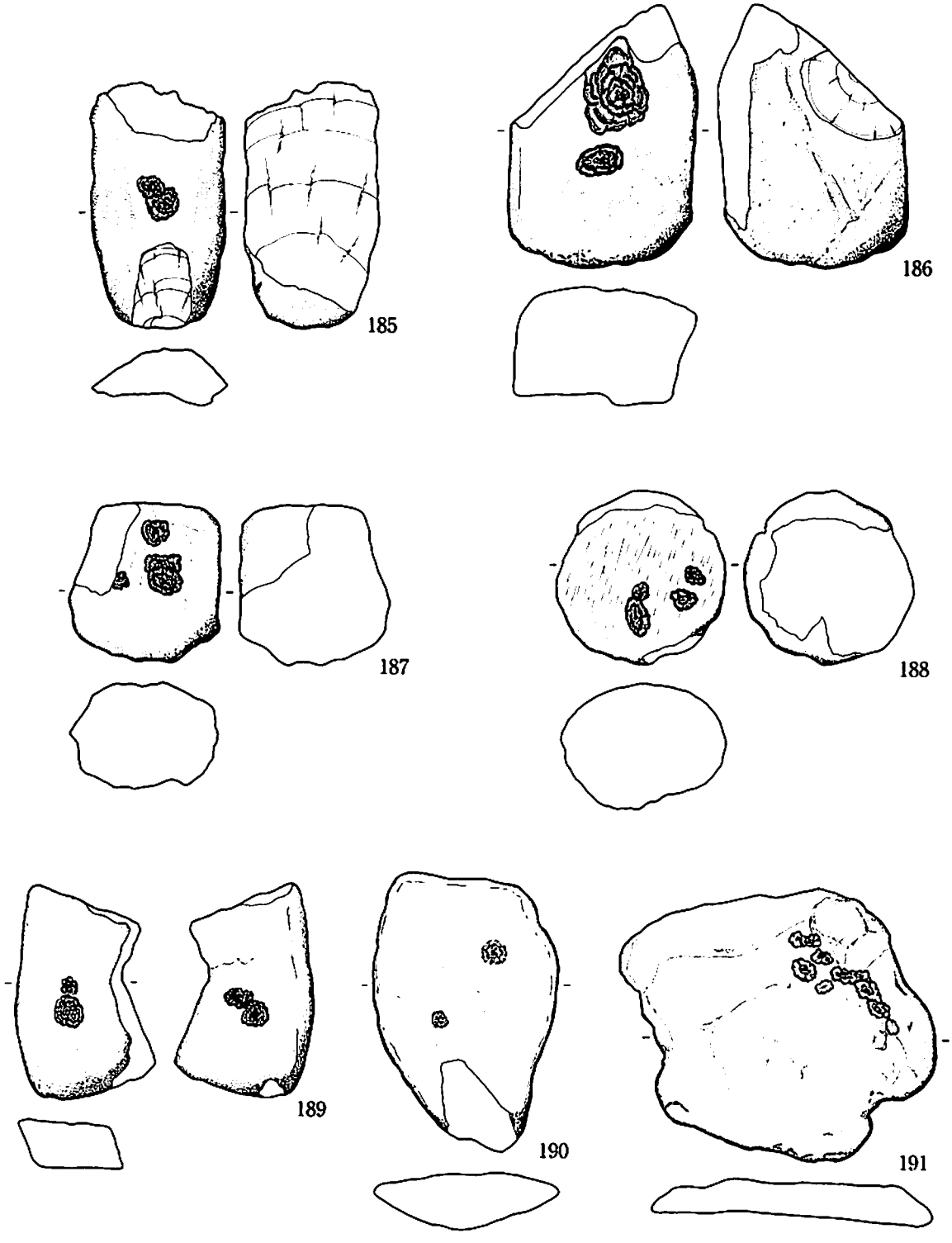
S=1/2

第36図　6号竪穴住居出土遺物(12)



181. S＝1/2，他. S＝1/3

第37図　6号竪穴住居出土遺物(13)



190. S＝1/6，191. S＝1/9，他. S＝1/3

第38図　6号竪穴住居出土遺物(14)

り、剥離可能な打面が存在すれば頻繁に打面転移を繰り返しいる。179・182～184は敲石で、179は剥片ないし石核からの転用と考えられる。185～189は凹石で、188は磨面を、185は敲打部を有している。191は台石である。

［遺構時期］縄文時代晩期末から弥生時代初頭に属する。

7号竪穴住居

［位置］－1B3・4・9グリッドに位置する。

［検出面］XV層。

［検出状況］断面観察当初には、本遺構は2号竪穴住居と同一のものと把握しその存在を認識していなかった。その後の1・2号竪穴住居の遺構プランを確認するためのサブトレンチ観察中に、2号竪穴住居と異なる壁の立ち上がりを確認できた。そのため再度断面観察を行ったことから、本遺構のプラン及び壁の一部を確認した。しかし床面付近において平面プランが不明瞭であったため、6号・9号竪穴住居と切り合い関係が把握できるようにサブトレンチを入れた。その結果、9号竪穴住居より新しく6号竪穴住居より古いことと楕円形の平面プランの呈することを把握し、ほぼ床面のみの精査に入る。

［重複関係］2・6・9・10号竪穴住居と重複しているが、9号→7号→10号→6号→2号竪穴住居の順に新しくなる。

［規模］規模は5.46×5.27m、深さは0.07～0.31mである。

［平面形］平面形は他の竪穴住居によって切られて確認できない部分もあるが、残存している平面形は楕円形を呈する。

［埋土］黒褐色～暗褐色シルト主体で、8層に分層される。

［床面・壁］床面はほぼ平坦であるが、西側に向かって若干傾斜する。残存している壁は緩やかに外傾する。

［柱穴］なし。

［炉］なし。

［出土遺物］土器43点・石器5点がほぼ床面から出土している。192～195は鉢で、平行沈線のものと地文のみのものがある。196・197は変形工字文を有する浅鉢である。198は楔形石器で、末端部が欠損し左側縁に二次加工が確認されていることから不定形石器とも考えられたが、打面側の微細剥離痕から判断している。199は外面全てに研磨が施されている磨製石器で器種は不明である。200～202は敲石、203は凹石である。

［遺構時期］縄文時代晩期末から弥生時代初頭に属する。

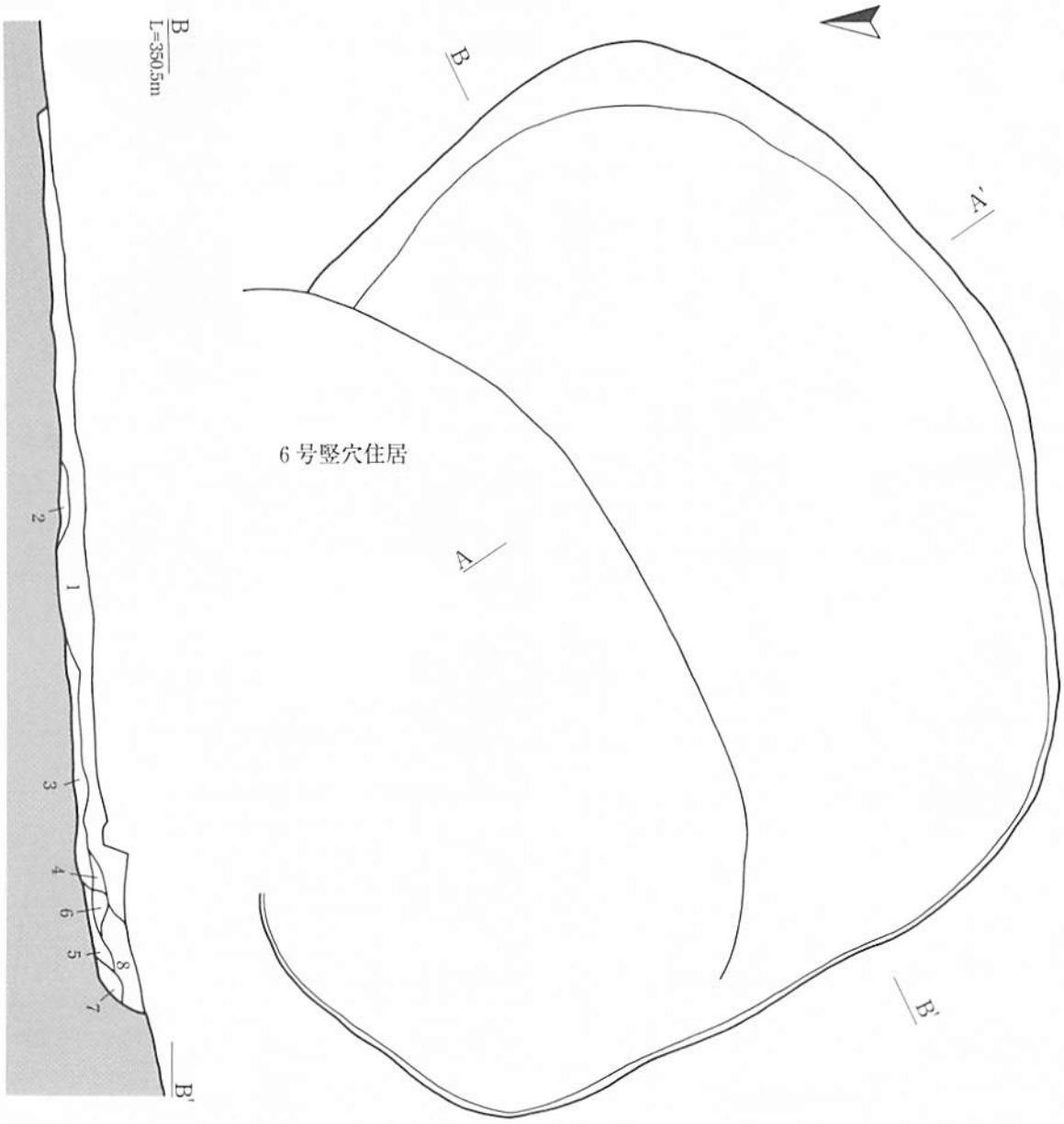
9号竪穴住居

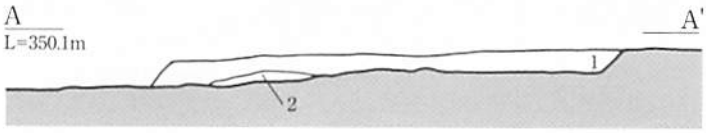
［位置］－1B3・4・8・9グリッドに位置する。

［検出面］XV層。

［検出状況］段丘の先端部が後世により削平され、その露出した断面より土器が確認されたため、遺構の存在を認識していた。しかし遺構プランは不明瞭であったことから、本来遺構検出面であった段丘上面にサブトレンチを複数入れたことで楕円形を呈した平面プランを検出した。7号竪穴住居との重複関係が不明瞭なことからその露出した断面の観察において、その壁の立ち上がりから7号竪穴住居より古いことが確認できたことにより精査に入る。本遺構はほぼ床面のみの精査となる。

［重複関係］2・7竪穴住居と重複しているが、9号→7号→2号竪穴住居の順に新しくなる。



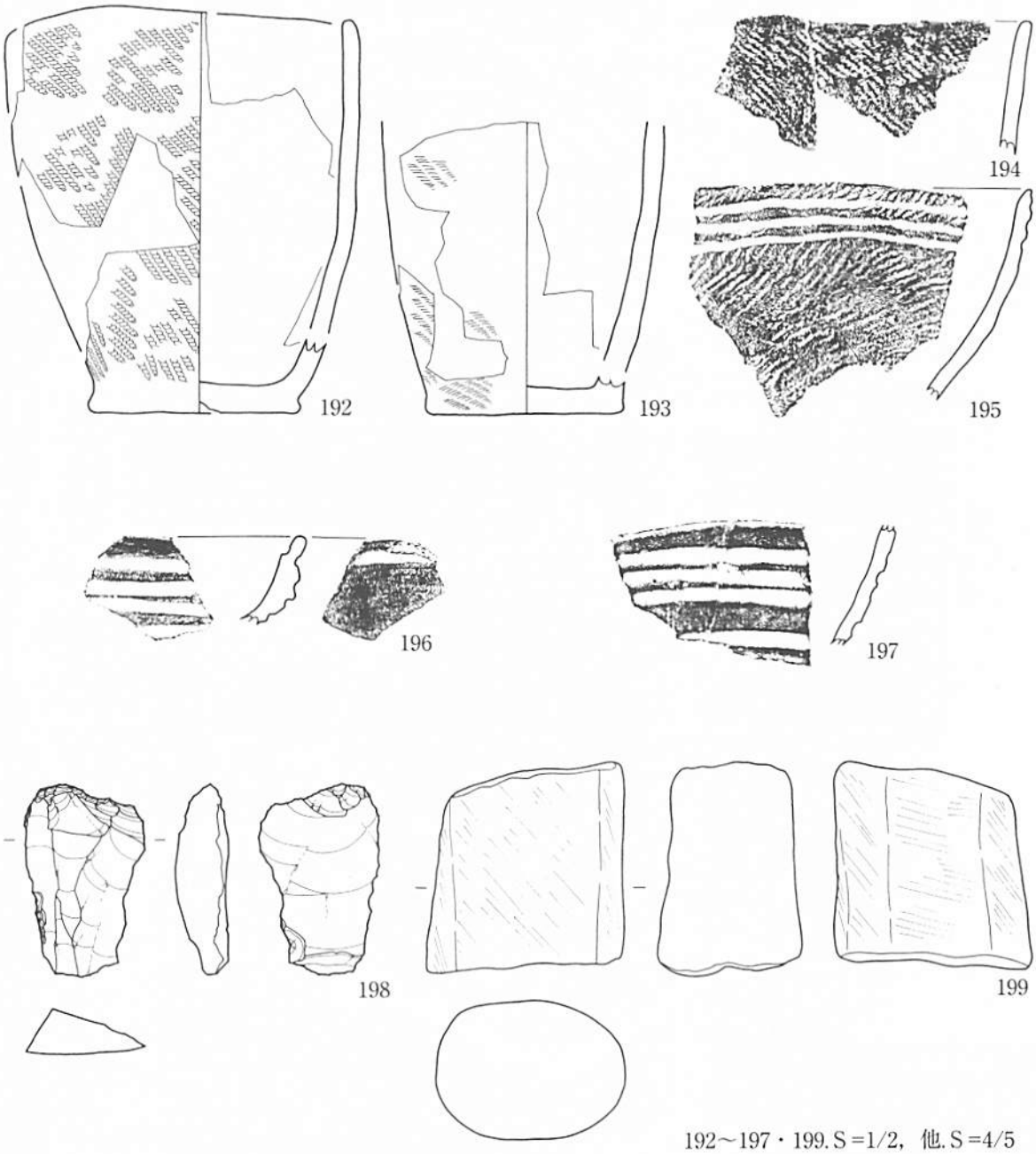


7号竪穴住居

1　黒褐色シルト層（10YR2/3）粘性弱く、しまり強い。直径5～10㎜の炭化粒を並含み、直径5～20㎝の礫をやや多く含む。
2　暗褐色シルト層（10YR3/3）粘性弱く、しまり強い。1層と地山の混じり。
3　暗褐色シルト層（10YR3/4）粘性やや強く、しまりやや強い。直径1～3㎜の焼土と粘土を少量含む。
4　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性弱く、しまり強い。
5　暗褐色シルト層（10YR3/3）粘性、しまり共にやや強い。地山ブロックを多く含む。
6　暗褐色シルト層（10YR3/3）粘性、しまり共にやや強い。地山ブロックを多く含む。
7　暗褐色粘土質シルト層（10YR3/3）粘性、しまり共に並。地山崩落土を多く含む。
8　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性強く、しまり並。直径5㎜の炭化粒を少量含む。

0　2m

第39図　7号竪穴住居



192～197・199. S＝1/2，他. S＝4/5

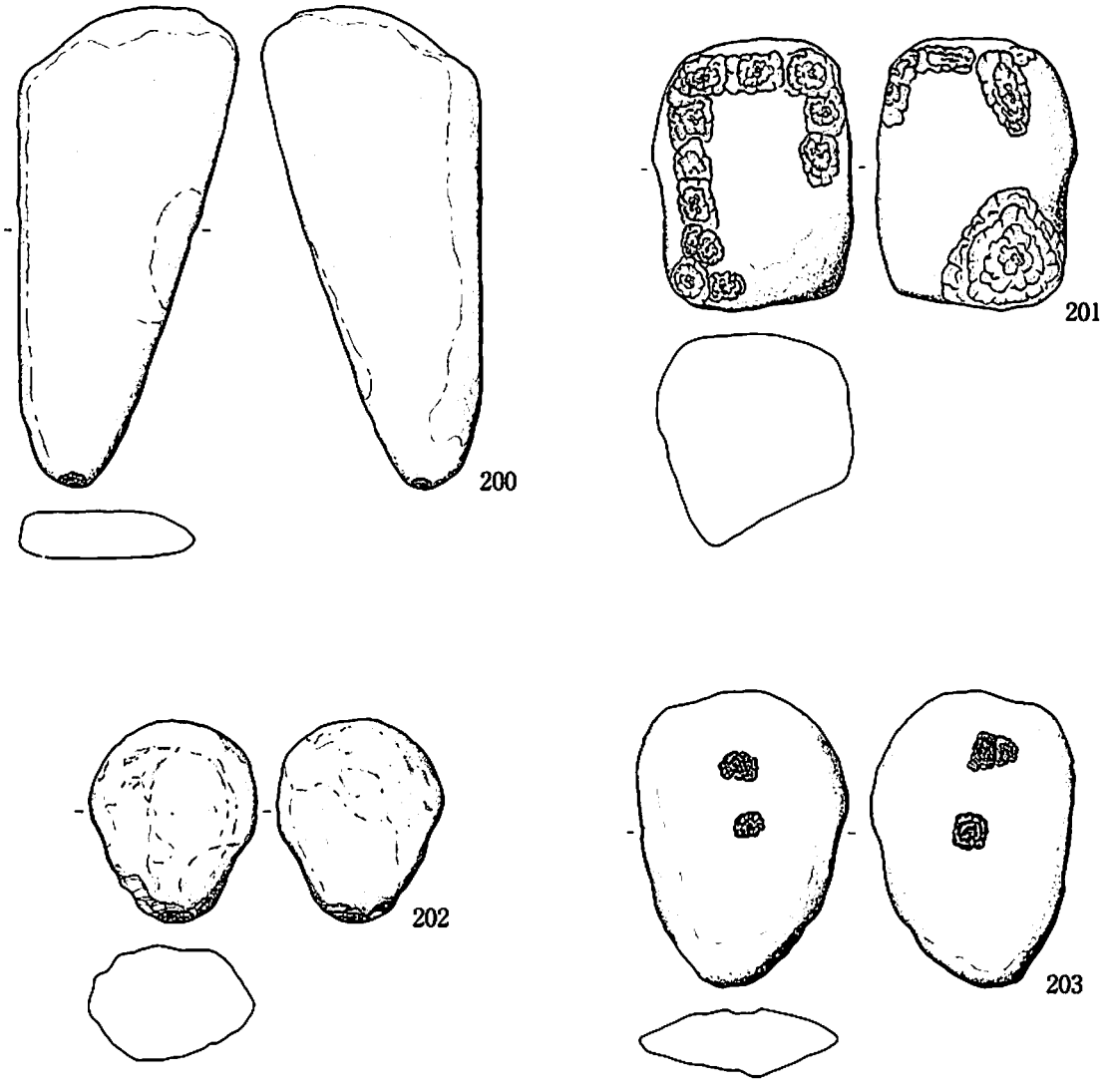
第40図　7号竪穴住居出土遺物(1)

［規模］規模は3.02×2.02m、深さは0.05～0.31mである。

［平面形］平面形は楕円形を呈する。

［埋土］黒褐～暗褐色シルト層主体で、5層に分層される。

［床面・壁］床面はほぼ平坦である。残存している西壁は緩やかに外傾する。



S=1/3

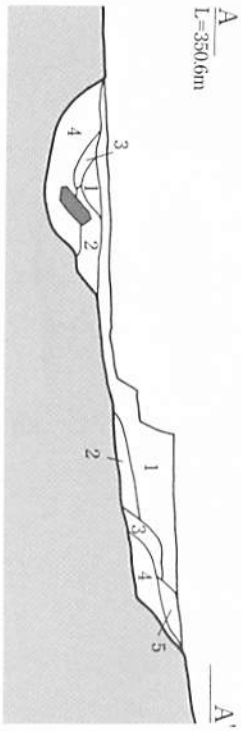
第41図　7号竪穴住居出土遺物(2)

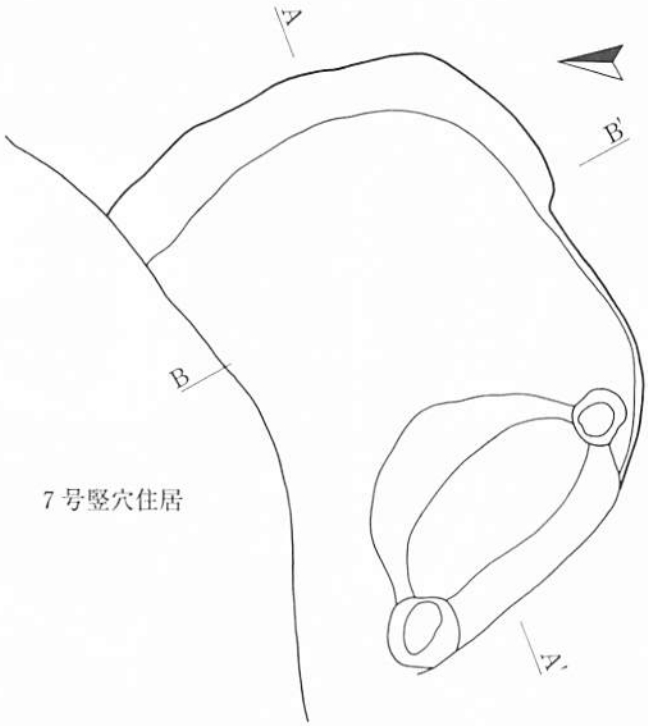
［柱穴・土坑］土坑1基・柱穴2基が検出された。土坑としたが住居の掘り方と考えられる。

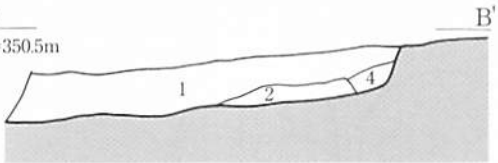
［炉］なし。

［出土遺物］埋土下位～床面にかけて土器74点、石器4点が出土している。204・205は鉢で、平行沈線と地文のみのものがある。206はミニチュア土器の底部である。207は有茎鏃である。

［遺構時期］縄文時代晩期末から弥生時代初頭に属する。







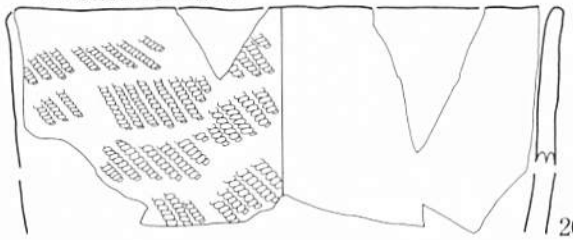
9号竪穴住居

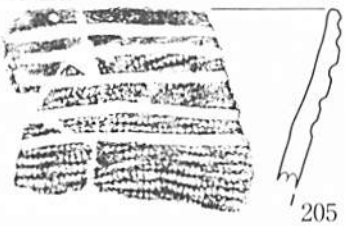
1　黒褐色シルト層（10YR2/3）粘性弱く、しまりやや強い。直径3～5㎜の焼土と炭化粒を含み、黄褐色スコリアを微量含む。
2　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性弱く、しまりやや強い。地山ブロックを含む。
3　黒褐色シルト層（10YR3/2）粘性やや弱く、しまり並。1と2が混じった層。
4　暗褐色シルト層（10YR3/4）粘性やや弱く、しまりやや並。
5　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性弱く、しまり並。直径3～10㎜の炭化粒を少量含む。

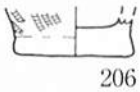
0　2m

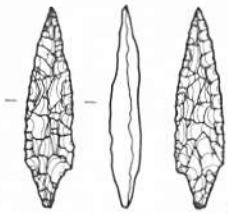
土坑

1　黒色シルト層（10YR2/1）粘性並、しまりやや強い。
2　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性やや強く、しまり並。直径3～5㎜の炭化粒を微量含む。
3　黒褐色シルト層（10YR2/3）粘性並、直径3～5㎜の礫を多く含む。
4　暗褐色シルト層（10YR2/3）2層と類似。直径1～3㎜の炭化粒を微量含む。









S=1/2

第42図　9号竪穴住居・出土遺物

10号竪穴住居

［位置］－１Ｂ３・４・８・９グリッドに位置する。

［検出面］ＸＶ層。

［検出状況］６号竪穴住居と７号竪穴住居との重複関係を把握するために、サブトレンチを入れた結果本遺構の存在を確認した。また、６号竪穴住居の床面から本遺構の石囲い炉の一部が確認され、ほぼ床面であることと平面プランが楕円形を呈することを認識し精査に入る。

［重複関係］１・６・７号と重複しているが、７号→10号→６号→１号竪穴住居の順に新しくなる。

［規模］規模は6.65×5.24m、深さは0.05～0.16mである。

［平面形］平面形は楕円形を呈する。

［埋土］黒～黒褐色シルト層が主体で、６層に分層される。

［床面・壁］床面はほぼ平坦である。６号竪穴住居が直上にあることから残存している壁は低くく、壁は外傾して立ち上がる。

［柱穴］５基が検出された。平面形や規模は類似せず、それぞれ異なる。それらの配置は竪穴住居の中心より若干東寄りで五角形を呈する。その中心より東側に外れた位置に土器埋設炉や石囲い炉がある。

［炉］石囲い炉、土器埋設炉、焼土が１基ずつ検出された。石囲い炉や土器埋設炉は竪穴住居の中心より東壁寄り、焼土は竪穴住居の西壁近くにあり、それぞれ竪穴住居の中心には位置していない。柱穴の項でも記述したが、石囲い炉や土器埋設炉共に５角形に配置された柱穴の中心より東側に外れた場所に設置されている。

［石囲い炉］～平面形はほぼ方形を呈する。規模は0.71×0.61m、焼土の層厚は0.06mである。角～亜角礫を８個使用し、各重量は１～7.1kg、総重量24.0kgである。これらの礫は砂岩や粘板岩を使用し、６号竪穴住居と同様の石材で、ウチナイ沢より採取可能である。礫の１つは、台石（190）からの転用であった。

［土器埋設炉］～平面形は楕円形を呈する。規模は0.97×0.54m、深さ0.06mである。使用された土器は鉢（210）である。

［地床炉］～平面形は楕円形を呈する。規模は0.58×0.43m、深さは0.11mである。

［出土遺物］土器201点、石器16点が埋土下位から床面にかけて出土している。208・215の深鉢は、両者共に胴部から口縁部にかけて内傾するものである。209～214・216～227は鉢で、変形工字文、工字文、平行沈線、指頭による沈みを有するものや地文のみのものがある。228～230は変形工字文を有する浅鉢である。210は土器埋設炉に使用されたものである。231は壺の頸部である。232は有茎の石鏃、233は石錐である。234の不定形剥片は、末端部に二次加工が施されている。235の楔形石器は、上下に微細剥離を有する。236は敲石である。190は台石で、石囲い炉に使用されていたものである。

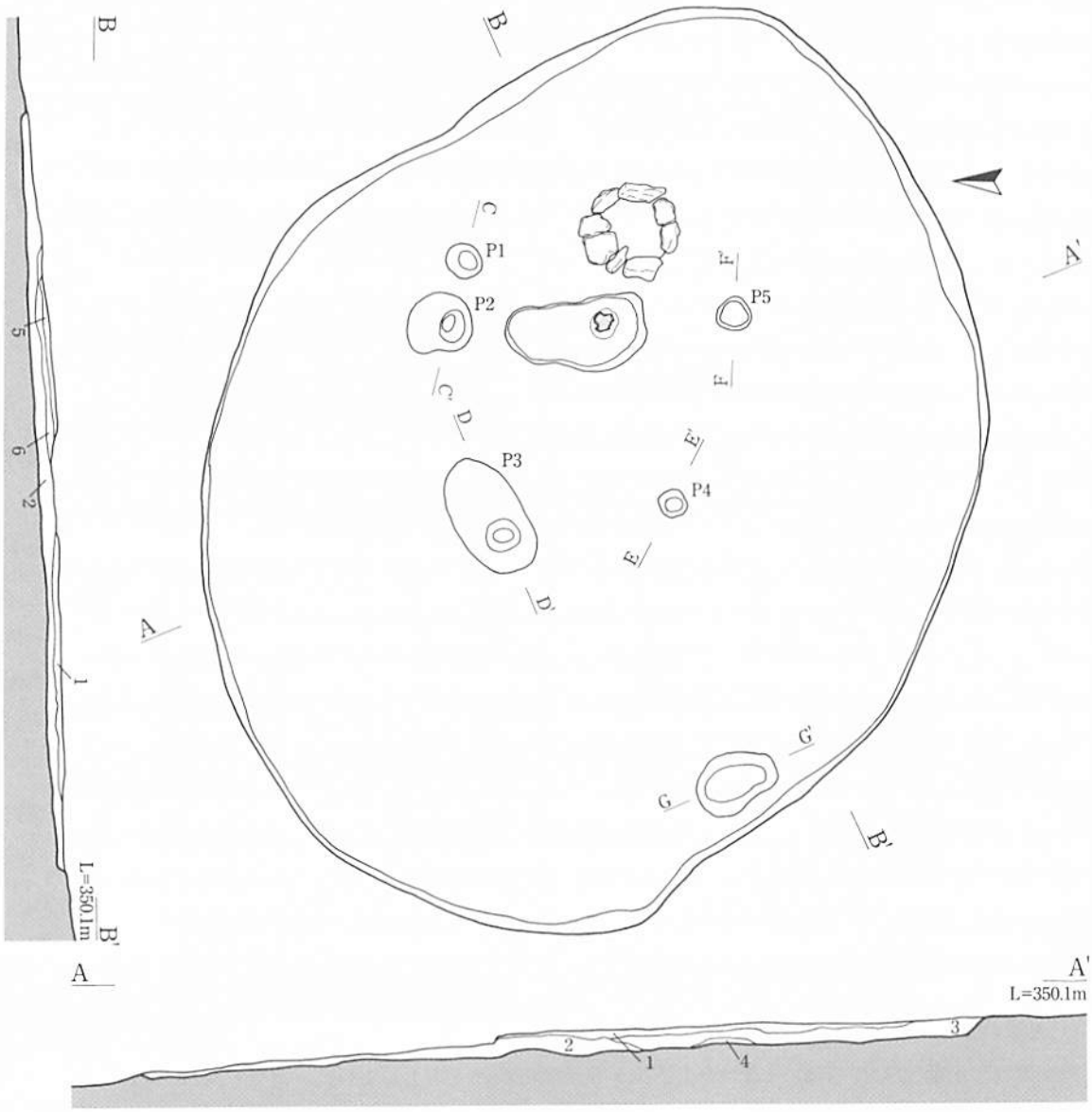
［遺構時期］縄文時代晩期末から弥生時代初頭に属する。

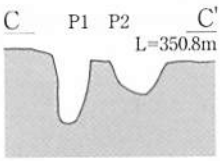
11号竪穴住居

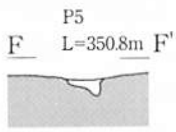
［位置］－１Ｂ10グリッドに位置する。

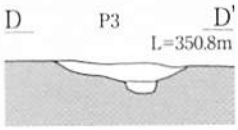
［検出面］ＸＶ層。

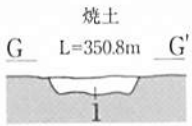
［検出状況］本遺構は３号竪穴住居と当初認識していたが、３号竪穴住居の精査時に本遺構の存在を認識した。それでも平面プランが不明瞭であることから、サブトレンチを露出した断面と直交するように複数入れ

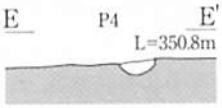












10号竪穴住居

1　黒色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまり強い。直径５～10㎜の焼土、炭化粒をやや多く含む。
2　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性やや弱く、しまり並。直径３～５㎜の炭化粒と焼土を微量含む。
3　黒色シルト層（10YR2/1）粘性並、しまり強い。１層と同様の混入物。
4　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性弱く、しまり強い。地山ブロックを多く含む。
5　黒褐色シルト層（10YR2/3）粘性弱く、しまり強い。直径３～５㎜の炭化粒を微量含む。
6　黒色シルト層（10YR2/1）粘性やや弱く、しまり並。直径１～３㎜の炭化粒を微量含む。

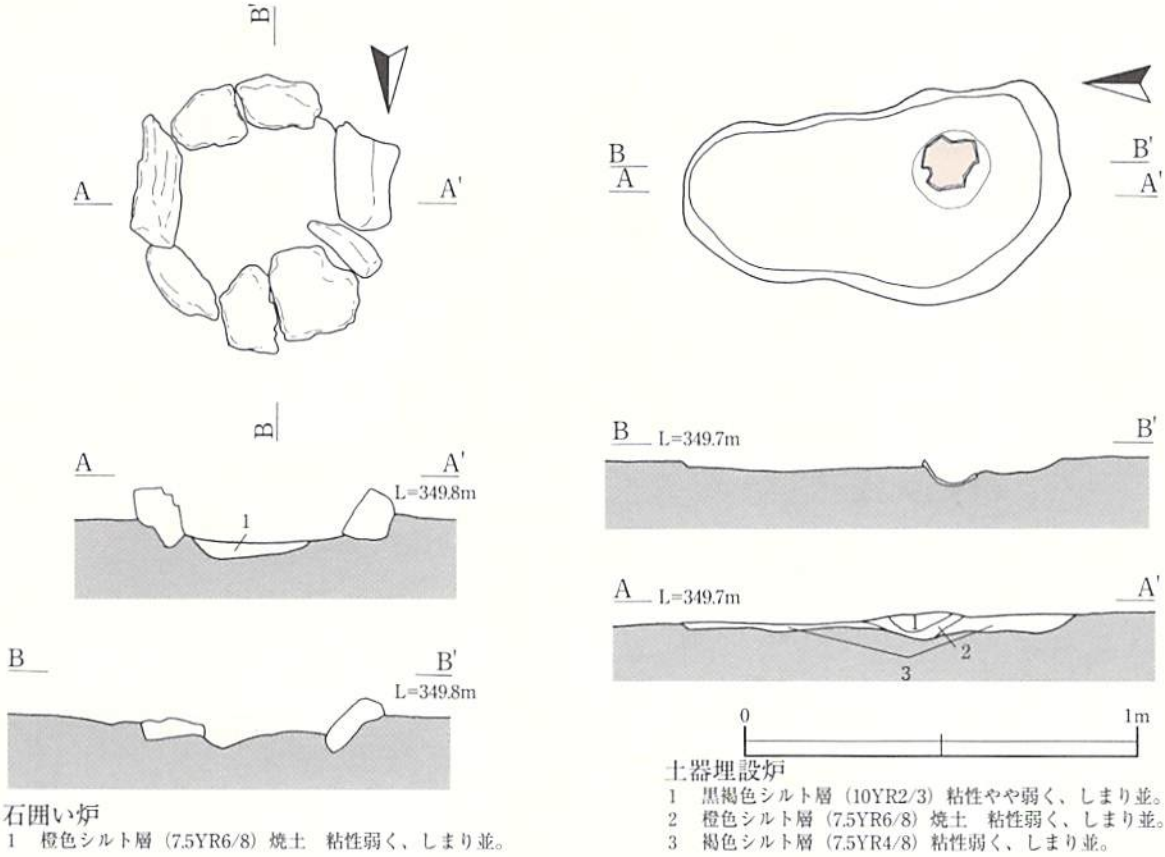
焼土

暗赤褐色～明褐色シルト層　焼土　粘性弱く、しまり強い。

柱穴

黒褐色シルト層（10YR2/2）すべての柱穴は同じ色調である。

第43図　10号竪穴住居



第44図　10号竪穴住居

たことで平面プランと壁の立ち上がりを、その露出した断面観察により本遺構の壁と床面を確認できたことにより精査に入る。

［重複関係］２号・３号竪穴住居と重複しているが、３号→11号→２号竪穴住居の順に新しくなる。

［規模］規模は1.73×1.73、深さは0.26mである。

［埋土］黒～黒褐色シルト層主体で、10層に分層される。

［床面・壁］床面はほぼ平坦であるが、緩やかに北と西に向かって傾斜する。残存している西・南壁は外傾して立ち上がる。

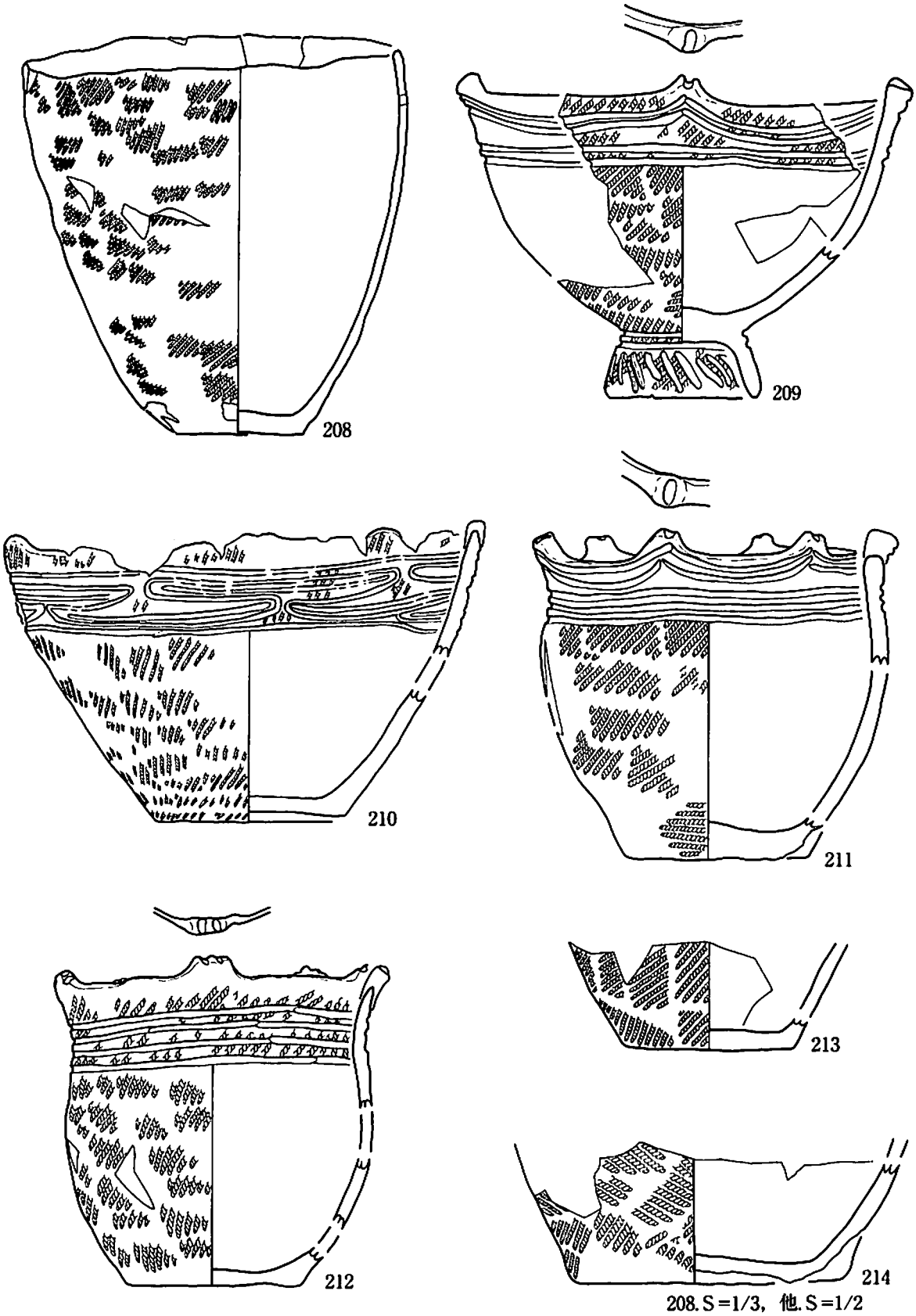
［平面形］確認された平面形は楕円形を呈する。

［柱穴］なし。

［炉］なし。

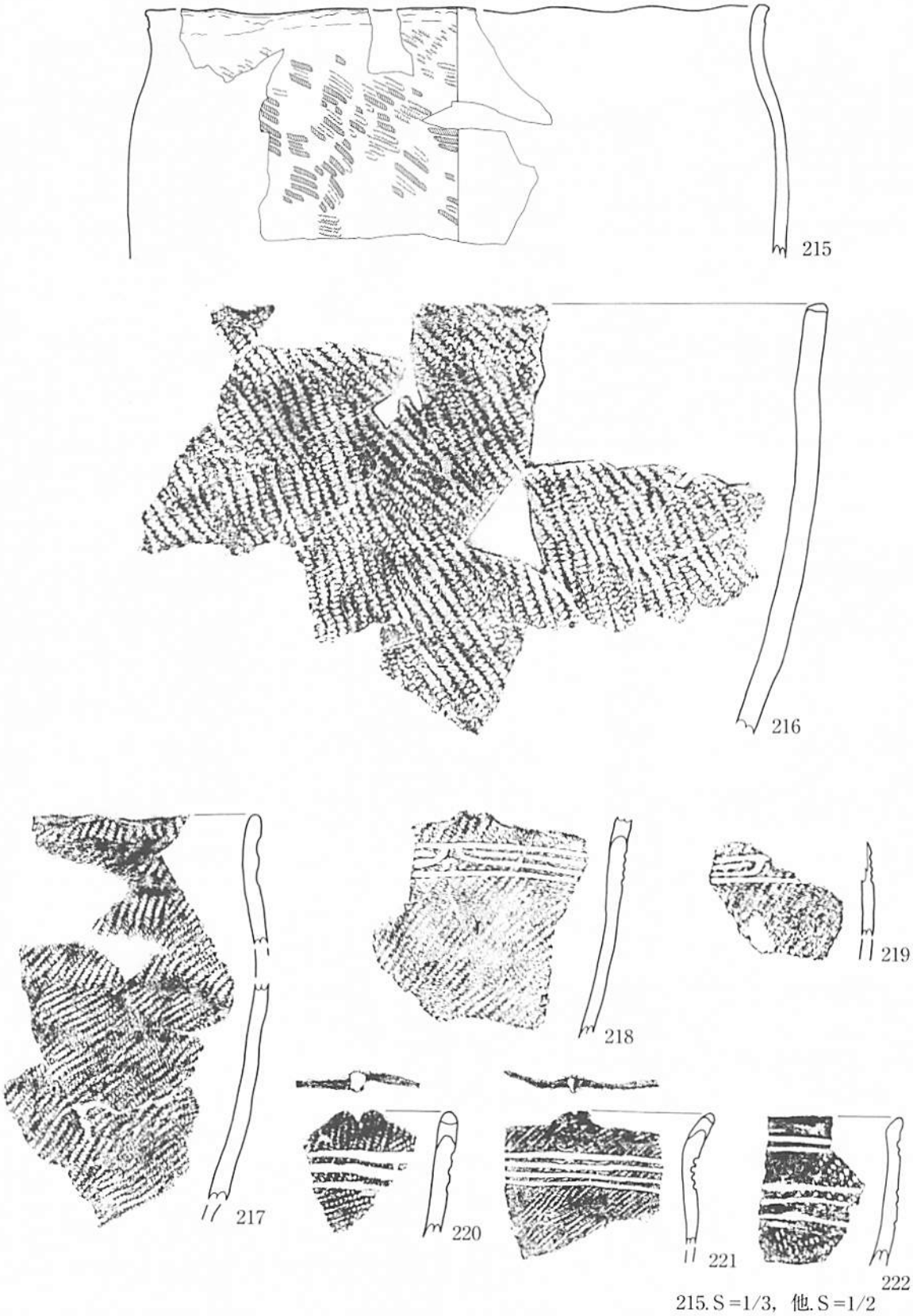
［出土遺物］土器４点が、埋土中から出土している。磨滅しているため図面掲載はしていない。

［遺構時期］縄文時代晩期末から弥生時代初頭に属する。



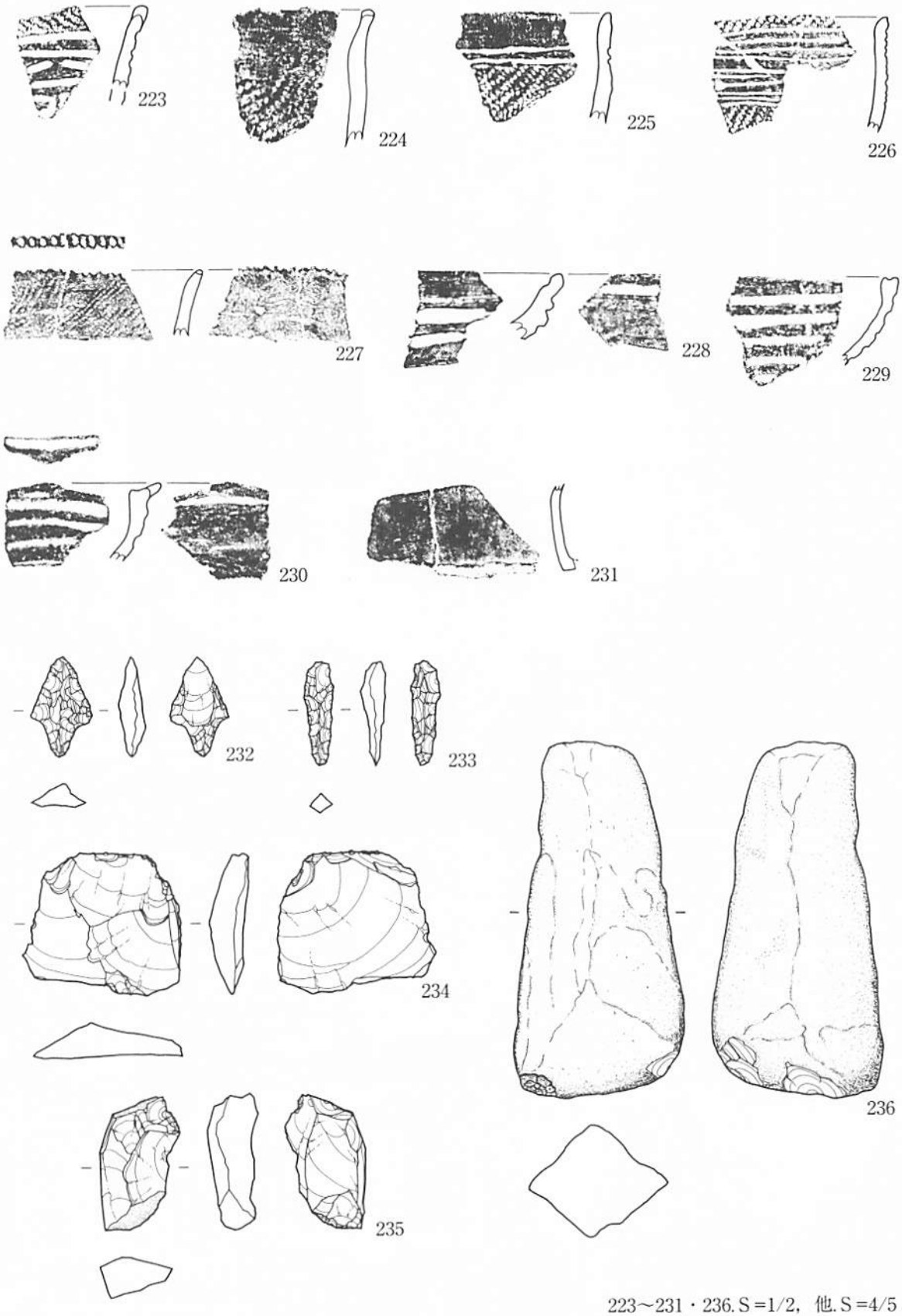
208. S=1/3, 他. S=1/2

第45図　10号竪穴住居出土遺物(1)



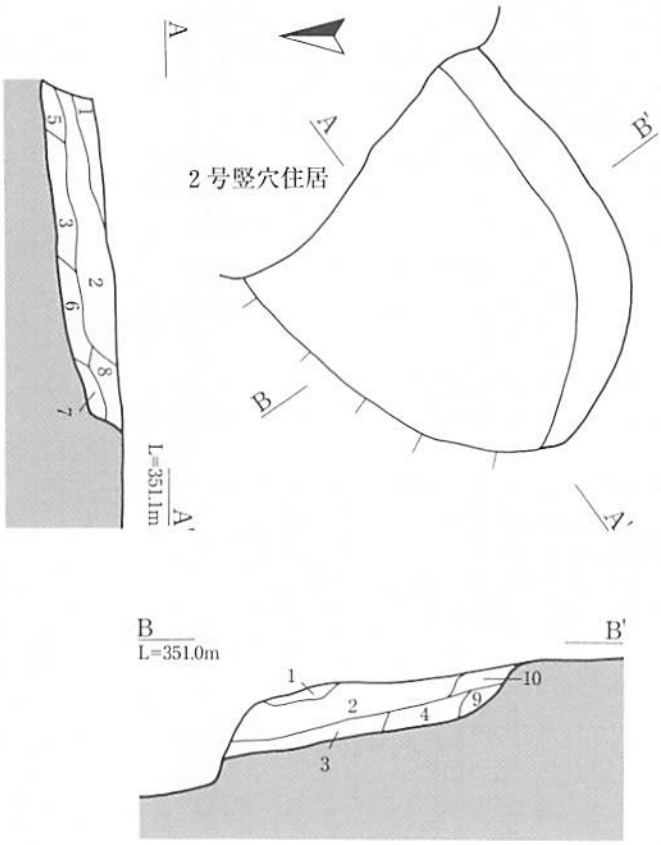
215. S＝1/3，他. S＝1/2

第46図　10号竪穴住居出土遺物(2)



223～231・236. S＝1/2，他. S＝4/5

第47図　10号竪穴住居出土遺物(3)



11号竪穴住居

1　黒色シルト層（10YR2/1）粘性弱く、しまり並。直径1～5㎜の黄褐色スコリアを少量含む。
2　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性やや弱く、しまりやや強い。直径1～15㎜の炭化粒を少量含み、直径3～5㎜の焼土を微量含む。
3　黒色シルト層（7.5YR2/1）粘性やや弱く、しまりやや弱い。直径1～3㎜の焼土を含み、直径3～5㎜の炭化粒を微量含む。
4　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性弱く、しまり並。直径5～15㎜の炭化粒を少量含み、地山ブロックを含む。
5　4層に近いが若干暗みが増し、混入物も類似する。
6　黒褐色シルト層（10YR2/2）粘性弱く、しまりやや弱い。地山崩落土と4層が混じる層。
7　黒褐色シルト層（10YR3/2）粘性弱く、しまりやや弱い。地山崩落土。
8　黒色シルト層（10YR2/1）粘性弱く、しまり並。直径3～10㎜の炭化粒を含み、直径1～5㎜の焼土を微量含み、黄褐色スコリアを少量含み、地山崩落土を少量含む。
9　黒色シルト層（10YR2/1）粘性弱く、しまり並。
10　黒色シルト層（10YR1.7/1）粘性やや弱く、しまりやや弱い。直径1～3㎜の焼土と炭化粒を微量含み、黄褐色スコリアを若干含む。

0　2m

第48図　11号竪穴住居

掲載No	登録No	器種	分類	部位	出土位置	施文文様	内面調整	施文	口径	器高	最大径	底径	台脚部径	台高	焼成	外面色調	内面色調	胎土	備考
1	1	C	-	口縁～体部	1号埋設土器			LR縄部結節	28.3	<35.8>	28.4	-	-	-	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	細砂多・粗砂少	大木10式
2	2	C	-	体～底部	STP03埋土			LR	-	<9.75>	-	7.2	-	-	良好	にぶい黄褐	褐	細砂多・粗砂少	外面スス付着
4	9	C	-	体～底部	-1C2グリッドII～III層			LR	-	<1.6>	-	5.2	-	-	良好	暗褐	黒	細砂多・粗砂少	
5	7	C	-	体～底部	-1C2グリッドII～III層			LR	-	<1.5>	-	8.0	-	-	良好	にぶい黄橙	にぶい橙	細砂多・粗砂少	
6	4	C	-	体～底部	-1C12・13・14グリッドXII層			LR	-	<2.1>	-	4.5	-	-	良好	暗赤褐	暗褐	細砂多・粗砂少	
7	5	C	-	口縁～体部	-1C13・14グリッドXII層			LR	-	<3.9>	-	5.9	-	-	良好	暗褐	黒褐	細砂多・粗砂少	
8	3	C	-	体～底部	-1C13・14グリッドXII層	隆帯,磨消縄文	ミガキ	LR	-	<11.2>	(10.8)	5.5	-	-	良好	黒褐	黒褐	細砂多・粗砂少	大木10式
9	8	C	-	体～底部	-1C9グリッドII～III層			LR	-	<8.0>	-	8.8	-	-	良好	褐	にぶい褐	細砂多・粗砂少	
10	28	C	-	口縁～体部	S101埋土	ミガキ、沈線	ミガキ	RL	-		-	-	-	-	良好	暗褐	にぶい赤褐	細砂多・粗砂少	
11	6	C	-	口縁～体部	-1C18・19グリッドXII層	ミガキ、沈線	ミガキ	RL	-		-	-	-	-	良好	暗褐	にぶい赤褐	細砂多・粗砂少	
12	44	C	-	口縁～体部	S103埋土上層	隆帯・円孔文、磨消縄文		LR	-		-	-	-	-	良好	褐	褐	細砂多・粗砂少	
13	11	C	-	口縁	表土一括	ミガキ	ミガキ・櫛状突起	-	-		-	-	-	-	良好	灰褐	褐	細砂多・粗砂少	
14	381	C	-	口縁～体部	S109床直	沈線		-	-		-	-	-	-	良好	暗赤褐	褐	細砂多・粗砂少	146と同一個体・大木10式
15	146	C	-	口縁～体部	S101床直	沈線		-	-		-	-	-	-	良好	暗赤褐	褐	細砂多・粗砂少	381と同一個体・大木10式
16	42	E	-	体～底部	S103中～下位	隆帯・渦巻状沈線・平行沈線		-	-	<4.0>	(7.3)	4.7	-	-	良好	赤褐	にぶい褐	細砂多	底面に木葉痕あり・大木10式
17	10	A	II	口縁～体部	-2C1・-2C10グリッド一括	口縁突起、変形工字文、粘土瘤	ミガキ・平行沈線		-		-	-	-	-	良好	黒褐	にぶい赤褐	細砂多・粗砂少	
18	148	A	I	口縁～体部	-1C16グリッド表土	変形工字文、粘土瘤、口唇部沈線	ミガキ・沈線	-	-		-	-	-	-	良好	にぶい褐	にぶい褐	細砂多	
25	13	A	I	口縁～底部	S101床直	ミガキ、変形工字文	ミガキ・平行沈線		(11.2)	7.0	(11.4)	(5.0)	-	-	良好	黒褐	黒褐		
26	51	A	I	体～底部	S106床直	ミガキ、変形工字文	ミガキ	-	-	(5.9)	-	<2.9>	-	-	良好	褐	にぶい黄橙	細砂多	
27	30	B・C	-	体～底部	S101床直			RL	-	<4.2>	-	8.2	-	-	良好	にぶい黄褐	にぶい黄橙		
28	22	B	VI	口縁～体部	S101埋土下位	平行沈線		LR	-		-	-	-	-	良好	暗褐	暗褐	細砂多・粗砂少	外面スス付着
29	19	B	V	口縁～体部	S101床直	波状口縁（波頂部結目）、平行沈線		LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	にぶい褐	細砂多・粗砂少	外面スス付着
30	21	B	V	口縁～体部	S101埋土	指頭による沈み		RL	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄橙	にぶい黄褐	細砂多・粗砂少	
31	20	B	II・IV？	口縁～体部	S101埋土	波状口縁（結目）、波状・平行沈線		LR	-		-	-	-	-	良好	褐	暗褐	細砂多・粗砂少	
32	23	B	II・IV？	口縁～体部	S101埋土上層	波状口縁、ミガキ、平行沈線		-	-		-	-	-	-	良好	にぶい褐	にぶい褐	細砂多・粗砂少	
33	24	B	VI	口縁～体部	S101床直			LR	-		-	-	-	-	良好	暗褐	暗赤褐	細砂多・粗砂少	
34	18	B	V	口縁～体部	S101埋土	波状口縁（波頂部結目）、波状・平行沈線		LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	褐	細砂多	
35	31	B	V	口縁～体部	S101埋土	波状・平行沈線		LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい褐	にぶい褐	細砂多	
36	14	B	V	口縁～体部	S101床直	波状口縁	ミガキ	LR	-		-	-	-	-	良好	灰白	黒褐	細砂多・粗砂少	
37	16	A	II	口縁～体部	S101床直	ミガキ、平行沈線・粘土瘤	ミガキ・平行沈線	-	-		-	-	-	-	良好	黒褐	黒	細砂多	
38	15	A	II	体部	S101床直	ミガキ、工字文？	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	にぶい褐	にぶい褐	細砂多	
39	17	D	-	口縁～底部	S101床直	ミガキ	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	暗赤褐	暗赤褐	細砂多	内面に赤色顔料付着
40	25	C	II	体部	S101埋土上層			LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	細砂多・粗砂少	
41	27	C	-	体部	S101埋土上層			LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄橙	明黄褐	細砂多・粗砂少	26と同一個体
42	26	C	-	体部	S101埋土上層			LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄橙	明黄褐	細砂多・粗砂少	27と同一個体
43	29	C	-	底部	S101埋土上層			LR	-	<2.6>	-	13.2	-	-	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多・粗砂少	
51	32	B	II	口縁～底部	S102床直	口縁突起単位不明（波頂部結目）、平行沈線		LR	(9.8)	7.8	(10.0)	5.0	-	-	良好	灰黄褐	褐	細砂多・粗砂少	
52	33	B	II	口縁～体部	S102埋土	平行沈線・波状口縁		RL	(9.3)	<5.7>	(9.5)	-	-	-	良好	にぶい黄褐	暗褐		
53	40	B	-	体～底部	S102埋土			LR	-	<3.7>	-	5.7	-	-	良好	黒褐	褐	細砂多	
54	37	B	VI	口縁～体部	S102中～下位	平行沈線		LR	-		-	-	-	-	良好	黒	黒褐	細砂多・粗砂少	
55	36	B	I	口縁～体部	S102床直	ミガキ・平行沈線		LR	-		-	-	-	-	良好	黒褐	暗褐	細砂多・粗砂少	
56	38	B	V	口縁～体部	S102床直	波状口縁（結目）、波状・平行沈線	ミガキ	LR	-		-	-	-	-	良好	黒褐	橙	細砂多	
57	35	B	VI	口縁～体部	S102中～下位	波状口縁（波頂部結目）、平行沈線		LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多	
58	39	E	-	口縁～体部	S102埋土	ミガキ	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	暗褐	暗褐	細砂多	
60	43	B	VI	口縁～体部	S103埋土上層			LR	-		-	-	-	-	良好	灰黄褐	にぶい黄褐		
61	41	A	I	口縁～体部	S102・03断面	ミガキ、平行沈線、粘土瘤	ミガキ・平行沈線	-	-		-	-	-	-	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	細砂多	

第3表　土器観察表(1)

図版No	登録No	器種	分類	部位	出土位置	施文文様	内面調整	施文	口径	器高	最大径	底径	台脚部径	台高	焼成	外面色調	内面色調	胎土	備考
63	45	C	I	口縁～底部	S I 06床直	波状口縁	ミガキ	L R	15.5	24.9	17.9	8.5	－	－	良好	黒褐	黒褐	細砂多・粗砂少	外面スス付着
64	47	B	I	口縁～底部	S I 06床直	口縁突起４単位		L R	23.9	15.8	24.5	15.8	－	－	良好	黒褐	褐	細砂多・粗砂少	
65	46	B	VI	体～底部	S I 06床直	穿孔		L R	－	<16.0>	13.0	5.5	－	－	良好	黒	暗褐	細砂多	外面スス付着
66	49	B	V	口縁～底部	S I 06床直	口縁部縄文充填、ミガキ、工字文		L R	(14.6)	15.5	(15.6)	(8.0)	－	－	良好	暗赤褐	褐	細砂多	外面赤色顔料付着
67	54	B	II	口縁～底部	S I 06床直	波状口縁、波状・平行沈線		L R	10.2	8.9	10.6	5.8	－	－	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	細砂多・粗砂少	
68	52	B	II	口縁～体部	S I 06床直	口縁突起（波頂部刺目）、平行沈線		L R	(10.1)	<6.7>	(10.3)	－	－	－	良好	暗褐	にぶい黄褐	細砂多	
69	64	B	II	口縁～体部	S I 06埋土上～中位	口縁突起（波頂部刺目）、平行沈線		L R	(12.3)	<10.1>	(12.7)	－	－	－	良好	にぶい黄橙	黒褐	細砂多・粗砂少	内面スス付着
70	50	B	V	口縁～体部	S I 06床直	波状口縁（波頂部刺目）、平行沈線		L R	(13.5)	<7.5>	(13.9)	－	－	－	良好	黒	黒	細砂多・粗砂少	外面赤色顔料付着
71	63	B	IV a	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ・平行沈線	ミガキ・沈線	L R	(12.0)	<8.8>	(13.7)	－	－	－	良好	暗褐	黒褐	細砂多・粗砂少	外面スス付着
72	55	B	I	口縁～体部	S I 06床直	平行沈線		R L	(23.0)	<12.4>	－	－	－	－	良好	黒褐	にぶい赤褐	細砂多・粗砂少	外面スス付着
73	59	B	I	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ・平行沈線	ミガキ	R L	(16.2)	<9.5>	(17.1)	－	－	－	良好	黒褐	黒褐	細砂多・粗砂少	
74	56	B	VI	口縁～体部	S I 06床直	平行沈線		L R	(12.6)	<7.5>	－	－	－	－	良好	黒	黒褐	細砂多	外面スス付着
75	62	B	V	口縁～体部	S I 06床直	平行沈線	ミガキ	R L	(26.2)	<8.4>	(26.2)	－	－	－	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多・粗砂少	内外面スス付着
76	58	B	－	体～底部	S I 06埋土上～中位	縦位沈線	ミガキ	L R	－	<3.0>	－	3.8	5.3	1.6	良好	にぶい黄橙	にぶい黄褐	細砂多	
77	61	B	I	口縁～体部	S I 06床直	平行沈線	ミガキ	L R	(13.6)	<6.0>	(13.9)	－	－	－	良好	黒褐	暗褐	細砂多	
78	48	D	－	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ・平行沈線		－	(4.3)	<14.1>	(15.0)	－	－	－	良好	黒褐	黒褐		
79	57	C	I	口縁～体部	S I 06床直	波状口縁	ミガキ	L R	(18.8)	<15.1>	(21.0)	－	－	－	良好	暗褐	にぶい黄橙	細砂多	外面スス付着
80	53	E	－	口縁～底部	S I 06床直	ミガキ		－	6.7	4.4	6.9	2.6	2.8	0.8	良好	黒	灰褐	細砂多・粗砂少？	
81	60	B	V	口縁～体部	S I 06床直	波状口縁（波頂部刺目）、平行沈線	ミガキ	L R	－			－	－	－	良好	黒	灰褐	細砂多・粗砂少	外面スス付着
82	69	B	VI	口縁～体部	S I 06床直			L R	－		－	－	－	－	良好	浅黄橙	浅黄橙	細砂多・粗砂少	
83	65	B	V	口縁～体部	S I 06床直	波状口縁		L R	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄橙	黒褐	細砂多・粗砂少	
84	67	B	I	口縁～体部	S I 06床直	波状口縁（波頂部刺目）、平行沈線		L R	－		－	－	－	－	良好	黒	黒	細砂多・粗砂少	
85	70	B	V	口縁～体部	S I 06床直	指頭による沈み	ミガキ	L R	－		－	－	－	－	良好	黒褐	黒褐	細砂多	
86	71	B	V	口縁～体部	S I 06・07トレンチ	指頭による沈み	ミガキ	L R	－		－	－	－	－	良好	黒褐	黒褐	細砂多	
87	75	B	VI	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ、平行沈線	ミガキ	L R	－		－	－	－	－	良好	黒	黒	細砂多	外面スス付着
88	68	B	VI	口縁～体部	S I 06埋土上～中位	波状口縁（波頂部刺目）、平行沈線		L R	－		－	－	－	－	良好	灰黄褐	黒褐	細砂多・粗砂少	内外面スス付着
89	73	B	VI	口縁～体部	S I 06床直	平行沈線		R L	－		－	－	－	－	良好	褐	褐	細砂多・粗砂少	外面スス付着
90	72	B	IV b	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ、平行沈線	ミガキ	L R	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄橙	にぶい黄褐	細砂多	外面スス付着？
91	74	B	V	口縁～体部	S I 06床直	平行沈線	ミガキ	R L	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄褐	にぶい黄橙	細砂多	
92	93	B	IV d	口縁～体部	S I 06床直	平行沈線		L R	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄橙	にぶい黄褐	細砂多・粗砂少	
93	89	B	V	口縁～体部	S I 06石囲いが	ミガキ・平行沈線	ミガキ	L R	－		－	－	－	－	良好	黒	黒	細砂多・粗砂少	
94	83	B	I	口縁～体部	S I 06床直	波状口縁		R L	－		－	－	－	－	良好	褐	にぶい黄橙	細砂多	外面スス付着
95	102	B	II	口縁～体部	S I 06床直	口縁突起（波頂部刺目）、平行沈線		R L	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多	
96	101	B	II？	口縁～体部	S I 06埋土下位	波状口縁（波頂部刺目）、平行沈線		－	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多	
97	100	B	II	口縁～体部	S I 06床直	口縁突起（波頂部刺目）、平行沈線	縦位ミガキ	R L	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄橙	にぶい黄褐	細砂多	
98	81	B	I・VI	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ、変形工字文	ミガキ	L R	－		－	－	－	－	良好	黒褐	にぶい褐	細砂多	80と同一個体
99	92	B	I	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ、平行沈線	ミガキ	R L	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄橙	黒褐	細砂多	
100	97	B	VI	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ、平行沈線	ミガキ	L R	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄褐	褐	細砂多	
101	85	B	I	口縁～体部	S I 06石囲いが	平行沈線		L R	－		－	－	－	－	良好	灰黄褐	暗褐	細砂多・粗砂少	
102	99	B	VI	口縁～体部	S I 06床直	波状口縁（波頂部刺目）		R L	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多・粗砂少	
103	90	B	II	口縁～体部	S I 06埋土上～中位	ミガキ、平行沈線	ミガキ	L R	－		－	－	－	－	良好	黒褐	黒褐	細砂多	外面スス付着
104	95	B	V	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ	ミガキ	L R	－		－	－	－	－	良好	黒褐	黒褐	細砂多	外面スス付着？
105	112	B	VI	口縁～体部	S I 06埋土中～下位	ミガキ		L R	－		－	－	－	－	良好	にぶい赤褐	褐	細砂多・粗砂少	
106	91	B	V	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ	ミガキ	R L	－		－	－	－	－	良好	褐	黒褐	細砂多・粗砂少	外面スス付着
107	98	B	V	口縁～体部	S I 06埋土上～中位	ミガキ、平行沈線	ミガキ	L R	－		－	－	－	－	良好	黒褐	にぶい黄褐	細砂多	
108	105	B	VI	口縁～体部	S I 06床直	指頭による沈み		R L	－		－	－	－	－	良好	にぶい黄橙	にぶい黄褐	細砂多	

第４表　土器観察表(2)

掲載No	登録No	器種	分類	部位	出土位置	施文文様	内面調整	地文	口径	器高	最大径	底径	台脚部径	台高	焼成	外面色調	内面色調	胎土	備考
109	82	B	Ⅳc	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ		LR	-		-	-	-	-	良好	黒	にぶい黄褐	細砂多・粗砂少	
110	103	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 06床直	波状口縁（波頂部刻目）		RL	-		-	-	-	-	良好	黒	褐	細砂多	外面スス付着
111	111	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 06埋土上位	平行沈線		LR	-		-	-	-	-	良好	黒	にぶい褐	細砂多・粗砂少	
112	110	B	Ⅱ・Ⅵ	口縁～体部	S I 06床直	波状口縁（波頂部刻目）、ミガキ、平行沈線	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	黒	黒	細砂多	
113	104	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ・平行沈線		LR	-		-	-	-	-	良好	黒	暗褐	細砂多	
114	106	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 06床直	平行沈線		RL	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	細砂多	
115	108	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 06床直	波状口縁（波頂部刻目）、ミガキ・平行沈線	ミガキ	LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	黒褐	細砂多	
116	94	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ・平行沈線	ミガキ	LR	-		-	-	-	-	良好	黒褐	黒	細砂多	
117	107	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ・平行沈線	ミガキ	LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい橙	黒	細砂多	
118	115	B	Ⅵ	口縁	S I 06床直	波状口縁（波頂部刻目）、ミガキ	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	黒	黒	細砂多	
119	114	B	Ⅵ	口縁	S I 06床直	波状口縁（波頂部刻目）、ミガキ	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	黒	黒	細砂多	
120	113	E	-	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ		LR	-		-	-	-	-	良好	黒	黒	細砂多	
121	66	B	Ⅰ	体部	S I 06床直	ミガキ、工字文		LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい赤褐	灰黄褐	細砂多・粗砂少	外面赤色顔料付着
122	76	A	Ⅰ	口縁～体部	S I 06床直	口縁突起、口唇部沈線、変形工字文、粘土紐、ミガキ	ミガキ・沈線	-	-		-	-	-	-	良好	にぶい褐	にぶい褐	細砂多	
123	77	A	Ⅱ	口縁～体部	S I 06・07トレンチ	ミガキ、変形工字文	ミガキ・沈線	-	-		-	-	-	-	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	細砂多	
124	109	A	Ⅱ	口縁～体部	S I 06埋土下位	ミガキ、変形工字文	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	黒褐	にぶい褐	細砂多	
125	96	A	Ⅱ	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ、平行沈線	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	黒褐	褐	細砂多・粗砂少	
126	84	A	Ⅱ	体部	S I 06埋土下位	ミガキ、変形工字文	ミガキ	LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	細砂多	
127	79	A	Ⅱ	体部	S I 06床直	ミガキ、変形工字文	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	にぶい赤褐	黒褐	細砂多	
128	86	A	Ⅰ	体～底部	S I 06埋土下位	ミガキ、平行沈線	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	灰黄褐	灰黄褐	細砂多	
129	88	D	-	頸～体部	S I 06床直	ミガキ	ミガキ	-	-	11.0	-	-	-	-	良好	黒褐	黒褐	細砂多	
192	139	B	Ⅵ	口縁～底部	S I 07床直			LR	(10.5)	<8.7>	(10.6)	(6.3)	-	-	良好	黒褐	灰黄褐	細砂多	外面スス付着
193	140	B	-	体～底部	S I 07床直			L	-		-	6.0	-	-	良好	褐	暗褐	細砂多・粗砂少	
194	143	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 07下位	波状口縁		LR	-		-	-	-	-	良好	黒褐	黒褐	細砂多	
195	141	B	Ⅰ	口縁～体部	S I 07床直	平行沈線		L	-		-	-	-	-	良好	黒	にぶい黄橙	細砂多	
196	78	A	Ⅱ	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ、変形工字文	ミガキ・沈線	-	-		-	-	-	-	良好	黒	黒	細砂多	
197	142	A	Ⅱ	口縁～体部	S I 06床直	ミガキ、変形工字文	ミガキ	-	-	<6.0>	-	-	-	-	良好	にぶい橙	にぶい褐	細砂多	
204	144	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 09埋土			LR	(14.5)		(14.8)	-	-	-	良好	暗褐	にぶい黄褐	細砂多・粗砂少	
205	145	B	Ⅰ	口縁～体部	S I 09埋土下位～床直	平行沈線		LR	-	<1.2>	-	-	-	-	良好	褐	黒褐	細砂多	外面赤色顔料付着
206	147	E	-	底部	S I 09床直			LR	-	2.0	-	3.2	-	-	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	細砂多	ミニチュア
208	121	C	Ⅱ	口縁～底部	S I 10床直			LR	18.9	11.0	19.7	6.6	-	-	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	細砂多・粗砂少	穿孔有り
209	122	B	Ⅰ	口縁～底部	S I 10埋土下位～床直	口縁突起4単位(刻目)、平行・波状沈線、　台部段位沈線		LR	(14.5)	10.2	15.6	4.1	5.3	1.9	良好	黒	にぶい黄褐	細砂多・粗砂少	
210	119	B	Ⅰ	口縁～底部	S I 10土器群設中	口縁突起、変形工字文		LR	17.7	11.3	16.4	6.5	-	-	良好	にぶい橙	にぶい黄橙	細砂多	
211	118	B	Ⅱ	口縁～底部	S I 10床直	口縁突起5単位（刻目）、ミガキ、平行沈線		-	11.0	11.3	12.5	6.2	-	-	良好	黒褐	暗赤褐		
212	120	B	Ⅱ	口縁～底部	S I 10床直	口縁突起5単位(刻目)、平行沈線	ミガキ	LR	10.6	<3.6>	11.4	6.0	-	-	良好	黒褐	明褐	細砂多	
213	123	B	-	体～底部	S I 10床直			LR	-	<4.8>	-	5.7	-	-	良好	褐	にぶい黄褐	細砂多・粗砂少	底面にミガキ
214	138	B	-	体～底部	S I 10床直			LR	-	<12.5>	-	9.0	-	-	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多・粗砂少	
215	34	C	Ⅰ	口縁～体部	S I 10埋土下位～床直	ミガキ		LR	(31.0)		-	-	-	-	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多・粗砂少	面スス付着
216	125	B	Ⅰ	口縁～体部	S I 10埋土下位～床直	波状口縁		RL	-		-	-	-	-	良好	黒褐	灰褐	細砂多	外面スス付着
217	126	B	Ⅴ	口縁～体部	S I 10埋土下位	波状口縁、指頭による沈み		LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	黒褐	細砂多	
218	124	B	Ⅰ or Ⅵ	口縁～体部	S I 10床直	口縁突起、工字文	ミガキ	LR	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	黒褐	細砂多	129と同一個体・破損により割みの有無は不明
219	129	B	Ⅰ or Ⅵ	体部	S I 10埋土下位～床直	工字文	ミガキ	LR	-		-	-	-	-	良好	黒褐	褐灰	細砂多	124と同一個体
220	137	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 10埋土下位	波状口縁（波頂部刻目）、平行沈線	ミガキ	LR	-		-	-	-	-	良好	黒	黒	細砂多	
221	133	B	Ⅱ	口縁～体部	S I 10床直	波状突起（波頂部刻目）		RL	-		-	-	-	-	良好	灰黄褐	にぶい褐	細砂多	
222	130	B	Ⅳd	口縁～体部	S I 10埋土下位～床直	ミガキ、平行沈線		RL	-		-	-	-	-	良好	黒	黒	細砂多	内外面にスス付着
223	127	B	Ⅵ	口縁～体部	S I 10埋土下位～床直	波状口縁、ミガキ、変形工字文？	ミガキ	RL	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	褐	細砂多	

第５表　土器観察表(3)

掲載No	登録No	器種	分類	部位	出土位置	施文文様	内面調整	地文	口径	器高	最大径	底径	台脚部径	台高	焼成	外面色調	内面色調	胎土	備考
224	134	B	V	口縁～体部	S I 10埋土下位	波状口縁		L R	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多	
225	135	B	VI	口縁～体部	S I 10埋土下位	平行沈線	ミガキ	L R	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄橙	灰黄褐	細砂多	
226	80	B	I	口縁～体部	S I 09埋土	ミガキ・変形工字文		L R	-		-	-	-	-	良好	黒褐	にぶい褐	細砂多	81と同一個体
227	131	B	VI	口縁～体部	S I 10埋土下位～床直	波状口縁	ミガキ・沈線	R L	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	黒褐	細砂多	
228	128	A	II	口縁～体部	S I 10埋土下位	ミガキ・変形工字文	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	にぶい赤褐	にぶい赤褐	細砂多	
229	132	A	II	口縁～体部	S I 10床直	口唇部沈線、ミガキ、変形工字文	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	細砂多	外面赤色顔料付着・136と同一個体
230	136	A	II	口縁～体部	S I 10埋土下位～床直	口唇部沈線、ミガキ、変形工字文	ミガキ	-	-		-	-	-	-	良好	にぶい黄褐	にぶい黄褐	細砂多	132と同一個体
231	87	D	-	口縁～頸部	S I 10床直	ミガキ		-	-		-	-	-	-	良好	黒褐	黒褐	細砂多	内外面に赤色顔料付着

第６表　土器観察表(4)

掲載No	登録No	種別	部位	遺位	長さ	幅	厚さ	重さ	色調		備考
3	12	耳飾		II～IV層一括	3.6	1.7	1.4	6.4	10YR6/4	細砂多	
130	116	土偶	脚	S I 06床直	7.5	3.9	4.2	80.94	10YR5/3	細砂多	
131	117	土偶	脚	S I 06床直	2.4	5.7	4.1	30.92	10YR3/2	細砂多	

第７表　土製品観察表

掲載番号	遺物番号	器種	出土位置・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	石材産地	被熱	背面稜線	打角	打面	自然面	備考
19	151	槍先形尖頭器	-1C7・Ⅳ層	6.2	1.6	2.5	3.51	頁岩	奥羽山脈	-	-	-	-	-	
20	150	磨製石斧	-1C22・Ⅳ層中	8.5	4.05	1.55	71.1	砂岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
21	149	磨製石斧	-1C3・Ⅳ層上面	9.2	2.5	1.4	44.74	蛇紋岩	北上産地	-	-	-	-	有	
22	152	不定形剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	2.9	2	0.5	1.47	凝灰岩	奥羽山脈	-	-	-	-	-	
23	155	不定形剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	2.3	0.9	0.35	0.34	凝灰岩	奥羽山脈	-	-	-	-	-	
24	173	石鏃	-1C13・14・XV層	7	2.75	0.85	10.29	頁岩		-	Ⅰ	-	-	-	
44	201	石鏃	SI01下位	2.95	2.8	0.9	5.65	頁岩		-	-	-	-	有	
45	177	不定形剥片	SI01中～下位	2.8	3.8	0.85	6.61	珪質頁岩		-	Ⅱ	90	線	-	
46	196	楔形石器	SI01	4.4	2.8	1.1	12.21	頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	
47	188	楔形石器	SI01下位	2.65	3.05	1.25	10.23	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	
48	200	不定形石器	SI01理土	2.85	4.1	1.1	12.55	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
49	199	楔形石器	SI01理土	4.4	2.2	1.2	12.4	珪質頁岩	奥羽山脈	-	Ⅱ	-	-	有	
50	202	叩き石	SI01床直	9.45	7.3	3.4	195	砂岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
59	207	石鏃	SI02床直	2	1.6	0.5	0.92	頁岩		有	-	-	-	-	
62	208	石鏃	SI03理土中～下位	3.5	1.75	0.85	3.32	頁岩		有	-	-	-	-	
132	225	石鏃	SI06床直	3.7	1.15	0.45	1.44	頁岩		-	-	-	-	-	
133	223	石鏃	SI06床直	3	1.1	0.6	1.34	頁岩		-	-	-	-	-	
134	213	石鏃	SI06床直	3.5	1.6	0.7	3.17	珪質頁岩		-	-	-	-	-	
135	229	石鏃	SI06床直	4.2	1.3	0.7	3.45	頁岩		-	-	-	-	-	
136	228	石鏃	SI10床直	5.05	1.9	1.3	9.32	頁岩		-	-	-	-	-	
137	296	石鏃	SI06床直	3.2	1.9	0.85	4.9	珪質頁岩		-	-	-	-	-	
138	215	石鏃	SI06中位	2.45	1.5	0.7	1.94	珪質頁岩	-	-	Ⅱ	-	-	-	
139	224	石鏃	SI06理土	2.5	1.5	0.8	2.43	珪質頁岩		-	-	-	-	有	
140	217	石鏃	SI06	3.1	1.55	0.5	1.69	頁岩		-	-	-	-	-	
141	230	石鏃	SI06床直	3.7	2.45	1.2	9.93	頁岩		-	-	-	-	-	
142	231	石鏃	SI06理土	2.9	1.65	1.1	4.13	頁岩		-	-	-	-	-	
143	218	石鏃	SI06床直	2.8	0.5	0.5	0.65	珪質頁岩		-	-	-	-	-	
144	220	石鏃	SI06理土	6.4	1.75	0.9	8.29	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
145	214	石鏃	SI06理土	3.15	2.15	0.75	2.49	頁岩		有	-	-	-	-	
146	216	石鏃	SI06床直	2.5	3.1	1	5.75	珪質頁岩		-	-	-	-	-	
147	268	不定形剥片	SI06床直	3.3	2.2	1	5.95	頁岩		-	Ⅰ	93	1	有	
148	325	不定形剥片	SI06床直	3.4	3.9	0.9	10.44	珪質頁岩		-	Ⅱ	118	1	有	
149	232	不定形剥片	SI06理土	3.55	4.85	1.55	25.31	珪質頁岩		-	Ⅱ	106	2	有	
150	329	不定形石器	SI06理土下位～床直	3.35	1.95	0.6	3.8	頁岩		-	Ⅰ	116	1	-	
151	257	不定形剥片	SI06	1.75	3.4	0.55	3.38	凝灰岩		-	Ⅰ	-	-	有	
152	302	楔形石器	SI06床直	2.1	2.9	0.6	3.74	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
153	259	不定形剥片	SI06床直	2.65	2.3	0.8	3.51	珪質頁岩		-	Ⅰ	113	1	有	
154	260	楔形石器	SI06床直	2.7	3.1	1.1	5.58	珪質頁岩		-	Ⅱ	118	1	有	
155	276	不定形剥片	SI06床直	4.1	0.3	0.8	8.84	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
156	294	不定形剥片	SI06床直	4.5	2.5	1.2	7.31	頁岩		-	Ⅰ	118	1	-	
157	239	不定形剥片	SI06床直	4.8	4.4	1.1	21.25	頁岩	奥羽山脈	-	-	134	1	有	
158	226	不定形剥片	SI06理土	2.3	1.9	1.1	6.56	頁岩		-	-	-	-	-	
159	240	不定形剥片	SI06床直	1.85	2.5	0.45	2.1	珪質頁岩		-	Ⅰ	110	1	-	
160	258	楔形石器	SI06理土	3.05	2.5	0.9	4.81	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
161	313	不定形剥片	SI06床直	4.55	2.8	0.65	6.44	頁岩		-	Ⅰ	-	-	-	
162	323	楔形石器	SI06理土	2.5	2.2	0.8	3.16	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
163	352	不定形剥片	SI06・07設定トレンチ	1.55	3.25	0.7	3.45	珪質頁岩		-	Ⅰ	-	-	有	
164	319	不定形剥片	SI06理土下位～床直	2.15	2.3	0.65	3.14	珪質頁岩		-	Ⅱ	72	1	-	

第8表　石器観察表(1)

図版番号	遺物番号	器種	出土位置・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	石材産地	被熱	骨面構成	打角	打面	自然面	備考
165	246	楔形石器	SI06埋土	3.55	2.9	1.55	15.44	珪質頁岩		-	Ⅲ	-	-	有	
166	298	楔形石器	SI06床直	1.4	2.2	0.75	1.81	頁岩		-	-	-	-	-	
167	284	楔形石器	SI06床直	2.4	2.6	1.1	6.58	頁岩		-	Ⅲ	-	-	-	
168	222	楔形石器	SI06床直	4.35	2.25	1.4	7.54	頁岩		有	Ⅲ	97	1	-	
169	241	楔形石器	SI06床直	3.5	2.1	0.9	6.93	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
170	282	楔形石器	SI06埋土	3.85	3.35	0.9	12.58	頁岩		-	Ⅲ	-	-	-	
171	236	楔形石器	SI06床直	3.7	2.6	1.1	10.67	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
172	285	楔形石器	SI06床直	3.8	2.6	1.1	10.26	頁岩		-	-	-	-	有	
173	234	楔形石器	SI06埋土	3.3	2.2	0.35	2.48	頁岩		有	Ⅲ	-	-	-	
174	286	楔形石器	SI06埋土	2.8	3.15	1.4	7.32	頁岩		-	Ⅰ	-	-	有	
175	261	楔形石器	SI06床直	2.85	2.8	0.8	5.63	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
176	252	楔形石器	SI06石囲いか埋土	3.45	2.05	1.05	6.06	頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	
177	324	楔形石器	SI06埋土	2.85	2.65	1.85	9.99	珪質頁岩		-	Ⅲ	-	-	有	
178	281	不定形石器	SI06床直	3.3	3.2	1.6	15.18	頁岩		-	Ⅰ	-	-	有	
179	249	叩き石	SI06埋土	10.7	5.75	2.7	160	頁岩	奥羽山脈	-	Ⅲ	-	-	-	
180	287	石棒	SI06床直	5.6	6.1	3.1	80	頁岩		-	Ⅲ	-	-	有	
181	334	石棒	SI06床直	6.6	15.8	3.8	475	頁岩	北上産地	-	Ⅰ	-	-	有	
182	336	叩き石	SI06床直	22.3	9.6	5.3	1960	細粒花崗閃緑岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
183	341	叩き石	SI06床直	11.8	8.75	5.15	600	デイサイト	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
184	340	叩き石・磨石	SI06床直	13.1	10.7	1.9	440	砂岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
185	339	叩き石	SI06床直	11.9	6.6	3.3	280	デイサイト	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
186	337	円石	SI06床直	12.15	8.95	6.85	780	砂岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
187	338	円石	SI06床直	7.75	7.3	5.3	440	砂岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
188	335	叩き石・磨石	SI06床直	8.35	8.2	6.05	520	花崗閃緑岩	奥羽山脈基盤	有	-	-	-	有	
189	212	円石	SI06床直	10.3	6.8	2.5	240	砂岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
190	382	円石	SI10石囲いか	26.0	17.6	5.0	3200	砂岩		有	-	-	-	有	
191	378	台石	SI06床直	39.5	46	5.8	17500	砂岩		有	-	-	-	有	
198	353	楔形石器	SI06・07トレンチ	3.55	2.2	1	7	頁岩		-	Ⅱ	88	微	-	
199	346	磨製石器	SI07下位～床直	3.9	3.7	2.7	60	粘岩		-	-	-	-	有	
200	345	叩き石	SI07床直	19.4	8.8	1.9	500	砂岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
201	343	円石	SI07床直	10.85	8.05	8.8	435	細粒花崗閃緑岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
202	342	叩き石	SI07床直	8	6.7	4.6	310	デイサイト	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
203	344	円石	SI07床直	11.8	8.5	2.7	1160	砂岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
207	356	石錐	SI09埋土	3.3	0.8	0.5	1.12	珪質頁岩		-	-	-	-	-	
232	357	石錐	SI10埋土下位～床直	2.15	1.3	0.55	0.89	頁岩		-	-	-	-	-	
233	367	石錐	SI10埋土下位	2.2	0.65	0.55	0.55	珪質頁岩	奥羽山脈	-	-	-	-	-	
234	360	楔形石器	SI10埋土下位～床直	6.4	4.3	1.4	6.84	頁岩							
235	363	楔形石器	SI10埋土下位～床直	2.9	1.7	1.1	4.77	頁岩		-	Ⅲ	-	-	-	
236	371	叩き石	SI10床直	12.3	5.8	3.8	285	砂岩	奥羽山脈	-	-	-	-	有	
-	153	剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	2.1	1.6	0.4	0.71	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅰ	-	-	-	
-	154	チップ	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	0.95	1.2	0.35	0.27	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅲ	-	-	-	
-	156	剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	1.4	1.15	0.35	0.26	頁岩	奥羽山脈	有	Ⅲ	-	-	-	
-	157 a	剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	0.90	1.10	0.20	0.99	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅰ	-	-	-	
-	157b	剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	b 1.60	2.30	0.60	0.99	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅰ	-	-	-	
-	158	不定形剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	2.6	2.6	0.75	3.67	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅲ	-	-	-	
-	159	不定形剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	1.85	1.55	0.35	0.61	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅰ	-	-	-	
-	160	不定形剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層	1.7	1.15	0.3	0.45	凝灰岩	奥羽山脈	有	Ⅰ	-	-	-	
-	161	楔形石器	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	2.2	1.9	1.4	5.52	石英		-	Ⅲ	-	-	有	

第９表　石器観察表(2)

掲載番号	遺物番号	器種	出土位置・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	石材産地	被熱	背面構成	打角	打面	自然面	備考
-	162	剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	3.05	1.9	1.05	4.14	頁岩		-	Ⅰ	128	1	有	
-	163	剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	3	2.45	1.5	6.95	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅰ	-	-	-	楔形石器の可能性あり
-	164	剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	2.3	1.35	0.45	0.59	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅰ	-	-	有	
-	165	剥片	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	2	2.15	0.6	1.94	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅱ	-	-	-	
-	166	チップ	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	0.7	0.6	0.15	0.05	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅰ	-	-	-	
-	167	チップ	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	1.55	0.8	0.15	0.15	凝灰岩	奥羽山脈	有	Ⅰ	-	-	-	
-	168	チップ	-1C・Ⅱ～Ⅳ層中	1.5	0.7	0.15	0.09	凝灰岩	奥羽山脈	-	Ⅰ	-	-	-	
-	169	剥片	-1C2・Ⅵ層中	2.1	1.2	0.35	0.55	頁岩		-	Ⅰ	94	線	-	
-	170	剥片	-1C9・Ⅱ～Ⅲ層	1.25	2.05	0.8	2.64	珪化木	奥羽山脈	有	Ⅱ	-	-	-	
-	171	剥片	-2C23・Ⅱ層中	2.25	3.45	0.5	2.55	頁岩		有	Ⅰ	-	-	-	
-	172	剥片	-1C18・19・ⅩⅤ層	2.7	2.4	0.6	3.64	珪質頁岩	奥羽山脈	-	Ⅰ	89	線	-	
-	174	剥片	-1C16・ⅩⅡ層	2.4	6.15	1.65	56.13	頁岩		-	Ⅰ	129	1	-	
-	175	剥片	SI01床直	3.5	3.75	1.3	11.92	珪質頁岩		-	Ⅱ	98	1	有	楔形石器の可能性あり
-	176	土塊？	SI01床直	3.7	3.8	1.85	17	-		-	-	-	-	-	
-	178	剥片	SI01	3.35	3.55	0.35	4.07	頁岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	179	剥片	SI01中位	3.3	1.6	0.35	1.66	珪質頁岩		-	Ⅰ	110	1	-	
-	180	剥片	SI01上位	2.45	1.8	0.75	1.72	頁岩		-	Ⅰ	81	1	有	
-	181	剥片	SI01	2.1	3.1	0.5	4.05	砂岩		-	Ⅰ	-	-	-	
	182	剥片	SI01中位	3.45	2.2	1.3	9.68	珪質頁岩		-	Ⅰ	-	-	有	
-	183	剥片	SI01中位	2.7	1.35	0.7	2.49	石英		-	Ⅱ	-	-	-	楔形石器の可能性あり
-	184	剥片	SI01	3.1	2.65	0.8	4.93	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
-	185	剥片	SI01	2.85	2	1.05	4.96	珪質頁岩			Ⅱ	98	1	-	
-	186	楔形石器	SI01床直	1.85	2	0.55	1.1	珪質頁岩			Ⅱ	90	線	-	
-	187	-		2.65	3.2	0.65	3.83	-		-	-	-	-	-	
-	189	剥片	SI01下位	3.5	2.55	1.1	10.48	頁岩		有	Ⅰ	-	-	有	
-	190	剥片	SI01床直	2.1	1.75	0.7	2.46	赤色頁岩		有	Ⅱ	91	線	有	
-	191a	剥片	SI01下位	2.25	2.05	0.45	1.15	珪質頁岩		-	Ⅱ	102	1	-	
-	191b	剥片	SI01下位	3.4	1.75	0.5	2.82	粘板岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	192	剥片	SI01中～下位	2.75	1.45	0.35	1.07	頁岩		-	Ⅰ	107	1	有	
-	193	チップ	SI01床直	1.35	1.3	0.5	0.56	頁岩		-	Ⅱ	109	1	-	
-	194	剥片	SI01	3	2.1	0.55	2.41	珪質頁岩		-	Ⅰ	94	1	有	
-	195	剥片	SI01	2.85	0.65	0.45	0.83	珪質頁岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	197	不定形剥片	SI01	3.8	3.2	1.05	11.81	頁岩		-	Ⅰ	120	1	有	
-	198	剥片	SI01床直	3.8	5.1	0.5	10.26	頁岩		有	Ⅱ	-	-	有	
-	203	剥片	SI02床直	4.5	5	0.85	19.25	頁岩		-	Ⅱ	126	2	-	
-	204a	剥片	SI02覆土中～下位	1.7	0.95	0.65	1.21	石英		-	-	-	-	-	
-	204b	剥片	SI02覆土中～下位	1.85	0.9	0.3	0.66	頁岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	205	剥片	SI02覆土中～下位	2.15	1.15	0.6	1.1	頁岩		-	Ⅰ	103	1	-	
-	206	剥片	SI02床直	5.15	3	0.8	8.83	頁岩		-	Ⅰ	118	1	有	
-	209	剥片	SI01・03覆土	1.8	2.4	0.5	2.33	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	
-	210	剥片	SI03覆土中～下位	2.8	2.55	0.5	3.47	珪質頁岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	211	チップ	SI03覆土	1.3	1.5	0.35	0.53	珪質頁岩		有	Ⅰ	-	-	-	
-	219	剥片	SI06床直	3.7	1.7	0.75	3.78	頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	
-	221	剥片	SI06覆土	5.7	4.8	1.25	37.53	頁岩		-	Ⅱ	78	1	有	
-	227	楔形石器	SI06床直	2.4	3.8	1.55	13.14	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	ピエスの可能性が高い
-	233	不定形石器	SI06床直	2.65	7.2	0.05	3.93	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	
-	235	剥片	SI06床直	4.65	4.5	1.75	27.81	珪質頁岩		有	Ⅰ	-	-	有	
-	237	剥片	SI06床直	2.75	2.4	1.05	7.52	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	

第10表　石器観察表(3)

図版番号	遺物番号	器種	出土位置・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	石材産地	被熱	背面構成	打角	打面	自然面	備考
-	238	剥片	SI06床直	2.15	2.95	0.9	6.37	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
-	242	剥片	SI06埋土	1.7	2.8	0.9	2.53	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	
-	243	剥片	SI06床直	3	2.5	1.05	4.53	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
-	244	剥片	SI06床直	2.9	2.1	1.1	4.96	珪質頁岩		-	Ⅰ	108	1	有	
-	245	剥片	SI06埋土	2.4	1.8	0.7	2.56	頁岩		有	Ⅰ	-	-	-	
-	247	剥片	SI06埋土	2.45	0.8	0.4	1.4	頁岩		-	Ⅰ	87	1	有	
-	248	剥片	SI06埋土	1.85	1.4	0.5	0.76	頁岩		-	Ⅰ	75	1	有	
-	250	剥片	SI06埋土	3.1	2.25	0.2	1.77	粘板岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	251	剥片	SI06埋土	3.7	2.65	1.85	12.39	石英		-	Ⅱ？	-	-	有	
-	253	剥片	SI06埋土	3.35	1.65	0.75	4.81	粘板岩		-	Ⅱ	-	-	-	
-	254	剥片	SI06床直	4.6	4.9	1.45	20.02	凝灰岩		-	Ⅱ	81	1	有	
-	255	・	SI06埋土	1.65	2.65	0.8	2.48	-	-	-	-	-	-	有	没石
-	256	剥片	SI10床直	3.9	2.45	0.85	6.61	珪質頁岩		-	Ⅰ	-	-	有	
-	262	剥片	SI06	3.1	2.8	1.55	8.02	頁岩		有	Ⅱ	-	1	-	
-	263	楔形石器	SI06	3.35	1.95	0.75	5.1	石英		-	Ⅰ	103	1	-	
-	264	剥片	SI06	4.15	2.3	1.05	8.69	頁岩	奥羽山脈	-	Ⅰ	9 6	1	-	
-	265	剥片	SI06	2.3	1.75	0.6	1.37	頁岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	266	楔形石器	SI06床直	3.75	2.2	0.6	4.45	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
-	267	剥片	SI06	2.3	2.55	0.55	2.27	頁岩		有	Ⅱ	116	1	-	
-	269	剥片	SI06床直	2.45	2.1	0.6	2.85	頁岩		-	Ⅰ	126	1	有	
-	270	剥片	SI06埋土上層	2.6	2.5	1.2	3.65	珪質頁岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	271	剥片	SI06床直	2.95	2.65	0.6	7.08	砂岩		有	Ⅰ	-	-	-	
-	272	剥片	SI06床直	4.75	3.5	1.2	17.03	珪質頁岩		-	Ⅱ	117	1	有	
-	273	剥片	SI06床直	2.3	1.55	0.35	0.72	頁岩		-	Ⅱ	88	稜	-	
-	274	剥片	SI06埋土	1.6	2.65	1.15	3.92	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	
-	275	剥片	SI06床直	2.6	1.3	0.4	1.79	珪質頁岩		-	Ⅰ	108	1	-	
-	277	剥片	SI06床直	3.25	2.55	0.45	2.6	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	
-	278	剥片	SI06	2.9	3.65	0.5	3.08	頁岩		-	Ⅱ	136	1	-	
-	279	剥片	SI10床直	5.9	3.65	0.75	22.36	頁岩		-	Ⅰ	113	1	-	
-	280	剥片	SI06床直	3.85	2.75	0.95	6.26	頁岩		-	Ⅱ	117	1	-	
-	283	・	SI06床直	3.25	1.75	1.2	6.19	石英		-	Ⅱ	-	-	-	没？
-	288	剥片	SI06床直	2.05	2.85	0.5	2.19	珪質頁岩		-	Ⅰ	103	1	-	
-	289	剥片	SI06埋土	1.3	1.95	0.45	2	珪質頁岩		-	Ⅰ	105	稜	-	
-	290	剥片	SI06床直	3.24	2.4	0.6	4.08	珪質頁岩		-	Ⅰ	-	-	有	
-	291	剥片	SI06埋土	2.65	5	1.25	10.29	頁岩		-	Ⅱ	133	-	-	
-	292	剥片	SI06床直	3	1.4	0.65	2.92	頁岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	293	剥片	SI06床直	1.35	2	0.25	0.48	頁岩		有	-	-	-	-	
-	296	剥片	SI06床直	2.7	1.65	0.75	2.45	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
-	297	剥片	SI06床直	2.05	2.45	0.7	6.42	頁岩		-	Ⅱ	-	-	-	
-	299	剥片	SI06埋土中位	2.8	1.3	0.65	1.86	珪質頁岩		-	Ⅱ	-	-	有	
-	300	・	SI06床直	3.65	1.4	0.65	2.92	粘板岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	301	剥片	SI06床直	2.05	1.9	0.65	2.38	頁岩		有	Ⅱ	111	1	有	
-	303	剥片	SI06床直	3.7	2.5	1.05	6.08	頁岩		-	-	-	-	-	
-	304	剥片	SI06床直	4.45	2.1	1.25	8.38	頁岩		-	-	-	-	-	
-	305	剥片	SI06埋土	2.05	2.2	0.35	1.54	珪質頁岩		-	Ⅰ	-	-	-	
-	306	剥片（ピエス？）	SI06床直	3.65	4.3	0.55	7.33	頁岩		-	Ⅰ	-	-	有	楔形石器の可能性あり
-	307	剥片	SI06埋土下位	3.1	1.55	0.35	1.64	頁岩		-	Ⅱ	66	稜	-	
-	308	剥片	SI06埋土下位	2.45	1	0.85	1.38	頁岩		-	-	-	-	有	

第11表　石器観察表(4)

掲載番号	遺物番号	器種	出土位置・層位	長さ	幅	厚さ	重さ	石材	石材産地	被熱	背面構成	打角	打面	自然面	備考
-	309a	剥片	SI06床直	2.7	1.5	0.55	1.71	頁岩		有	I	-	-	-	
-	309b	剥片	SI06床直	1.8	1.4	0.55	1.15	珪質頁岩		-	II	108	3	有	
-	310	剥片	SI06床直	2.15	3	0.5	2.51	頁岩		-	I	-	-	-	
-	311	チップ	SI06床直	1.5	0.8	0.15	0.14	粘板岩		-	I	-	-	-	
-	312	剥片	SI06床直	3.8	1.8	1	6.7	珪質頁岩		-	II	109	1	-	
-	314	剥片	SI06床直	2.15	1.35	0.45	1.12	頁岩		-	I	-	-	-	
-	315	剥片	SI06床直	3.65	2.3	1.1	9.19	珪質頁岩		-	I	74	1	有	
-	316	剥片	SI06床直	2.3	4.6	1.1	11.97	頁岩		-	II	99	1	有	
-	317	剥片	SI06石囲いか	2.15	3.9	0.75	5.36	頁岩		-	I	101	5	-	
-	318	剥片	SI06埋土下位～床直	3.5	1.2	0.55	1.75	頁岩		-	-	-	-	-	
-	320	剥片	SI06埋土	2.7	5.5	1.05	12.35	頁岩		-	II	112	1	有	
-	321	チップ	SI06埋土	1.2	1.55	0.45	0.88	頁岩		-	II	68	1	有	
-	322	剥片	SI06埋土	3.3	2	1.1	3.98	珪質頁岩		-	II	94	1	有	
-	326	剥片	SI06埋土	1.75	2.3	0.4	1.06	頁岩		-	II	101	1	有	
-	327	剥片	SI06埋土下位～床直	3.7	1.95	0.85	7.24	珪質頁岩		-	I	104	1	有	
-	328	剥片	SI06埋土下位～床直	1.1	3.6	0.85	2.53	珪質頁岩		-	II	-	-	有	
-	330	楔形石器	SI06埋土下位～床直	2.45	2.2	1.1	5.14	頁岩		-	I	-	-	有	
-	331	剥片	SI06埋土	2.7	3.5	0.75	4.93	頁岩		-	-	-	-	有	
-	332	剥片	SI06埋土	2.3	2.5	0.8	3.55	石英		-	I ?	-	-	-	
-	333	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
-	347	剥片	SI06・07設定トレンチ	2.85	1.95	0.6	3.18	頁岩		-	-	-	-	有	
-	348	剥片	SI06・07設定トレンチ	4	6.05	0.9	21.77	頁岩		-	II	126	2		
-	349	剥片	SI06・07設定トレンチ	2.2	1.9	1.35	5.25	石英		-	-	-	-	-	
-	350	剥片	SI06・07設定トレンチ	1.6	2.2	0.3	0.95	頁岩		-	I	-	-	-	
-	351	剥片	SI06・07設定トレンチ	2.7	1.7	0.55	2.29	珪質頁岩		-	I	-	-	有	
-	354	剥片	SI06・07設定トレンチ	5.35	2.8	0.9	8.75	頁岩		-	I	91	1	有	
-	355	剥片	SI09埋土	2.7	2.4	0.65	3.74	頁岩		-	I	118	2	有	
-	358	剥片	SI10埋土下位～床直	2.9	2.8	1.2	7.6	頁岩		-	II	-	-	-	
-	359	剥片	SI10埋土下位～床直	3.6	3.8	1.15	8.08	頁岩		-	I	69	1	-	
-	361	剥片	SI10埋土下位～床直	3.35	2.4	0.7	5.82	珪質頁岩		-	-	-	-	有	
-	362	剥片	SI10埋土下位～床直	2.4	1.4	0.75	3.34	石英		-	I	-	-	-	
-	364	剥片	SI10埋土下位	4.9	4.3	1.5	45.3	珪質頁岩		-	II	121	1	有	
-	365	剥片	SI10埋土下位	1.55	2.6	0.35	1.1	頁岩			II	99	1	-	
-	366	剥片	SI10埋土下位	6.4	4.3	1.4	37.64	頁岩		-	II	91	稜	-	
-	368	剥片	SI10埋土下位	2	2.5	0.4	1.9	頁岩		有	II	86	1	-	
-	369	剥片	SI10埋土下位	4	2.6	0.8	10.3	頁岩		-	I	-	-	-	
-	370	楔形石器（？）	SI10埋土下位	2.35	2.8	0.35	1.61	珪質頁岩	奥羽山脈	-	II	-	-	-	
-	372	剥片	表土一括	2.25	3.75	0.75	5.98	凝灰岩		有	II	-	-	-	
-	373	剥片	表土一括	2.5	1.85	6.05	2.31	粘板岩		-	?	-	-	-	
-	374	チップ	表土一括	1.45	1.1	0.25	0.25	凝灰岩		有	I	-	-		
-	375	剥片	表土一括	2.75	3.5	1.35	10.65	頁岩		-	I	-	-	有	
-	376	剥片	表土一括	2.8	3	1.7	6.54	凝灰岩		有	-	-	-	-	
-	377	剥片	表土一括	3.7	2.4	1.85	11.15	珪質頁岩		-	II	-	-	有	
-	379	剥片	SI09	1.8	2.8	0.1	0.47	粘板岩		-	I	-	-	-	
-	380	剥片	SI09	3.65	2.05	0.85	5.6	珪質頁岩		-	I	82	稜	-	

第12表　石器観察表(5)

第Ⅵ章　まとめ

1．縄文時代の石器

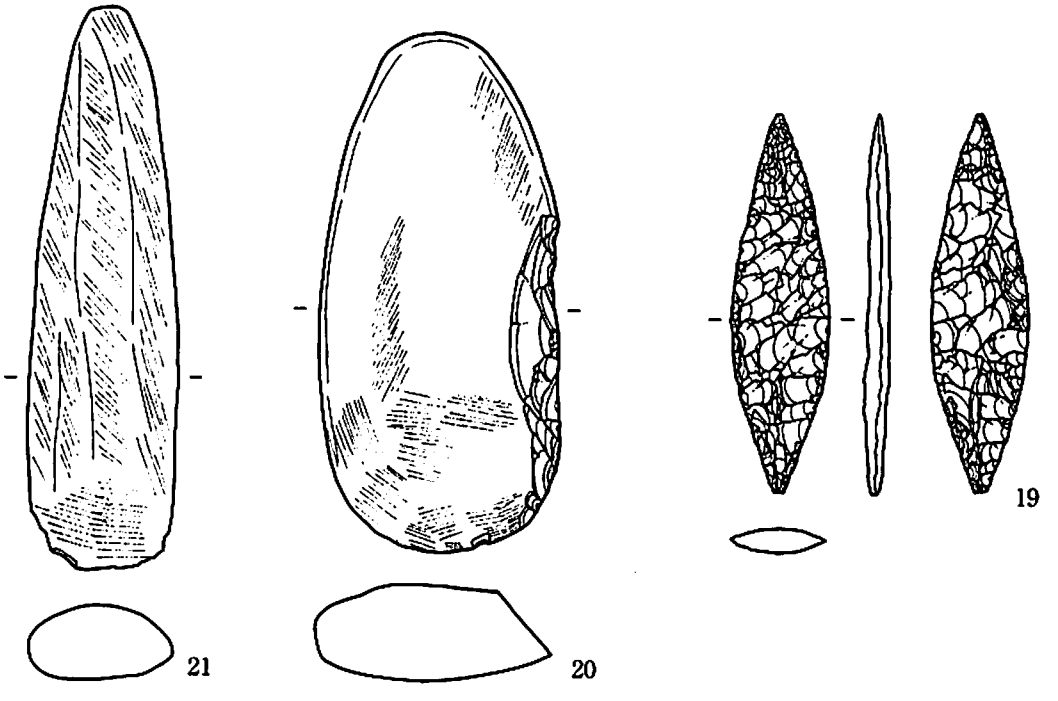
本遺跡では十和田南部火山灰（Ⅳ層）降灰前後の堆積層であるⅣ～Ⅴ層から磨製石斧２点、Ⅵ層上面から槍先形尖頭器１点計３点が出土している。県内において早期以前の出土数が稀なことから、それらのまとめを行いたい。

磨製石斧は、出土層位から21は前期から早期にかけて、20は早期以前として捉えられる。

槍先形尖頭器は、柳葉形を呈し、ほぼ胴部中位に最大幅を持つものである出土層位から早期以前と判断できる。岩手県内では槍先形尖頭器の出土量は少なく、本遺跡と同一町内において早期以前の資料が得られている遺跡でも尖頭器類の出土はない。そのため東北地方に検討していく対象範囲を広げ、白石（1989）や石井（2002）らによりが集成がなされているのでそれらと比較していく。それらから本石器のような形状や厚さを呈している資料は、弓張平Ｂ・月山沢遺跡の出土石器や御子柴・長者久保系石器群にその存在が認められ、それらと比較可能であると思われる。

弓張平Ｂ・月山沢遺跡出土の槍先形尖頭器は、大形から中形の柳葉形の形状を呈した両面加工のものである。前者は胴部中位より下位に最大幅があるものが多く、後者は胴部中位に最大幅があるものが多く細石刃と共伴している。また、御子柴・長者久保系石器群の槍先形尖頭器は、大形から中形の木葉形ないし柳葉形を呈する両面加工のもので、最大幅が胴部中位にある。両遺跡の資料共に後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての位置付けがなされている。

本県における類似資料が確認できたのは１遺跡だけで、峠山牧場Ⅰ遺跡Ａ地区のブロック７・30の出土資料にその存在を求めることができる。前者のブロックはナイフ形石器と共伴している第５文化層、後者のブロックは１点のみの出土で局部磨製石斧と共に第７文化層として位置付けれている。後者の資料は有舌尖頭



第49図　Ⅳ～Ⅵ層出土土器

器と報告しているが基部側の調整が浅いことから、ここでは槍先形尖頭器とみなして扱う。この第５文化層はＡＴ層の上位、第７文化層は草創期の文化層として報告がなされ、両ブロックの槍先形尖頭器の形状や調整には違いは見られず、最大幅が胴部中位にある後者の方がより本石器と近似している。本県の資料からは、後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけてに属する資料と対比できるかと思われる。

上記のような資料から判断すると、本石器は、後期旧石器時代末から縄文時代草創期に属するものと考えられる。

２．竪穴住居出土土器

ここでは竪穴住居（以下、住居とする）から出土した土器のみを扱い、下記をまとめるに当たっては先述した分類項目に従い行っている。８棟の住居を検出しそれぞれに遺物が確認されているものの、遺物の出土量にかなりの差があることから各住居における差異を抽出しずらいと思われる。しかし今回は積極的にそれらの分類を行い時間軸上で捉えてみたい。

１）器種

器種構成は、先述した項で示したように深鉢・鉢・壺・浅鉢・ミニチュア土器である。各器種ごとに細分を行い、すべての器種をまとめた第50図、浅鉢のみを抽出した第51図がある。住居によって出土量の差があるため比較が困難だが、以下に各器種において確認できた特徴をまとめておく。

・浅鉢は、底部から口縁にかけての立ち上がりで２種類に分類しているが、各住居においてそれぞれ確認されている。

・鉢類は、５つに分類したが第10図の通りである。６・10号住居で分類したすべてが見られ、基本的に各住居を通じてⅡ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ類が存在している。さらにⅠ類は、６号住居以前に多く１・２号住居においてはその存在が認めれらなくなることから、衰退していった結果によるものとも想定されるが、そこには出度量の差による可能性も大きく存在している。

台付鉢が確認されているが、76と209の２点で数は少ないもののⅠ類のみに存在している。これらは台部の高さが低いことから大洞Ａ′式に比定される。

Ⅳａ類とした71に見られる体部と口縁部の特徴は、砂沢式に比定される。

・深鉢は口縁部が内傾していく特徴があり、口縁部への立ち上がりで細分している。これらは縄文時代晩期末の特徴と同じである。

・壺はほとんど出土点数がなく、個体復元ができたのは６号住居出土の１点のみである。この壺は口縁部直下の沈線と貼付文を有する特徴は、大洞Ａ′式に比定される。

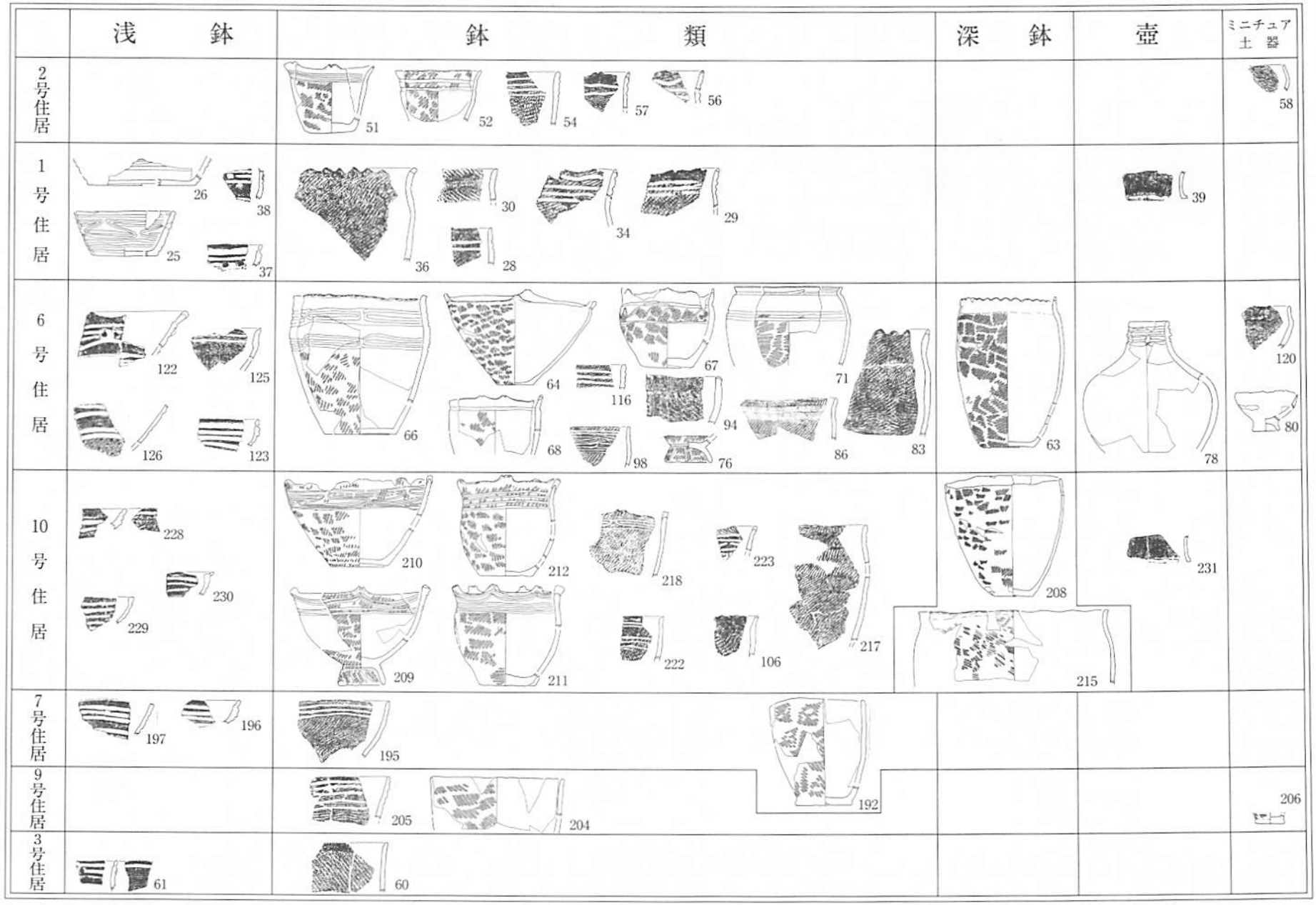
２）文様

文様構成は、浅鉢や鉢に施文された変形工字文・工字文（第52図）、鉢に施文されたその他の文様（第54図）から検討したい。変形工字文や工字文は各住居で見られ、それらの特徴が確認できたで述べておく。

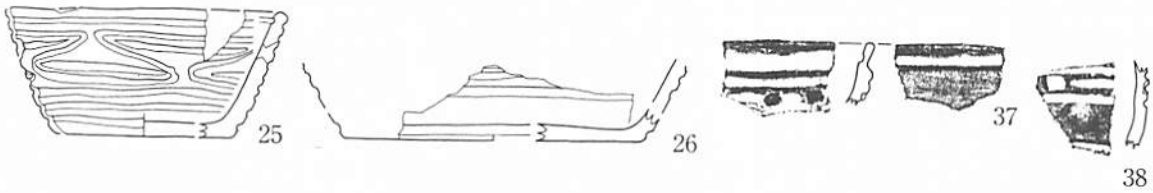
変形工字文・工字文

・１号竪穴住居は工字文と変形工字文が見られ、大洞Ａ～砂沢式にかけて存在している。38の工字文（？）は大洞Ａ式、37の変形工字文は大洞Ａ′式、25・26は変形工字文が浅鉢の体部下半まで施文されていることから砂沢式、それぞれ比定される。

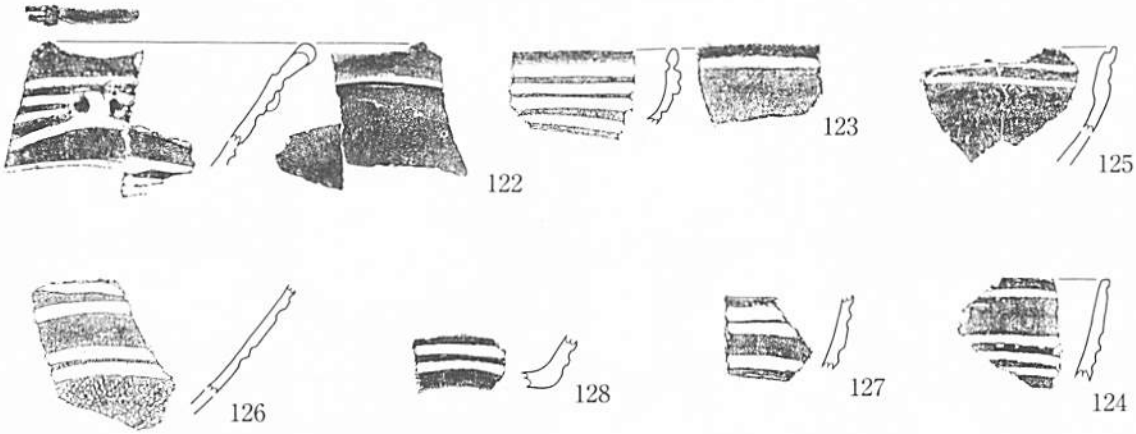
・６号竪穴住居は変形工字文と工字文が見られ、大洞Ａ～砂沢式にかけてのものが存在している。121の工



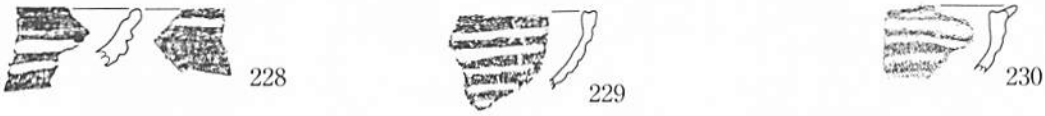
第50図　竪穴住居出土土器集成



1号住居



6号住居

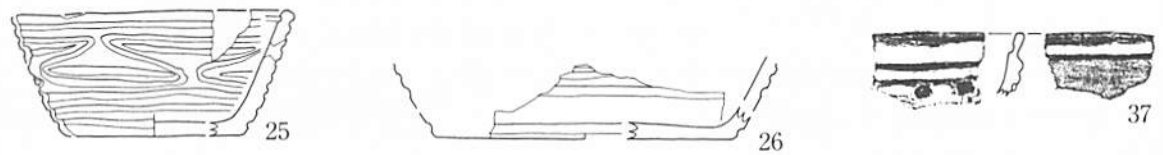


10号住居

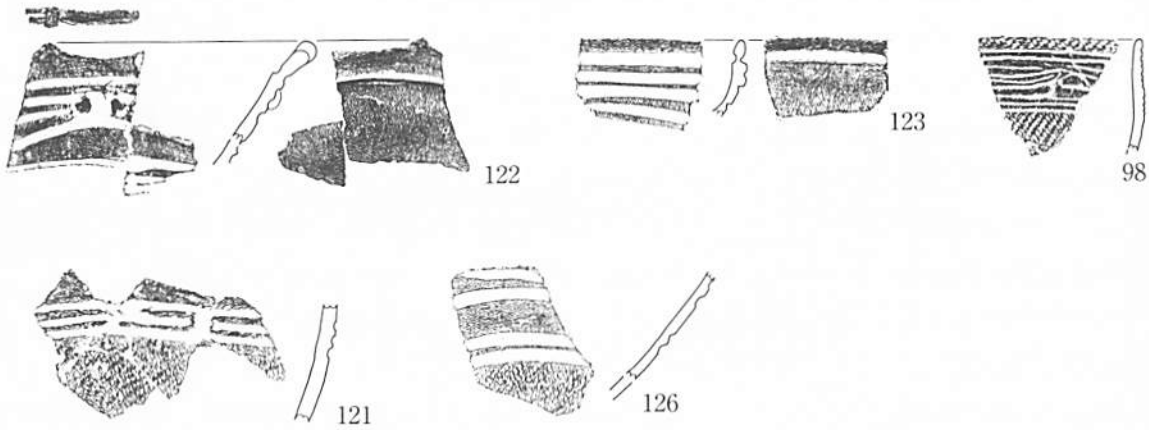
7号住居

3号住居

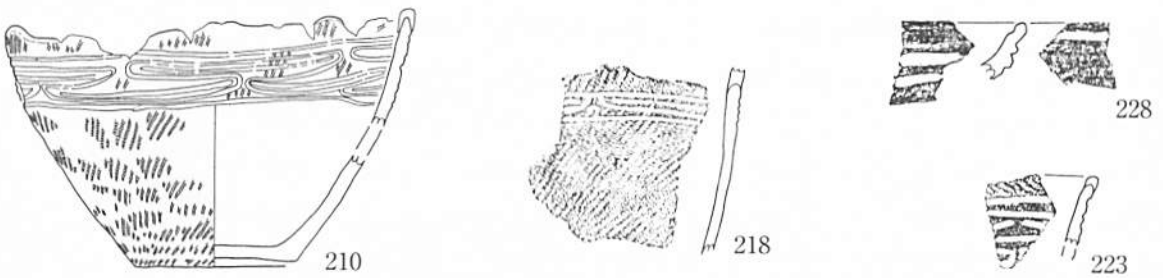
第51図　浅鉢集成



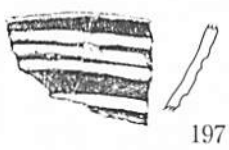
1号住居



6号住居



10号住居



7号住居

3号住居

第52図　変形工字文・工字文集成

字文は大洞A式、123の変形工字文は肉厚的な沈線が見られることから大洞A′式、122や126の変形工字文は沈線が太いうえに浅くなり、さらに122は瘤の貼付が見られることから砂沢式にそれぞれ比定される。

・7号竪穴住居は変形工字文と工字文が見られ、大洞A′式のものが存在している。196と197の変形工字文は肉厚的な沈線が見られることから大洞A′式に比定できる。

・10号竪穴住居は変形工字文と工字文が見られ、大洞A～A′式にかけてのものが存在している。218・219の工字文は大洞A式、210の変形工字文は大洞A～A′式、それぞれ比定される。223・226は不明である。

その他の文様

基本的に変形工字文や工字文以外に鉢に施文されている文様は、平行沈線、平行沈線と波状沈線の組み合わせ、指頭による沈みの概ね3つにまとめることができる。

文様構成は鉢類においては、Ⅰ類のみ工字文と変形工字文が施文され、それ以外のⅡ～Ⅵ類にその他の文様が施文されている。Ⅱ～Ⅳ類内において文様の差は認められない。

3）口縁部形態

口縁部の形態は第54図に示し、以下のような特徴がある。それ以外は基本的に平口縁である。

・指頭による波状縁を呈するもの。その高低差により3種類に分けられる。

・口唇部に縄文を充填するもの。

・口唇部に突起を有するもの。突起の単位は3～6単位まであり、突起上の刻みの有無で基本的には分けられる。大半は突起上に一つ以上の刻みを有し1個体で同じ数の刻み持つものが大半であるが、1個体でも突起上の刻みが異なるものもある。

・口唇部に細かな刻みが施されるもので、3種類に分けられる。波状縁の波頂部に刻まれたもの、連続した刻みを持つもの、平口縁にある程度間隔をあけて刻まれるものがある。

また、口縁部付近まで縄文が施文されているものとミガキによるものが存在しており、鉢類に共通して見られ分類した中において差異は確認されていない。

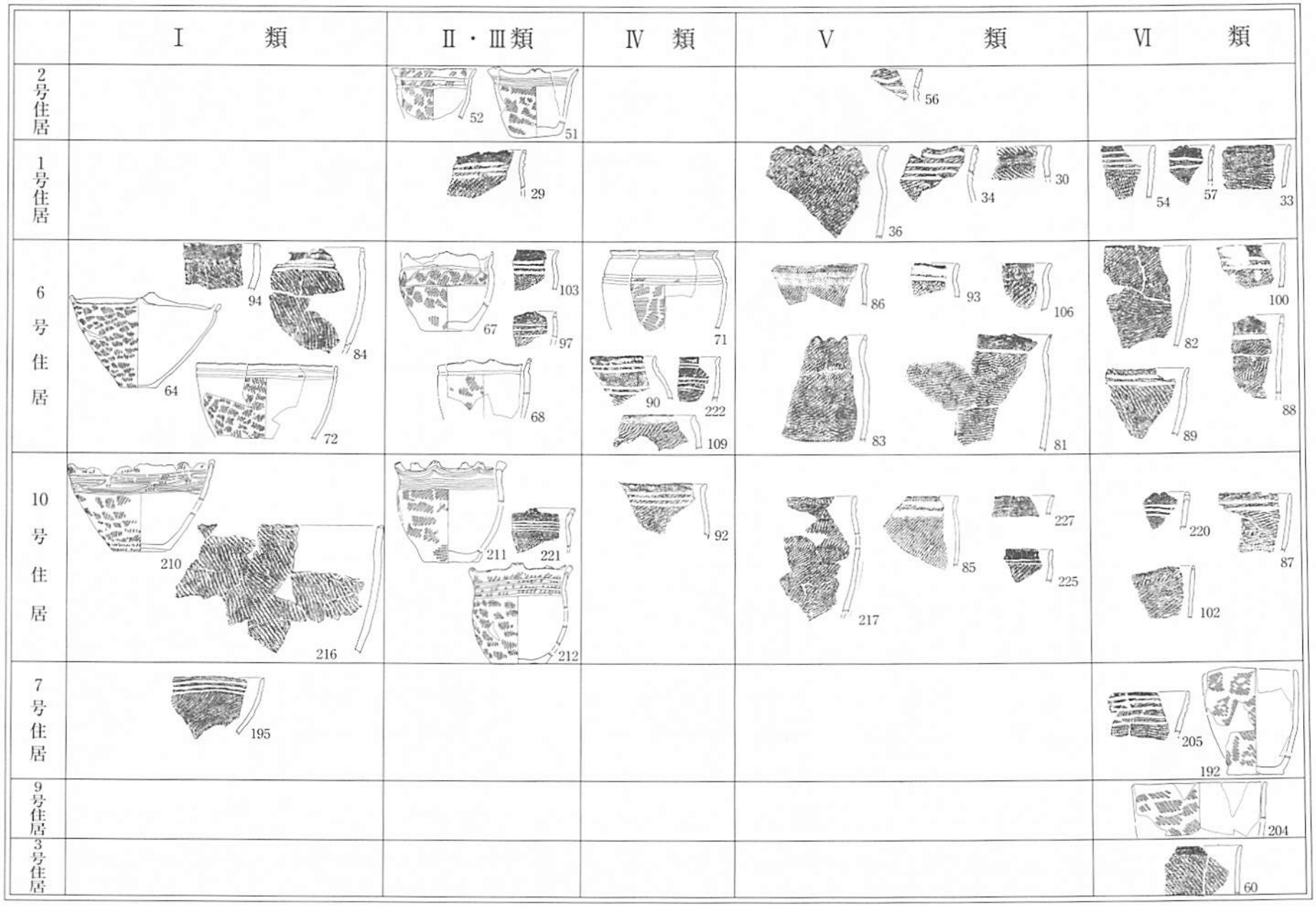
口縁部形態を以上のようにまとめたが、鉢類の中においてⅠ・Ⅱ・Ⅲ類に突起を有し、Ⅳ・Ⅴ類にそれ以外の特徴を持つものが多く存在していることを指摘できる。ただし各竪穴住居において特徴を抽出できず、全てにおいてそれらを見ることができる。

4）まとめ

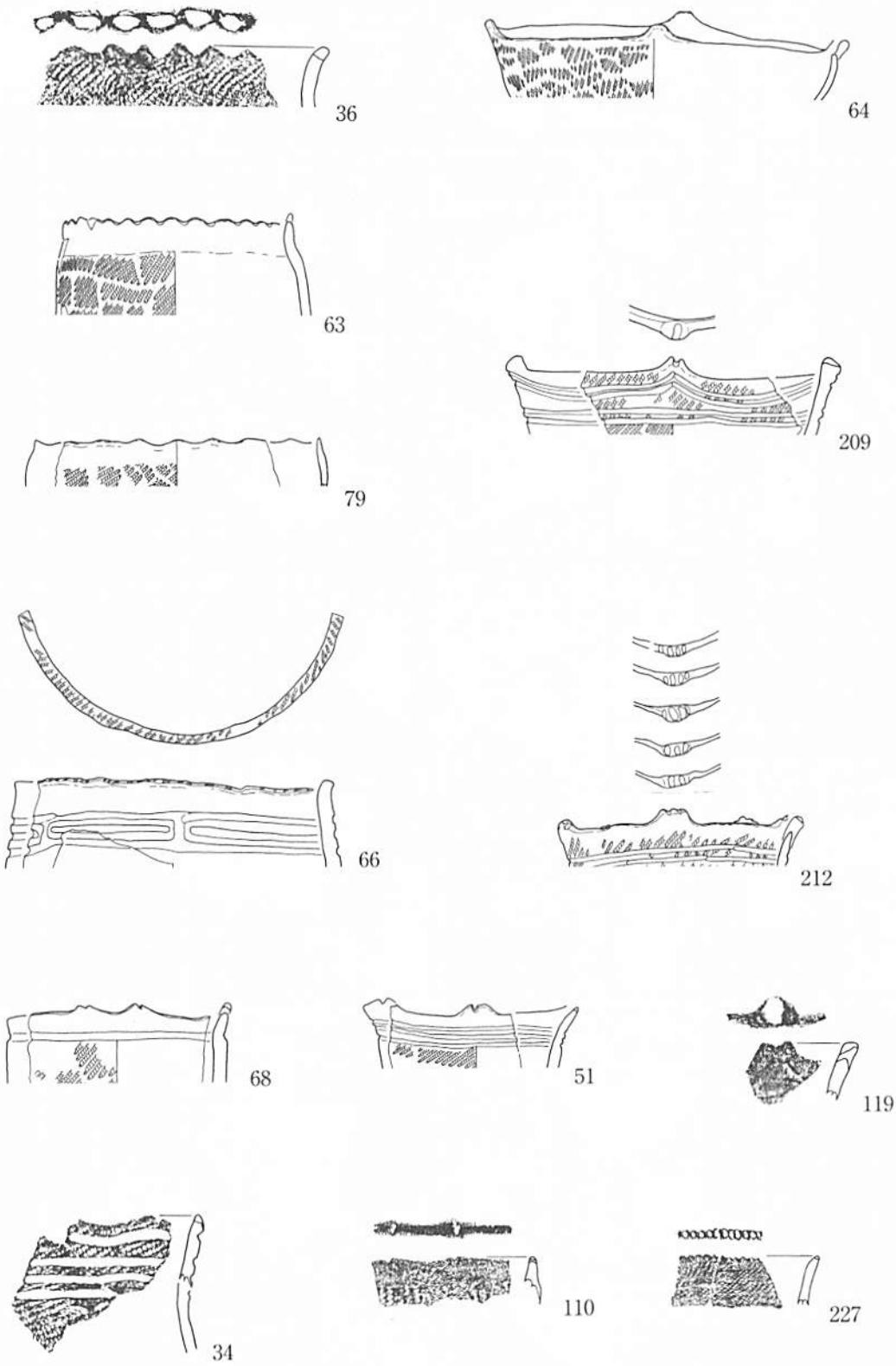
本遺跡の出土遺物は、大洞A～砂沢式にかけて出土していることが上記のようなことから明らかになった。今回本遺跡から検出された住居は、大洞A′式を主体とした時期に形成され、その前後する時期の遺物が確認できたと捉えられる。さらに、上記の分類作業において明確に区分されないが、6・10号住居までは一部大洞A式を残しながら大洞A′式を主体とし、新しい1号住居に移行する段階には砂沢式の新しい要素が若干認められるようになると考えられる。

3．石器製作技術

ここでは大洞A～砂沢式の石器製作技術について概観する。石器の出土数量が少ないため得られる情報は限定されるが、それらの把握を行ってみたい。この製作技術を把握するために、剥片の剥離角や背面構成、打面調整から試みた。ただしこれが全てでなく、剥片以外の器種においても分類項目が確認できれば抽出作業を行っている。


Ⅰ類
Ⅱ・Ⅲ類
Ⅳ類
Ⅴ類
Ⅵ類
2号住居
1号住居
6号住居
10号住居
7号住居
9号住居
3号住居
52
51
56
29
36
34
30
54
57
33
94
84
64
72
67
103
97
68
71
90
222
109
86
93
106
83
81
82
100
88
89
210
216
211
221
212
92
217
85
227
225
220
87
102
195
205
192
204
60

第53図　鉢類文様集成



第54図　口縁部集成

観察表中で分類した背面構成は、腹面と背面の剥離方向によって以下の通り３分類している。
Ⅰ類：背面と腹面の剥離方向が同一のもの。Ⅱ類：背面と腹面の剥離方向が反対のもの。Ⅲ類：背面に上下左右に剥離方向が確認されるもの。
・剥離角を計測できる石器は70点あり、平均の角度は102.3°で、66～134°の範囲にある。
・背面構成を確認できる石器は175点あり、Ⅰ類85点（49％）・Ⅱ類25点（14％）・Ⅲ類65点（37％）に分類される。
・打面を観察できる石器は70点ある。確認できた打面は、線状の打面は11点 打面が１面のものは53点、打面調整が行われ２面以上のものは６点ある。

以上の分類から石器製作技術についてまとめておく。基本的には剥片剥離は、剥離を行うための打面を確保した後、打面調整を行わず一定方向からある程度連続して作業を行う。一定の打面から剥片剥離が行えなければ、上下左右に打面を転移させる。また剥離角が一定していないことから、一つの打面ないし作業剥離面の状況において剥片剥離を継続して行う頻度は多くはないものと思われる。このことからは剥片剥離工程には定形剥片を目的とした一定の技術は存在せず、剥片そのものを獲得する事のみを目的としているように看取される。

また、剥離角がなくてもはその剥片獲得作業を行っていることや石核が存在せず小さな剥片が多いことから、集団が獲得している石材の制約が存在していたために、このような技術を採用せざるを得なかったとも考えられる。今後は、当該期の遺跡との比較によりこれらのことを明らかにし、石器製作技術などを検討していく必要がある。

４．竪穴住居

本遺跡の成果から段丘の縁辺部に竪穴住居（以下、住居とする）８棟が重複している状況を確認できた。その中で３号→11号→９号→７号→10号→６号→１号→２号住居という形成段階を捉えることができた。この変遷の中で共通して確認できたことは住居の平面プランが楕円形を呈することと、確認できた炉が石囲い炉ということである。基本的には住居１棟のみで形成されたもので、同時期に平行して住居は存在していた可能性は低い。このことは、金子氏（2001）が「基本的には晩期の集落はまとまりがなく、住居１棟の集落の時間的累積によって形成され、複数の住居が関連して構造をなすものは少ない」と指摘していることと合致しており、本遺跡の様相もそれと同様の傾向にある。

５．おわりに

今回は縄文時代の草創期・早期から中期末にかけての土器や石器、縄文時代晩期末から弥生時代初頭である大洞A′から砂沢期にかけての小規模集落が確認された。その中で竪穴住居の変遷により、若干ではあるが土器型式の変化が認められたことは大きな成果と思われる。しかし今回まとめるにあったては良好な資料を得られたにもかかわらず資料に対して言及できず、担当調査員の力量不足から遺物を羅列し、ただそれに終始してまってしたのは極めて残念であった。

最後になりましたが今回本報告をまとめていくにあたって、御指導ご鞭撻を頂いた職場の先輩や同僚、拙い指示を聞いていただいた室内作業員の方に大変にお世話になりました。末筆ながら感謝申し上げます。

[参考文献]

(岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターを岩文埋と表記する。)

岩文埋1983『馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第99集

岩文埋2001『宮沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第358集

岩文埋1983『君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第62集

岩文埋1986『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第100集

岩文埋1986『駒板遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第98集

岩文埋1997『和当地Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第259集

浄法寺教育委員会2001『上杉沢遺跡』

利部修・和泉昭一1990『鐵訪台C遺跡』秋田県教育委員会

青森県教育委員会1997『宇田野(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第217集

山形県埋蔵文化財センター1997『北柳1・2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第48集

弘前市教育委員会1988『砂沢遺跡発掘調査報告書ー図版編ー』

鈴木克彦編1988『名川町剣吉荒町遺跡(第2地区)発掘調査報告書』青森県立郷土館

工藤竹久1977「北日本の石槍・石鏃について」『北奥古代文化』第9号

工藤竹久1977「東北北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』第72巻第4号

白石浩之2001『石槍の研究ー旧石器時代から縄文時代初頭にかけてー』ミュゼ

東北日本の旧石器文化を語る会2002『第16回東北日本の旧石器文化を語る会予稿集』

日本考古学協会盛岡大会2001『亀ヶ岡文化ー集落とその実態 晩期遺構集成』

関西縄文文化研究会2002『縄文時代の石器』第4回関西縄文研究会

青森県立郷土館1997『馬淵川流域の遺跡調査報告書』青森県立郷土館調査報告書第40集

金子昭彦2001『岩手県における縄文時代晩期の遺跡 付代表的な集落遺跡の検討』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要XX

金子昭彦2001「岩手県における縄文時代晩期の遺跡」『亀ヶ岡文化ー集落とその実態ー』日本考古学協会盛岡大会

高瀬克範2001「東北地方弥生時代前・中期の集落」『物質文化』第68号

高瀬克範2000「東北地方における弥生土器の形成過程」『国立博物館研究報告』第83集

高瀬克範2000「東北弥生社会の住居と居住単位」『古代文化』第51巻9号

高瀬克範・山口遂1999「浄法寺町上杉沢遺跡における縄文時代終末期及び弥生時代の土器」『岩手考古学』第11号

小田野哲憲1988岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要Ⅷ

小田野哲憲1993「東北北部縄文時代末期・弥生時代初頭の遺構と遺物」『古代文化』第95号

小田野哲憲1987「岩手の弥生式土器編年論」『岩手県立博物館研究報告』第5号

岡田康博1988「東北北地方の弥生式土器の編年について」縄文検討会

須藤隆1997「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』第89輯

須藤隆1970「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』第56巻2号

須藤隆1987「東北地方の初期弥生土器ー山王Ⅲ層式ー」『考古学雑誌』第68巻3号

佐藤嘉広1989「東北地方北部における弥生文化期の様相」『岩手県立博物館研究報告』第5号

佐藤嘉広1992「東北地方における遠賀川系土器の受容と製作」『東北文化論のための先史学・歴史学論集』

仲田茂司1991「東北地方南部における縄文文化の終焉と弥生文化の成立」『北奥古代文化』第21号

国立歴史民族博物館1997『農耕開始期の石器組成３』国立歴史民族博物館資料調査報告書７

工藤竹久・高島芳弘1986「是川中居遺跡出土の縄文時代終末期から弥生時代の土器」『八戸市博物館紀要』第２号

利部修1990「諏訪台Ｃ遺跡のⅠ・Ⅱ類の土器群」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第５号

弘前大学教育学部考古学研究室1981「牧野Ⅱ遺跡出土遺物について（Ⅰ）－岩木山麓の縄文時代終末期の土器資料－」『弘前大学考古学研究』１

青森山田高等学校考古学研究会1994『撚紋文』第21号

第Ⅶ章　自然科学分析

玉川向遺跡出土埋設土器胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

玉川向遺跡（岩手県九戸郡軽米町大字軽米第17地割字玉川向平に所在）は、小玉川支流のウチナイ沢右岸の河岸段丘上（標高約350m前後）に位置する。発掘調査により、段丘上位で縄文時代の陥し穴・埋設土器・焼土遺構・土坑が、また段丘先端で竪穴住居跡・住居状遺構などが検出されている。

今回、調査区内で検出された縄文時代の埋設土器、および同一の弥生時代住居址内にみられた２つの埋設土器の用途・内容物推定を行うため、土器内土壌について土壌理化学分析と微細遺物分析を行う。

１．試料

調査は、縄文時代の埋設土器１基と弥生時代の同一住居址から出土した埋設土器２基について行う。縄文時代の埋設土器は、倒立した状態であるが、底部が削平を受けた状態で出土している。この内部の充填した土壌が試料として1点（試料番号1）採取された。一方、弥生時代の住居址では、2点の埋設土器が認められた。そのうち、1点の土器（453）は、倒立した状態で検出されている。もう1点の土器は、横位であり、その内部に入れ子（452）が認められている。試料として、埋設土器（453）内に充填した土壌1点（試料番号2）と土器（452）内に充填した土壌1点（試料番号3）が採取された。

以上、土壌理化学分析および微細遺物分析を行う試料は合計3点である。これらの分析試料は、いずれも黒色を呈し、土質が埴壌土（CL）よりなる。

２．分析方法

（１）微細遺物分析

土壌試料各400ccを水に一晩液浸し、試料の泥化を促す。0.5㎜の篩を通して水洗し残渣を集め、双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な植物遺体等を抽出する。植物遺体の形態的特徴から種類を同定する。分析後の植物遺体等は、種類毎にビンに入れ、50％エタノール溶液による液浸保存をおこなう。

（２）土壌理化学分析

今回測定する成分は、特に動物の体組織や骨に多く含まれるリン酸の含量測定を行う。リン酸は、骨に多量に含まれ、土壌中に固定されやすい性質がある。そのため、遺体が埋葬されると土壌中にリン酸の富化が認められることから、遺体あるいは遺骨の痕跡を推定することができる。また、リン酸の供給源としては植物体もあげられる。植物由来のリン酸成分が供給された場合、リン酸含量よりも腐植含量が高くなる。よって、植物体の影響を調べるために腐植含量も測定する。

リン酸は硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法、腐植はチューリン法で分析する（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に各項目の具体的な操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、５時間）により測定する。風乾細土試料の一部を粉砕し、0.5㎜φのふるいを全通させる（微粉砕試料）。

風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、硝酸約５mlを加えて加熱分解する。放冷後、

過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P_2O_5）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりのリン酸含量（P_2O_5mg/g）を求める。

また、微粉砕試料0.100～0.500ｇを100ml三角フラスコに正確に秤りとり、0.4Nクロム酸・硫酸混液10ml　を正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に５分間煮沸する。冷却後、0.2％フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2N硫酸第１鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量（Org-C乾土％）を求める。これに1.724を乗じて腐植含量（％）を算出する。

３．結果

（１）微細遺物分析

結果を表1に示す。篩別後の各残渣からは、オニグルミが検出されたほか、炭化材、菌類の菌核（おそらく樹皮の表面に付着していた肉座菌などが考えられる）が検出された。また、試料番号1からはヒユ科が、試料番号3からは土器片が検出された。なお、木材組織が確認されない、部位・種類共に不明である炭化物を不明炭化物とした。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴を記す。

・オニグルミ（*Juglans mandshurica Maxim. subsp. Sieboldiana* (Maxim.) Kitamura）

クルミ科クルミ属

核の細片が検出された。完全に炭化しており、黒色。大きなもので5㎜程度。完形ならば広卵形で先端部分がやや尖り、1本の明瞭な縦の縫合線がある。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。核皮は硬く、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走りごつごつしている。試料は、表面に溝状の浅い彫紋がある点と、内部の隔壁の一部が残る点を同定根拠とした。

・ヒユ科（Amarantaceae）

試料番号1から種子が1個体検出された。黒色で種皮が硬いため炭化の有無は不明。円盤状でやや偏平。径1㎜程度。縁は稜状。基部は凹み、臍がある。種皮表面には臍を取り囲むように微細な網目模様が同心円状に配列し、光沢がある。

表１　微細遺物分析結果

番号	遺　構	種類名	部位	個数・状態		備　考
1	縄文時代埋設土器	オニグルミ	核	破片	炭化	底部が削平された倒立土器内土壌
		ヒユ科	種子	1		
		炭化材		破片	炭化	
		不明炭化物		破片	炭化	
		菌核		24		
2	弥生時代住居内埋設土器453	オニグルミ	核	破片	炭化	倒立土器内土壌
		炭化材		破片	炭化	
		不明炭化物		破片	炭化	
		菌核		4		
3	弥生時代住居内埋設土器452	オニグルミ	核	破片	炭化	横位にした土器にある入れ子内土壌
		炭化材		破片	炭化	
		菌核		10		
		土器		破片		

堆積物400ccに含まれる植物遺体等を示す

（２）土壌理化学分析

結果を表2に示す。分析の結果、腐植含量が5.65～8.26％、リン酸含量が2.30～3.35P_2O_5mg/gの測定値が得られる。

番号	遺　構	土性	土色	腐植含量（％）	P_2O_5（mg/g）	備　考
1	縄文時代埋設土器	CL	10YR2/1 黒	5.93	3.35	底部が削平された倒立土器内土壌
2	弥生時代住居内埋設土器453	CL	10YR2/1 黒	5.65	2.57	倒立土器内土壌
3	弥生時代住居内埋設土器452	CL	10YR2/1 黒	8.26	2.30	横位にした土器にある入れ子内土壌

注1）土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。
注2）土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編，1984）の野外土性による。CL…埴土壌（粘土15～25％、シルト20～45％、砂３～65％）

4．考察

微細遺物分析の結果、試料番号1から1個体のみ検出された草本のヒユ科は、開けた草地に生育する、いわゆる「人里植物」であることから、集落周辺の明るく開けた場所に生育していたものに由来すると思われる。ただし、低湿地遺跡など特別な場合を除けば炭化していない限り種子は残らないと言ってよく、解析に関して炭化種子以外を除外して考えた方が妥当だという意見もある（吉崎，1992）。ヒユ科は縄文時代も本遺跡周辺に生育していたと思われるが、今回得られた種子試料は炭化の痕跡が明瞭でないため、遺構が埋没する過程で混入した後代のものである可能性もある。

また、各試料からは炭化したオニグルミが検出された。オニグルミは、谷部など水湿のある場所に好んで生える落葉高木で、堅果がアク抜きをせずに食べられ、長期保存が可能で収量も多いため、古くから里山で保護、採取されてきた種類である。本遺跡周辺で入手しやすい種実であったと考えられ、持ちこまれ食料に利用されていた可能性がある。オニグルミが完全に炭化し、破損した状態で土器内から検出されたことを考慮すると、利用後に何らかの理由により火熱を受けた後、人為的により遺構にもたらされた可能性がある。なお、埋設土器への遺体埋納を直接的に示唆する骨片や副葬品などが認められない。

また、今回分析対象としたすべての試料で、腐植含量は、土色が黒色を呈していることに示されているように、5.65～8.26％と高い測定値である。分析試料中に炭化した植物遺体が多く検出されていることから、今回測定した試料では、植物遺体に由来する土壌腐植が高いことがわかる。特に、土器452内に充填した土壌では、腐植含量が最も高いことから、植物体の影響が強く現れているとみなすことができる。

一方、リン酸含量は、2.30～3.35P_2O_5mg/gを示す。土壌中に普通に含まれるリン酸量、いわゆる天然賦存量は、Bowen（1983）、Bolt & Bruggenwert（1980）、川崎ほか（1991）、天野ほか（1991）などの報告例がある。これらの事例から推定される天然賦存量の上限は、約3.0P_2O_5mg/g程度である（なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここでは全てP_2O_5mg/gで統一している）。この観点に基づくと、弥生時代住居址から出土した埋設土器内充填土壌のリン酸含量は、土器452と土器453とも天然賦存量の範囲内である。このことから、両土器内とも外的要因によってリン酸が富化されていると言えず、その内部に動物遺体が埋納されていた痕跡を認めることができない。これに対して、縄文時代の埋設土器では、リン酸含量が天然賦存量の上限を越えていることから、外的要因によってリン酸が富化されていると考えられる。ただし、縄文時代の埋設土器は、後代の撹乱によって削平されている。そのため、ここで認められたリン酸の富化も、後代の撹乱の影響を受けていることも考えられ、今回の測定値が遺体埋納を直接的に示すとは現段階では断定できない。

以上、今回の分析調査の結果、弥生時代住居址から出土した埋設土器では、骨や副葬品などの遺物が検出されず、さらに土壌理化学性からも遺体が埋納されていたという痕跡を認めることができなかった。一方、縄文時代の埋設土器では、リン酸含量が高いものの、後代の撹乱の影響を強く受けていることから、動物遺体が埋納されたと断定するにはいたらなかった。人為的に遺体が埋納されると、土壌の理化学成分が偏在することが知られており（例えば、小山，1995：中根，1992：中根・馬場，1995：パリノ・サーヴェイ株式会社，1999など）、またアラキジン酸（C20）・ベヘン酸（C22）・リグノセリン酸（C24）などの高級脂肪酸の検出とコレステロール・コプロスタノールの多産する事例が報告されている（例えば、小山，1995：中野，1993,1995）。したがって、さらに縄文時代の埋設土器内に遺体が埋納されているか検証するためには、埋設土器周辺土壌のリン酸含量の測定や残留脂肪酸の測定などを行うことが望まれる。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.

Bowen,H.J.M.（1983）「環境無機化学 －元素の循環と生化学－」．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，博友社［Bowen,H.J.M.（1979）Environmental Cemistry of Elements］.

Bolt,G.H. & Bruggenwert,M.G.M.（1980）「土壌の化学」．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳，p.235-236，学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976)SOIL CHEMISTRY］.

土壌養分測定法委員会編（1981）「土壌養分分析法」．440p.，養賢堂.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23-27.

小山陽造（1995）東北地方の脂肪酸分析結果．考古学ジャーナル，386，p.17-21.

中根秀二（1992）１号方形周溝墓の自然科学的分析．「田園調布南２　都立田園調布高校内埋蔵文化財発掘調査報告書」，p.133-149，都立学校遺跡調査会.

中根秀二・馬場健司（1995）周溝内における埋葬位置について．北区埋蔵文化財調査報告第16集「豊島馬場遺跡（本文編）」，p.314-325，東京都北区教育委員会生涯学習推進課.

中野益男（1993）脂肪酸分析法．「第四紀試料研究法２　研究対象別分析法」，p.388-403，東京大学出版会.

中野益男（1995）脂肪酸分析の現状と課題．考古学ジャーナル，386，p.2-8.

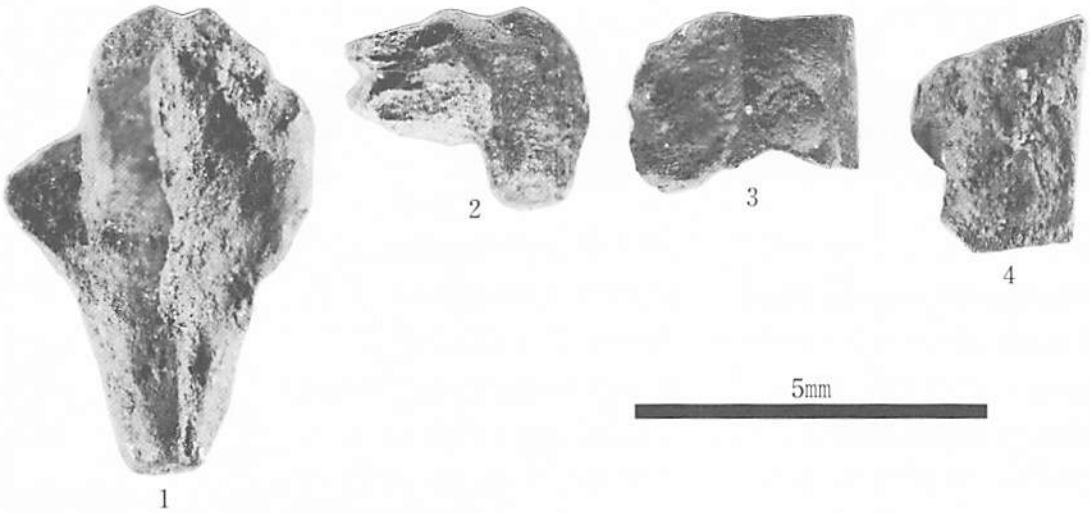
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1999）豊島馬場遺跡の自然科学分析．北区埋蔵文化財調査報告第25集「豊島馬場遺跡Ⅱ」，p.312-331，東京都北区教育委員会生涯学習推進課.

ペドロジスト懇談会編（1984）「土壌調査ハンドブック」．156p.，博友社.

吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出．月刊考古学ジャーナル．No.355，p.2-14.

図版１　種実遺体



１．オニグルミ　核（試料番号3）
２．オニグルミ　核（試料番号3）
３．オニグルミ　核（試料番号2）
４．オニグルミ　核（試料番号2）

写真図版

Ⅵ層出土
槍先形尖頭器

写真図版１　航空写真

遺跡遠景

完掘状況

写真図版２　遺跡遠景、完掘状況

竪穴住居出土土器

遺構外出土遺物

写真図版３　竪穴住居・遺跡外出土遺物

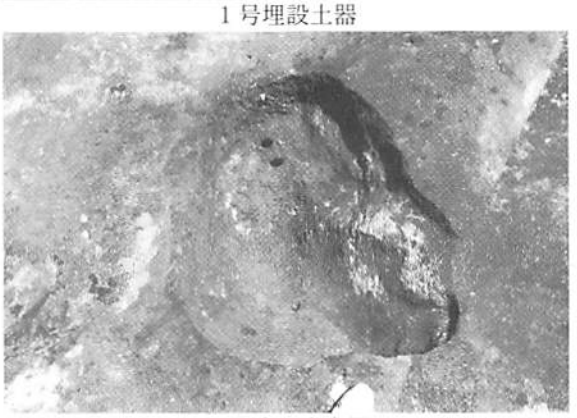
北斜面完掘状況

東斜面完掘状況

写真図版 4　完掘状況

1号埋設土器

1号埋設土器断面

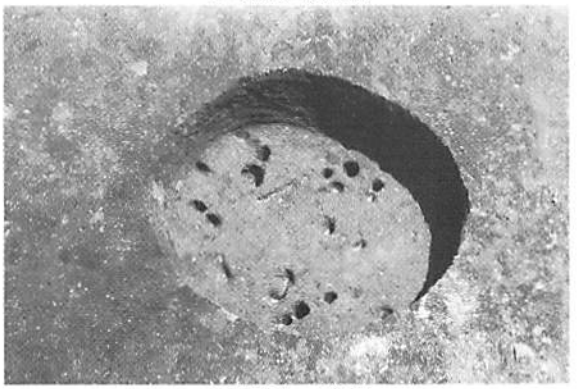


1号陥し穴完掘

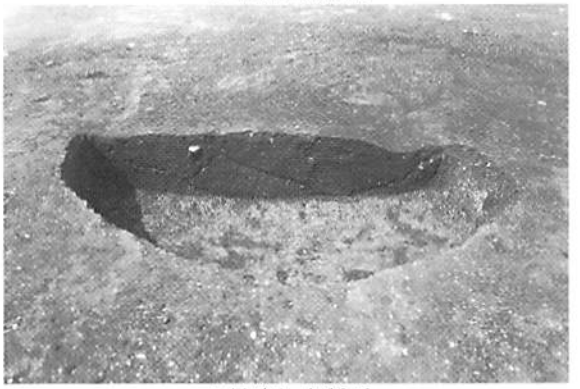
1号陥し穴断面

2号陥し穴完掘

2号陥し穴断面



3号陥し穴完掘

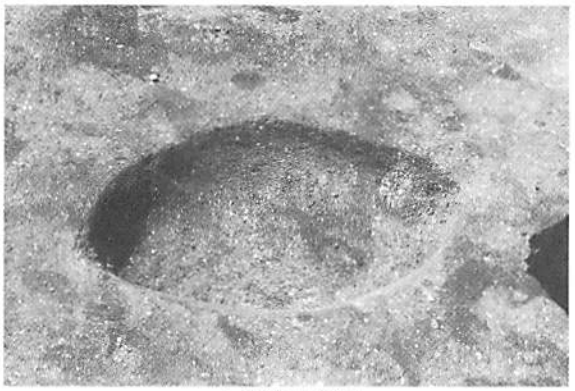


3号陥し穴断面

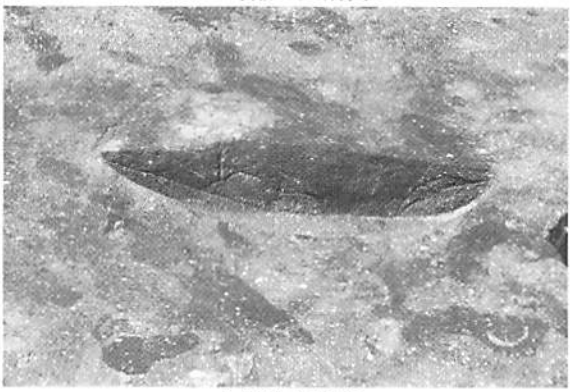
写真図版5　1号埋設土器、1～3号陥し穴

4号陥し穴完掘

4号陥し穴断面

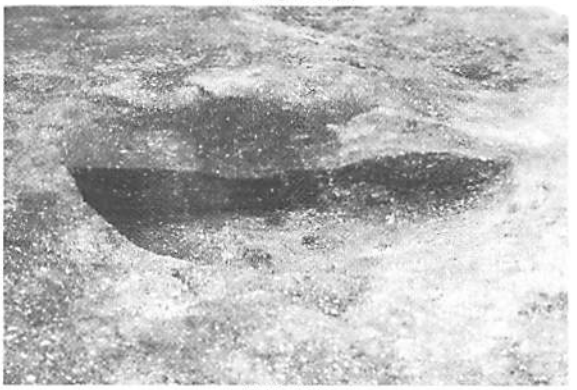


1号焼土完掘



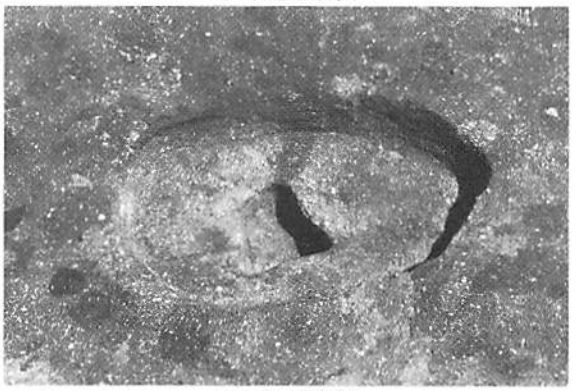
1号焼土断面

2号焼土完掘



2号焼土断面

1号土坑完掘

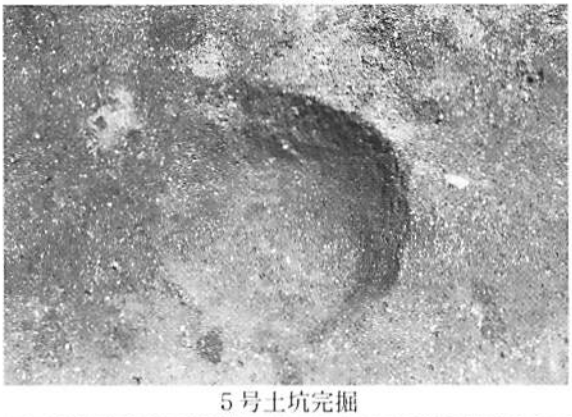


2号土坑完掘

写真図版6　4号陥し穴、1・2号焼土、1・2号土坑

4号土坑完掘

4号土坑完掘



5号土坑完掘

5号土坑断面

Ⅱ～Ⅳ層遺物出土状況遠景

Ⅱ～Ⅳ層遺物出土状況近景

写真図版７　３・５号土坑、遺構外遺物出土状況

1号竪穴住居完掘

2号竪穴住居完掘

写真図版8　1・2号竪穴住居完掘

3号竪穴住居完掘

1号竪穴住居断面

1号竪穴住居出土遺物

2号竪穴住居断面

3号竪穴住居断面

写真図版9　3号竪穴住居完掘、1・2・3号竪穴住居断面

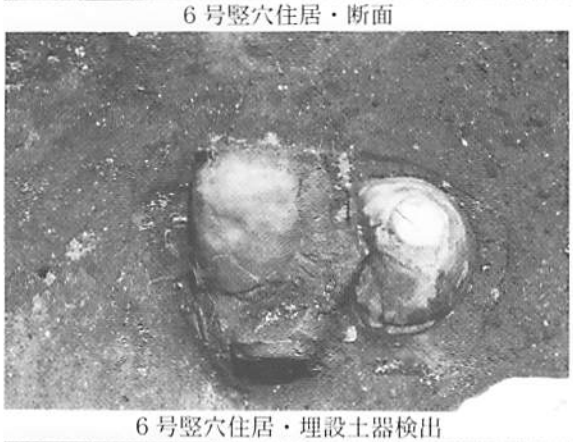
6 号竪穴住居・遺跡出土状況

6 号竪穴住居完掘

写真図版10　6 号竪穴住居遺物出土状況・完掘

6 号竪穴住居・断面

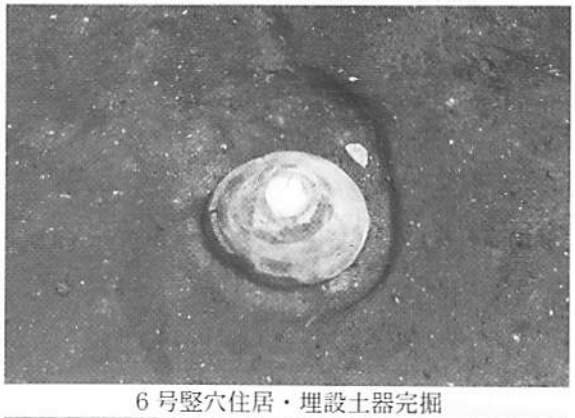
6 号竪穴住居・遺物出土状況



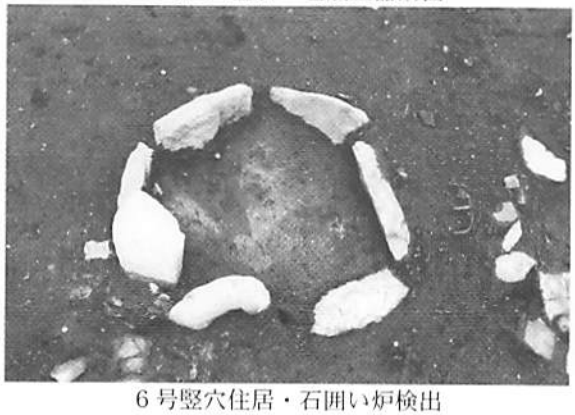
6 号竪穴住居・埋設土器検出

6 号竪穴住居・埋設土器入り子検出

6 号竪穴住居・埋設土器断面



6 号竪穴住居・埋設土器完掘



6 号竪穴住居・石囲い炉検出

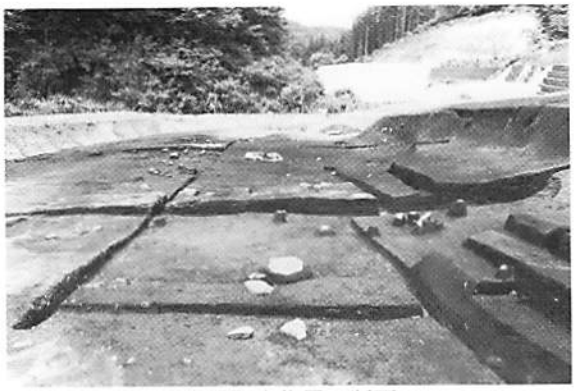
6 号竪穴住居・石囲い炉断面

写真図版11　6 号竪穴住居検出状況

7号竪穴住居完掘

9号竪穴住居完掘

写真図版12　7・9号竪穴住居完掘



7号竪穴住居・断面

9号竪穴住居・断面

10号竪穴住居・断面

10号竪穴住居完掘

写真図版13　7・9・10号竪穴住居断面、10号竪穴住居完掘

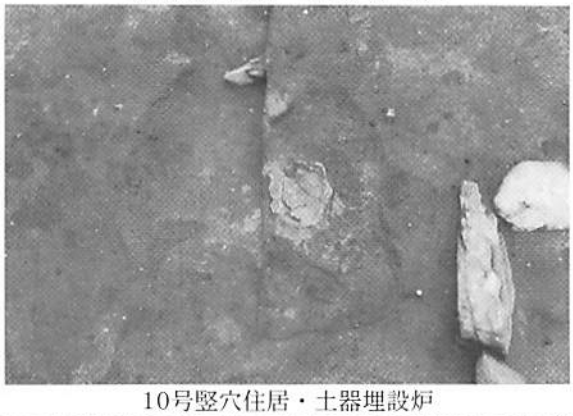
10号竪穴住居・遺物出土状況

10号竪穴住居・遺物出土状況

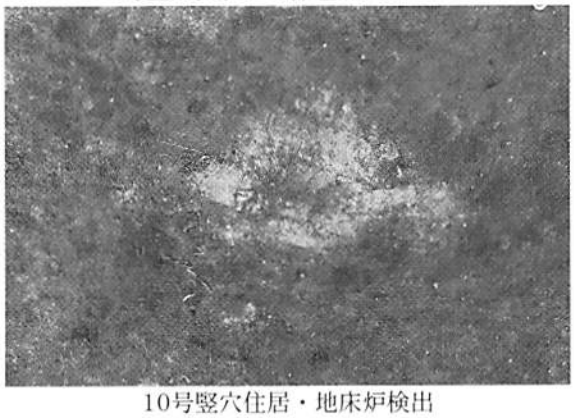
10号竪穴住居・石囲い炉

10号竪穴住居・石囲い炉断面

10号竪穴住居・土器埋設炉検出状況



10号竪穴住居・土器埋設炉



10号竪穴住居・地床炉検出

10号竪穴住居・地床炉断面

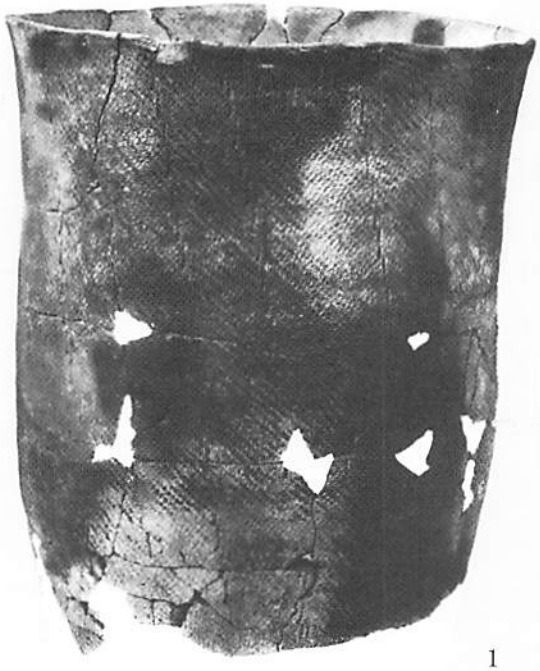
写真図版14　10号竪穴住居検出状況

11号竪穴住居完掘

11号竪穴住居断面

竪穴住居完掘

写真図版15　11号竪穴住居完掘・断面、竪穴住居完掘


1

2

5

9

4

6

7

8

16

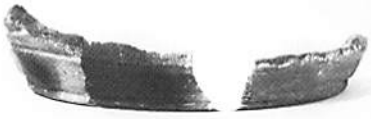
1.S=1/4，他.S=1/3

写真図版16　出土物(1)

3・10～15・17・18. S＝1/3
19～21. S＝2/3

写真図版17　出土遺物(2)

25



26

27

43

51

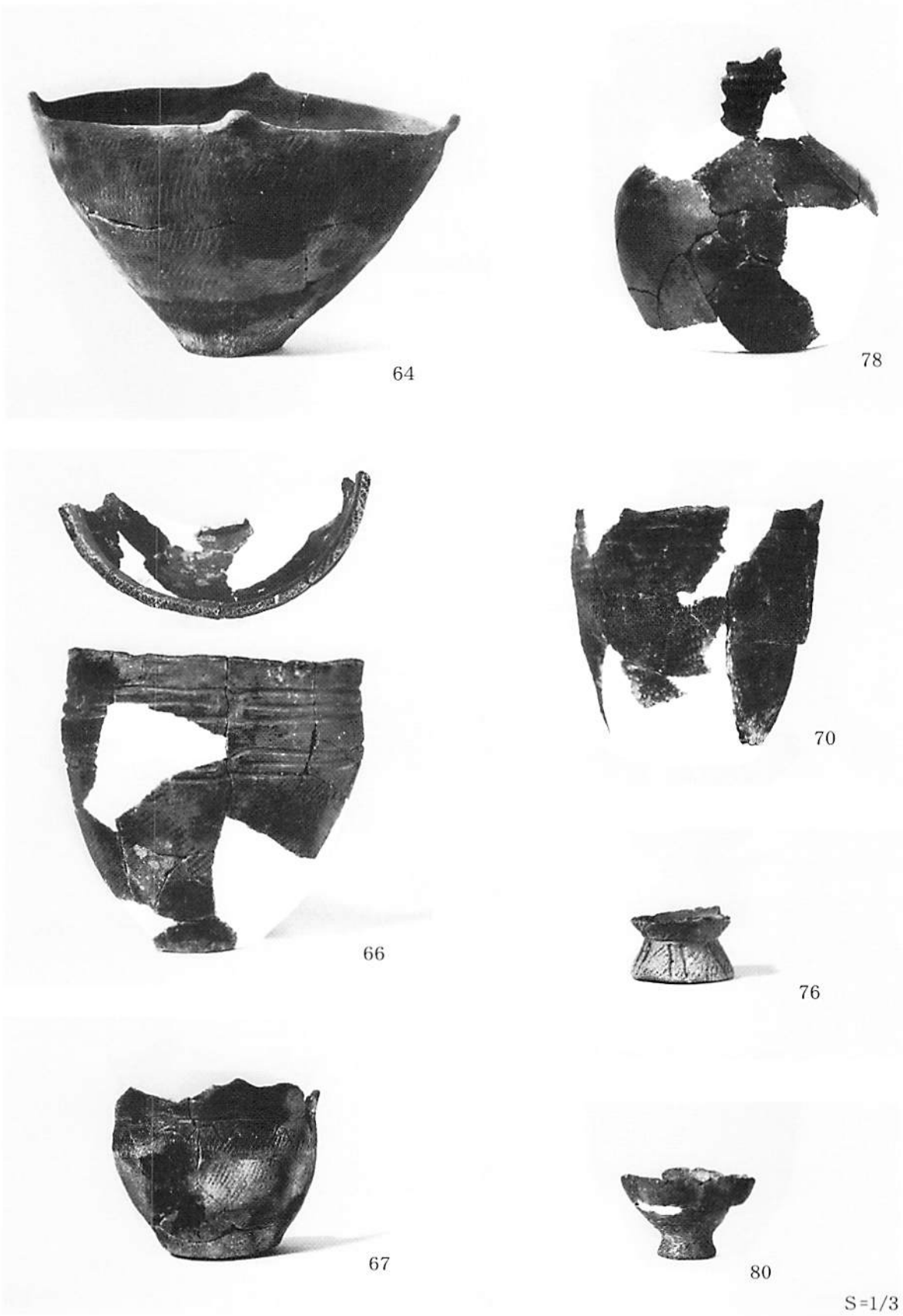
53

63

65

S=1/3

写真図版18　出土遺物(3)



写真図版19　出土遺物(4)

192

208

193

206

209

210

211

212

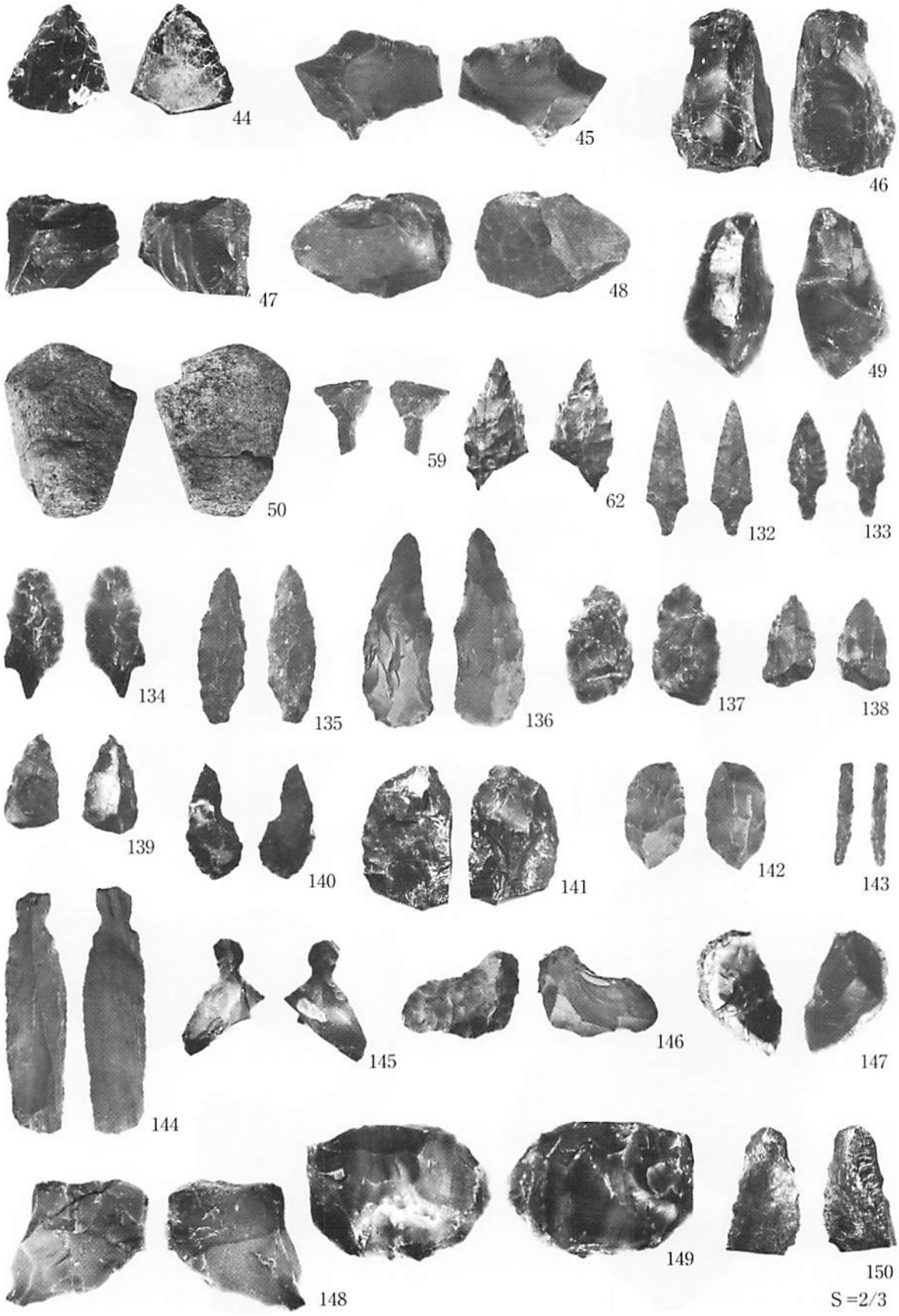
S=1/3

写真図版20　出土遺物(5)

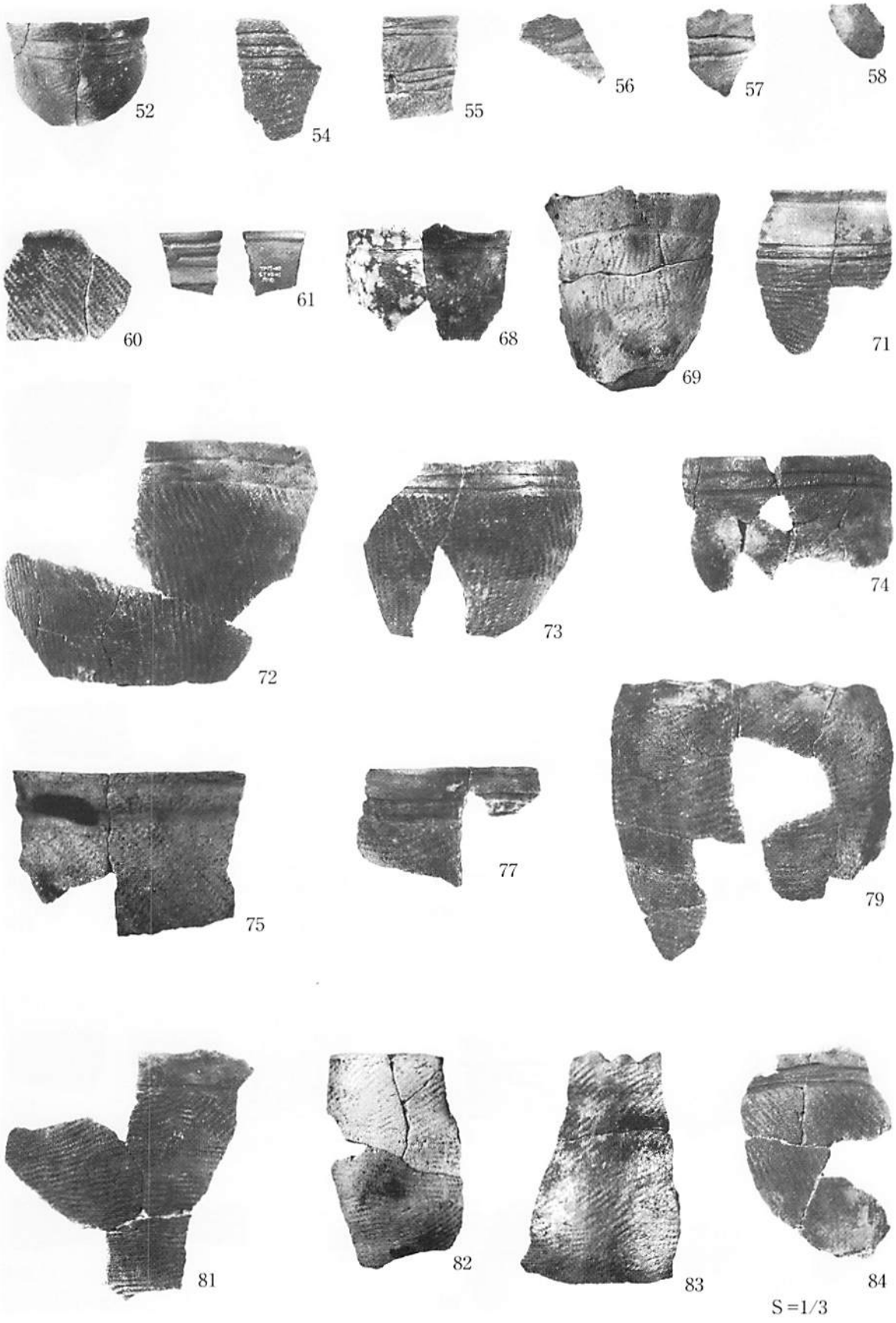
213

214

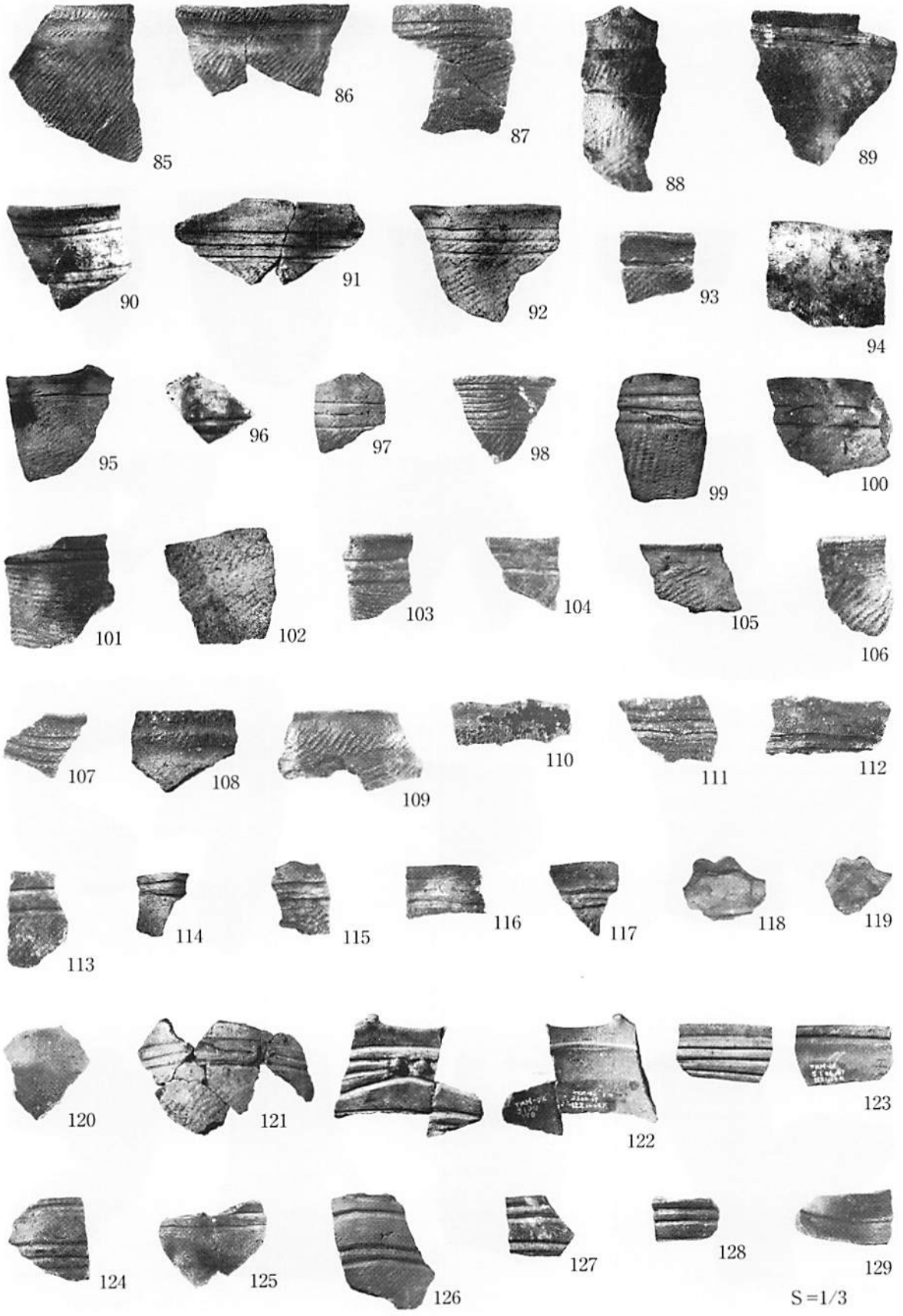
写真図版21　出土遺物(6)



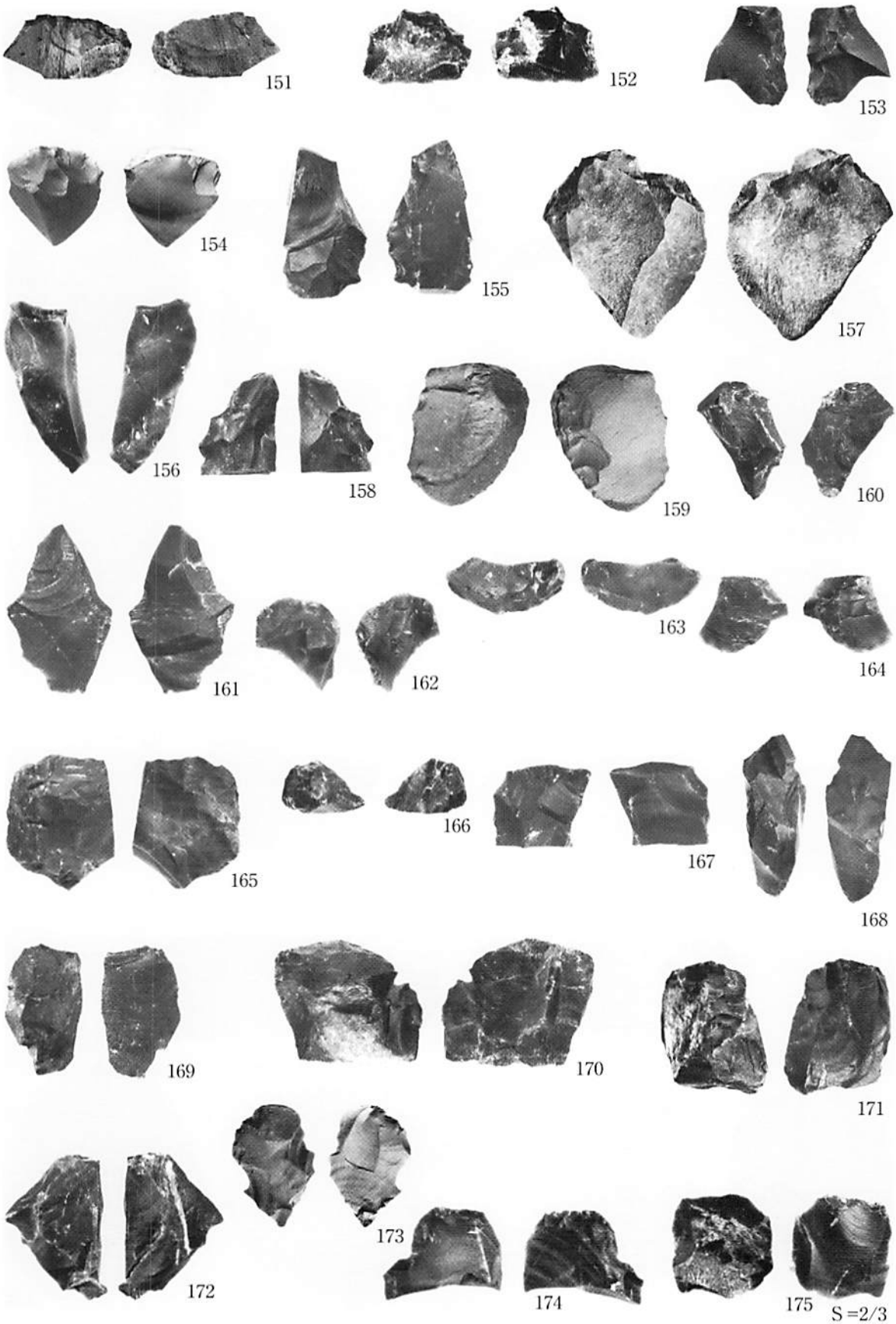
写真図版22　出土遺物(7)



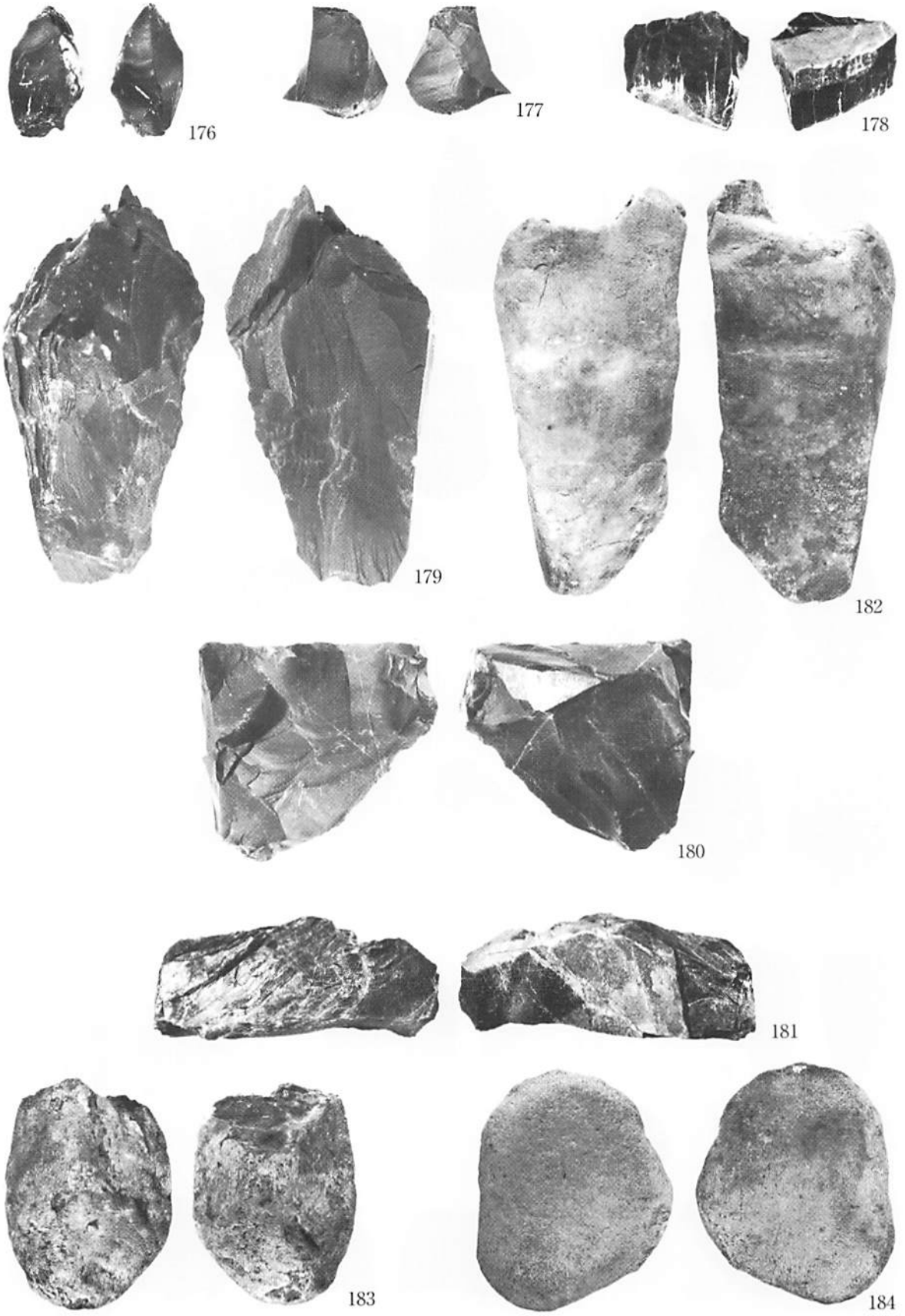
写真図版23　出土遺物(8)



写真図版24　出土遺物(9)

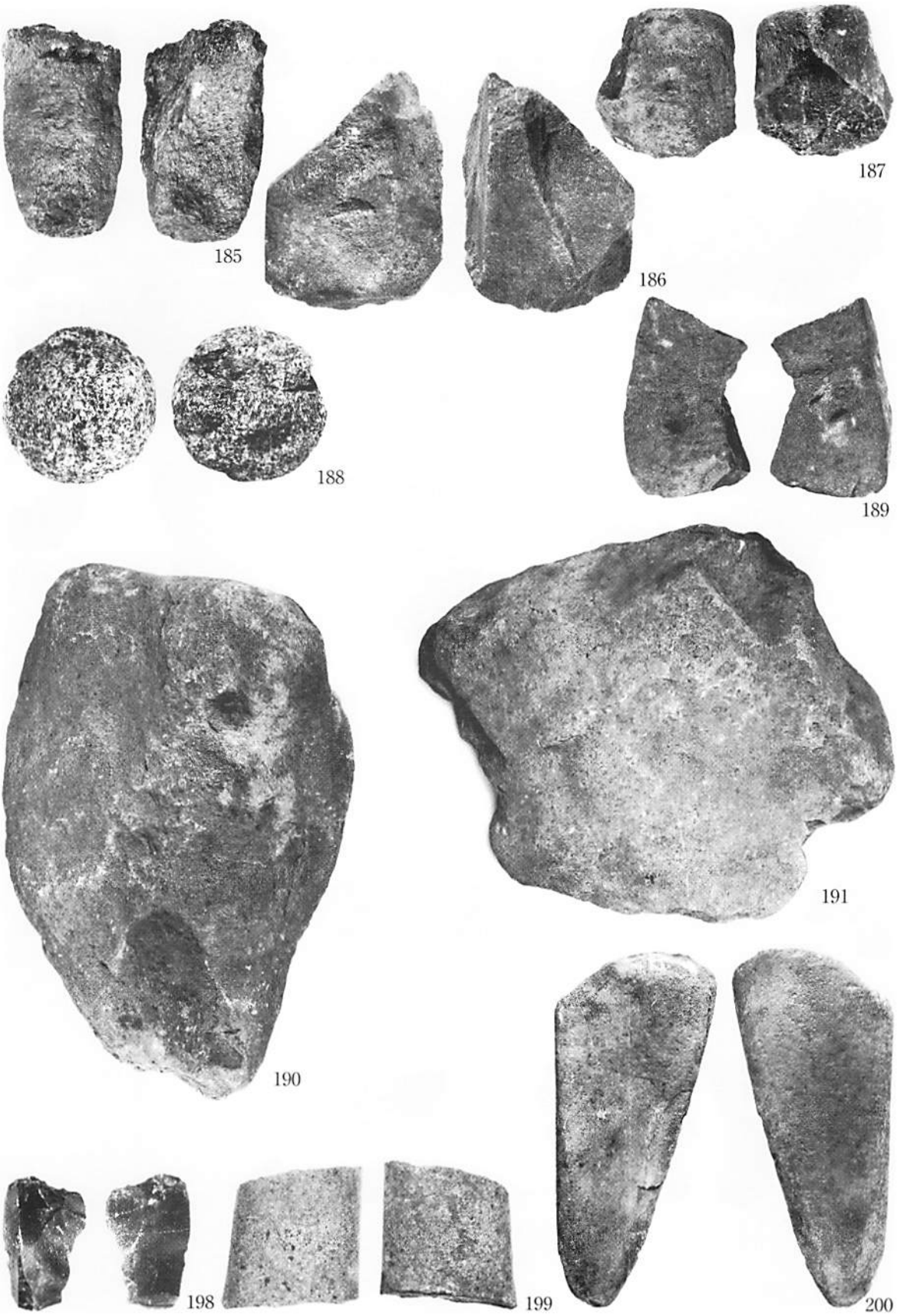


写真図版25　出土遺物(10)



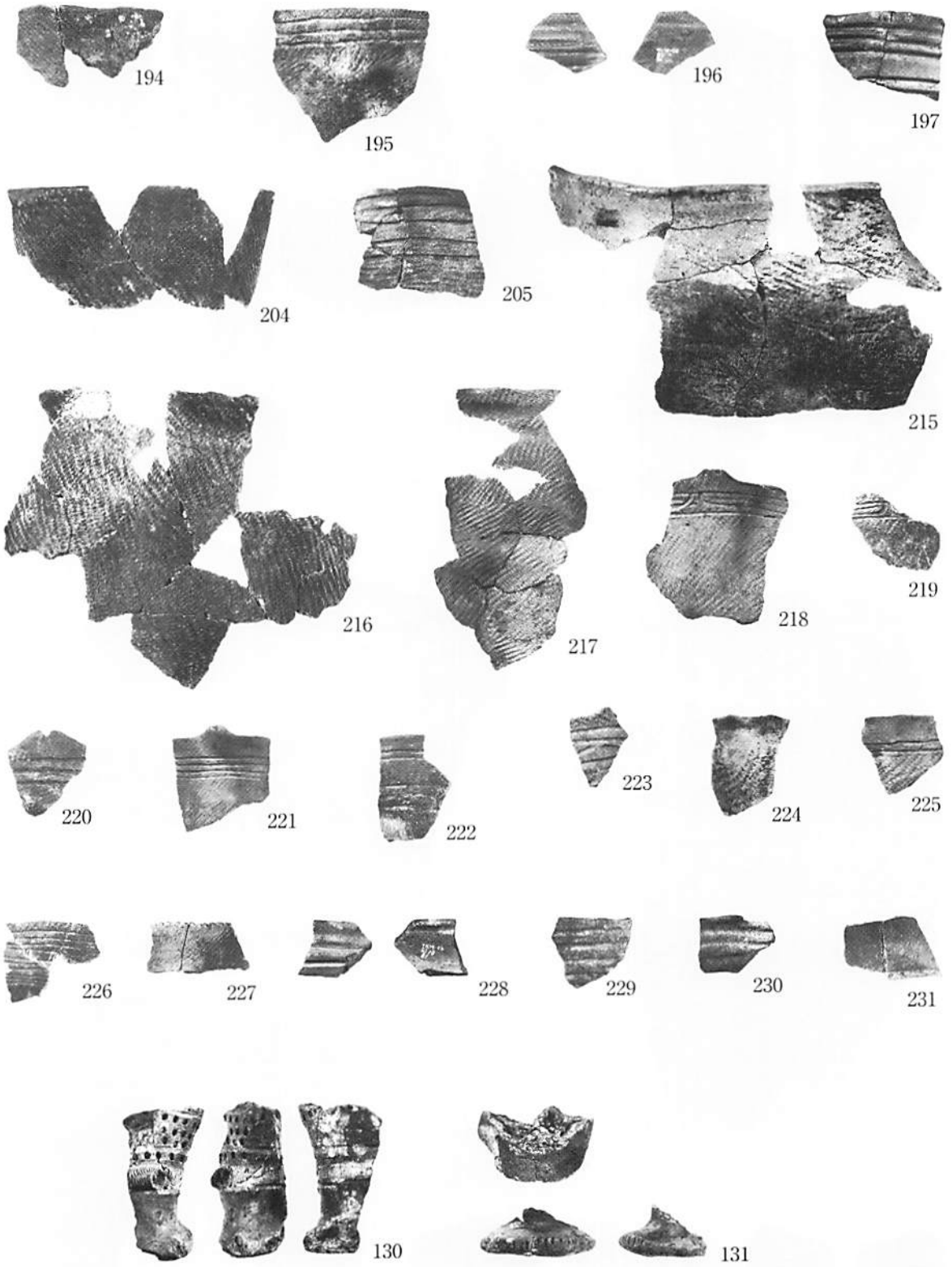
181～184. S=1/3
他. S=2/3

写真図版26　出土遺物(11)



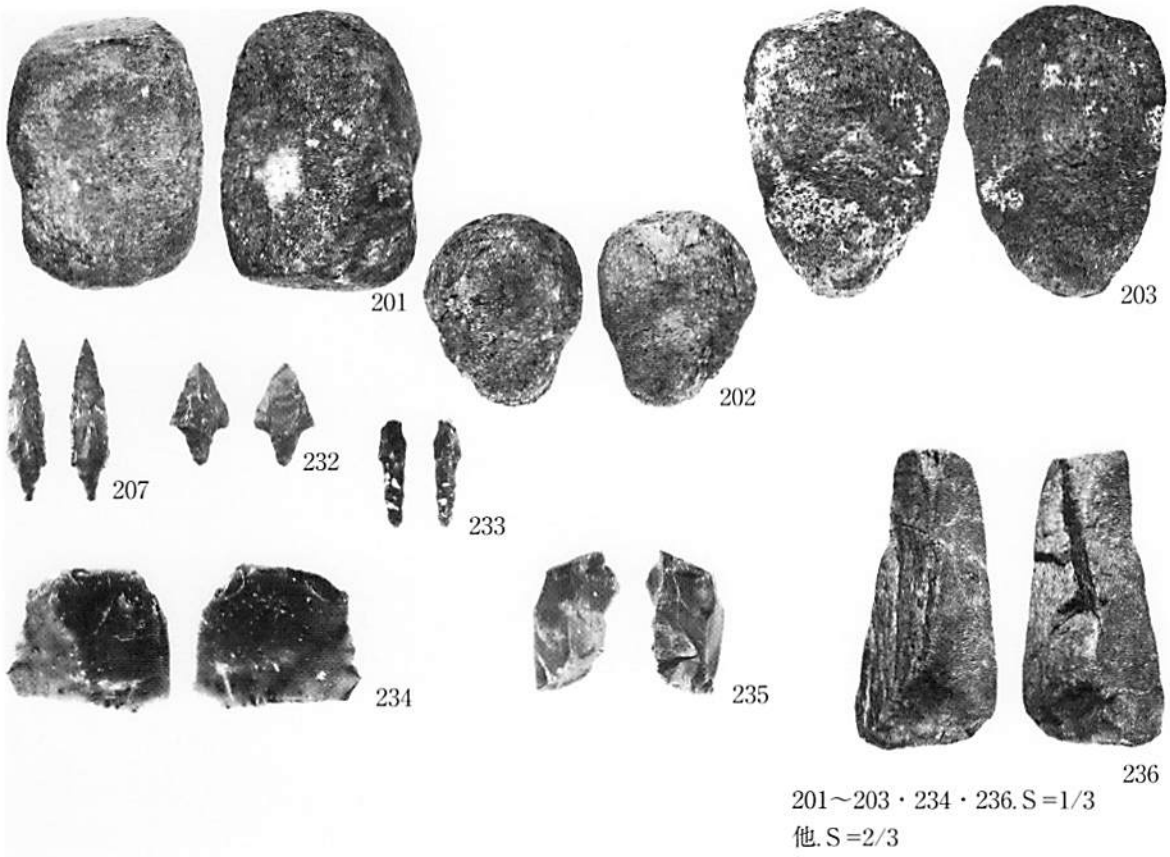
198・199.S=2/3、191.S=1/5
他.S=1/3

写真図版27　出土遺物(12)



S＝1/3

写真図版28　出土遺物(13)



201～203・234・236. S＝1/3
他. S＝2/3

写真図版29　出土遺物(14)

報告書抄録

ふりがな	たまがわむかいいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	玉川向遺跡発掘調査報告書
副書名	荒廃砂防事業関連発掘調査
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第４２６集
編著者名	村木　敬
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡１１－１８５　ＴＥＬ０１９－６３８－９００１
発行年月日	西暦2004年３月17日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
玉川向遺跡（たまかわむかいいせき）	岩手県九戸郡（いわてけんくのへぐん）軽米町（かるまいまち）大字小軽米第17地割（おおあざかるまいだい）字玉川向平85-1ほか（あざたまかわむかいひら）		JF15-0344	40°14′13″	141°34′45″	2002.4.17～6.17	1,000㎡	荒廃砂防事業に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
玉川向遺跡		縄文時代草創期～中期末	埋設土器１基・陥し穴４基・焼土遺構２基・土坑４基	土器・石器	縄文時代草創期と早期の槍先形尖頭器と磨製石斧が出土。
	集落跡	縄文時代晩期末～弥生時代初頭	竪穴住居８棟	土器・石器・土製品	

平成15年度　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所　長　木村　昇
副所長　平野　允苗

〔管理課〕

課　長　韮澤　正吾
課長補佐　山岸　直美
主　査　中嶋　賢一
主　事　狼橋　幸子
嘱　託　高橋　照雄
〃　湯沢　邦子
〃　沼田　テル子
〃　伊藤　滋子

〔調査第一課〕

課　長　佐々木　勝
課長補佐　佐々木　清文
文化財専門員　金子　昭彦
文化財調査員　吉田　充
〃　亀　大二郎
〃　野中　真盛
〃　新妻　伸也
〃　阿部　勝則
〃　杉沢　昭太郎
〃　西澤　正晴
〃　村木　敬
文化財調査員　北村　忠昭
〃　八木　勝枝
〃　丸山　浩治
〃　北田　勲
〃　島原　弘征
期限付調査員　坂部　恵造
〃　小林　弘卓
〃　藤原　大輔
〃　小針　大志
〃　太田代　一彦
〃　新井田　えり子

【調査第二課】

課　長　三浦　謙一
課長補佐　中川　重紀
〃　高橋　義介
文化財専門員　小山内　透
〃　金子　佐知子
〃　濱田　宏
文化財調査員　赤石　登
〃　阿部　眞澄
〃　水上　明博
〃　阿部　憲
〃　早坂　淳
〃　小松　則也
〃　阿部　徳幸
〃　窓岩　伸吾
〃　亀澤　盛行
〃　飯坂　一重
〃　鈴木　裕明
〃　林　勲
〃　阿部　孝明
〃　羽柴　直人
文化財調査員　星　雅之
〃　佐藤　淳一
〃　星　幸文
〃　溜　浩二郎
〃　本多　準一郎
〃　丸山　直美
〃　福島　正和
〃　米田　寛
〃　須原　拓
〃　中村　絵美
〃　川又　晋
〃　村田　淳
〃　(村上　拓)
期限付調査員　斎藤　麻紀子
〃　石崎　高臣
〃　吉田　里和
〃　立花　裕
〃　江藤　敦
〃　駒木野　智寛

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第426集

玉川向遺跡発掘調査報告書

荒廃砂防事業関連遺跡発掘調査

印刷　平成16年３月15日
発行　平成16年３月17日

発行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　盛岡市下飯岡11地割185
TEL（019）638-9001
FAX（019）638-8563

印刷　第一印刷有限会社
〒020-0122　岩手県盛岡市みたけ四丁目6-40
TEL（019）646-6001

© ㈶岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター　2004